
東方ギャザリング

roisin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方ギヤザリング

【Nコード】

N9250U

【作者名】

roissin

【あらすじ】

よくあるオリ主の転生もの。カードゲーム『マジック・ザ・ギヤザリング』に書かれたカード効果を実際に引き起こす能力を貰って東方プロジェクトの世界へ。よっしゃチート三昧だと思ったけれど、使用には様々な制限が掛かっていて……。日々経験値を貯めて、使用制限を開放しつつ『俺TUEEE』を目指していきます。

ギヤザをご存知でない方にも、あまり悩まず見て頂ける様、考えながら執筆していますが、自己満足の域を出ていない箇所が多々あ

ります。ご了承ください。

Arcadia様へも掲載しています。

はじめに（前書き）

『東方プロジェクト』はご存知の方が多々いらっしゃるかと思いますが、カードゲーム『マジック・ザ・ギャザリング』は東方と比べれば、日本ではあまり知名度が低いと判断し、雰囲気だけでもお伝えできればと思い、youtubeにある動画『新たなファイレクシア（Japanese） / www.youtube.com/watch?v=6c4jCmAe9j4』へのアドレスを貼らせて頂きます。問題があれば即対応致します。

はじめに

注意

- 東方、MTG共に、設定が多々崩壊しています。
- 『東方×MTG（オリ主）』ですが、東方のキャラがMTGをプレイする訳ではありません。オリ主が各種呪文を作中で実行する、といったコンセプトにしていきます。

- 俺TUEEEで転生厨二チートなご都合主義にする予定です。ハーレムも出来れば目指したい。

- この世界で役に立ちそうなギャザのカードがありましたら、教えて頂けると嬉しいです。フリーバーテキストが、能力が、ストーリー背景が、絵柄が、など。どのような理由でも構いません。

他にもご意見やご指摘などありましたら、出来うるだけ速やかに対応したいと思います。宜しくお願い致します。

プロローグ へ前編 転生前

一定感覚で、電子音が響く。

心電図と呼ばれるそれは、黒いモニターに歪な光の線を生み出していた。

だが、それも徐々に弱くなっていった……。

振れ幅が少しずつ狭まり、その機械に繋がれている1人の命が消えかけていることを伝えていた。

（何てこった……怖すぎて笑いがこみ上げてくるなんて）

初めての経験に、男は戸惑いながらも状況を受け入れる。

——いや、受け入れざるをえなかった。

どこにでも居るような男だった。

一人っ子ではあったが、父親と母親の愛情で甘やかされながらも元気に育ち、小中高校と、中の下で成績で終業。

大学には魅力を感じず、これといってやりたい事もなかった。好きなものの延長線上にあった消防士……には成れずに、その関係である防災設備の会社に就職。

女性関係は見事に全滅。

顔も身長も並み以下で、若干の上がり症という事も相まって、今現在でもフラグの1つすら見出せていない。

友人も多くは無いが、1〜2週間に1度、3〜4人で集まっては、他愛のない会話や遊びで、笑ったり怒ったりを繰り返していた。

しかし、それも、もうすぐ終わる。

仕事中、廃屋となった工場から、リサイクル回収の為に運んでいた消火器が破裂。

長年の雨風で腐食した外壁が限界を迎えていて、それが運悪く彼の運んでいた時に臨界点を越えたのだった。

爆散するでなく、ロケット弾のように彼の体に当たったそれは、心臓と、続いて脳内に深刻なダメージを与えてしまった。

それから3ヶ月。

段々と弱くなる鼓動。それと連動するように微弱になる脳波。

心肺機能のみなら機械で代用出来るが、頭はそうはいかず。

原因不明の症状に、物珍しさもあつたのか、治療費は国が出す代わりに、モルモットのような状況が続く。

見舞いに来る知人、友人、親戚。そして、足しげく通う両親。

男はその事が堪らなく嬉しく、そしてそれ以上に、悲しみと恐怖が溢れて出てきていた。

時刻は夕方頃だろうか。窓から差し込み、沈んでゆく夕日が、まるで自分の命を表現しているかのような印象を、男に与える。

何か特別なイベントの日でもない……誰もが普通に過ごす1日。

そんな日に、男は両親に片方ずつ手を握られ、今まさに消えよう

としていた。

もはや、誰も一言も喋らない。ただ、握られた手が小刻みに震え、両親と、そして男の心を表していた。

怖い、悲しい、悔しい。

元氣になりたい、助かりたい、生きたい。

大声で泣き出したくなり……けれど薄れていく意識はそれすらも不可能で。

どうせ死ぬのだから、と、アニメや漫画を元に格好良いセリフを考えてはみるが、すぐさま不安で打ち消される。

（俺は、ヒーローの真似事すら出来ないのか……）

男の目から悔しさから涙が溢れる。けれど、最後なのだからと、全力で意識を強く保つ。

カッコいいセリフではないけれど、今の自分の気持ちを、せめて、この両親にだけは。

だから、もっと気力を。もっと意識を。もっと感情を。もっと――命を。

一言で良い。

それだけで良いんだ。

もうそれしか出来ないのだから。

いや、まだそれだけは出来るのだから。

今だけは、今この時だけは――

いままで ありがとう ございました

20××年○月×日 18:01

世界でまた1つ。命の火が消えた。

プロローグ へ後編 制約と条件

……… 一体なんだこれ。

俺は今、白いもやもやの列の1つと化していた。

幽霊？ 霊魂？ 人魂？

次々に疑問が浮かんでは消える。

しかし、それを解決しようにも体は動かず、言葉も出せない。

今さっき死んで、気が付いたら雲の上っぽいトコにいて、そして
らチャリに乗ったスーツ着た30台のリーマンに案内されて……

あの世って、存外俗物くさいところなのかもしれないな。

案内してくれた人も、どこにでも居そうなおっちゃんだったし。

「次の方、どうぞ」

事務的な男の声が響く。

もうこの際、日本語だとか鬼の角とか天使の輪は無いんだとか、
もう諸々の考えは捨てよう、うん。

ここはあの世。まさに世界が違うのだ。常識なんて、あつてない
ようなものだろう。

「では、以上の事に相違ありませんね」

2人きり。どこその面接部屋のような、広すぎず狭すぎず『これがオフィスです』と言わんばかりの素っ気の無い一屋。

そんな中で俺の履歴を読みあげた面接官のおっちゃん（仮名）は、こちらに確認を促してきた。

喋れはしないが意思は相手に伝わるようで、肯定の意を送ると、面接官はこちらに向かって1枚の紙を――

（うお！？ 紙、浮いてる！）

念力でも使ってるのか、滑るように空中を移動してきたそれは、俺の目の前で、見やすい位置にピタリと固定。

モヤモヤを見たり雲の平原を歩いたりしてきたが、やっぱり今までの常識から外れたものを見たら驚くわ。

読め……………ってことだよな。

どうやって浮いてるんだろ。

疑問は尽きないが、とりあえずその紙に目を通す。

そこは空欄だが、以下の文字が見て取れた。

名前………技能………身体数値………？

なにこれ？

「現在、冥界では靈魂受け入れ枠の削減を図っております」

あの世だつてのに変なトコ世知辛いですね。

「死後の世界は天国なら極楽だ、とか誰が言ったか分かりませんが、あんなの宗教家や死に不安を持つ他所の方の幻想です。かといって地獄という訳でもありませんけれどね」

さいですか。

「こつちも色々と苦勞あるんですよ。もう上司とかが………おほんつ。———それですね、ここ冥界は収容する靈魂の管理が追いつかなくなっております」

……え、まさか俺、消滅とかですか？

「いえいえ。結論だけ言いますと、靈魂の管理体制が整うまで、外で時間を潰しておいて欲しいんですよ」

よ、良かった。2連続も死ぬような体験しなくて。

「失礼しました。思慮が致しませんでした」

あ、えと、お気になさらず……。

「感謝します。長年やってますと、どうもこの仕事を事務的にこなす癖がついてしまって……」

分かります。俺が今ここにいるのもそれが原因みたいなものですし。

ま、それで死んでちゃ情け無い限りですが。

「ははは……心にとどめておきます」

嫌味のつもりは無かったんだが、ブラック風味な指摘になってしまった。

この面接官さんが言うのをまとめると、

？外で時間潰してきて

？出来る限りのサポートはするよ

？外の場所はこちらで決定します

？冥界へ戻るタイミングはそっちで決めて良いよ

？最低1億年は外に居てね。

ってことらしい。

？なんて条件出されたら人格消滅するわと思ったが、それは？で

何とかしてくれるんだとか。

で、この？の意味が広義過ぎるので聞いてみると、ようは転生や憑依もののテンプレである、『1つだけ好きな能力を与えよう』ってことらしい。

ただ、それらの案には多少のデメリットは付随させるそうだ。

けれど、誰もが1度は思う『ぼくのかんがえた、さいきょうのうりょく』。

いよいよここで使う時が来たか！！　と思つて取得したい能力を言つた。

物語の設定なら兎も角として、実際に生きていくのなら弱点とか要らない。

最強テンプレばっちこい！　つて感じだ。

ところが、

「ええと、その能力の保持者は既に居ますね」

……つまりあれですか。オンラインゲームとかでパスワードやらキャラ名が被ってはいけません的な？

「そう考えて頂いて問題ありません」

これはやばいかと思いながら、他にも考えていた能力を次々と提案する。

しかしそのどれもが既出。

やばい……………まじヤヴァイ……………これでも自分だけのオリジナル能力だと思って色々と考えていたんだが、そのどれもがアウト。

先に案出したお前らパねえッス。

なんて悩んでいる俺を見かねたのか、アイディアの提案につながれば、と既出の能力例を読み上げてくれる面接官。

無限の剣製——進化し続ける——スキマを操る——存在を司る——神を召喚——思い通りに事象を——e t c , e t c

流石流石と言いたくなる先人達的能力。

自分で考えたオリジナルの技や魔法を使っつてのもあったが、これは二次、三次問わず、既出のものと被ってはいけないうってことだったので、きつと効果薄そうだ。

……………ん？ 神の召喚？

そついつのもアリなんですか？

「ええ。過去にお亡くなりになった方達を、アニメ漫画やドラマの主人公を。といった方もいらっしゃいましたね」

まじか！じゃ、じゃあ二次元のキャラを召k

「それは既にいらっしゃいます」

o r z

「同じ能力ではないかもしれませんが、その能力を広義、狭義的に解釈して登録することは出来ますよ」

ん？ どついつことですか？

「つまりですね、例えばその、二次元のキャラを召喚する能力。これを広義に解釈した方の例ですと、あらゆる存在を召喚する能力、逆に狭義に解釈した方ですと、クトウルフの神々を召喚、といった具合です」

神話も二次元範囲内ですか……………

召喚系か。確かに汎用性高そうだし、良いかもしれんなあ。呼び出したキャラで自分も強化してもらえば一石二鳥以上の効果も得られるだろう。

でも神系はまず全部抑えられてるだろうし、二次元キャラもどこまで通用するかどうか……………

実在した偉人や英傑は俺が殆ど知らないのと、やはり神や二次元に比べて能力が低いのでパス。

と思つて、知ってる範囲での二次元作品をあらかた聞きまくる。

スターウォーズは？

「おりますね」

エックスメン！

「
おります」

ポケモン！

「1000人を超える方がそれを望まれましたね」

多いな。じゃあロボ系好きだからその作品全b

「
おります」

めげないよ！ 俺ファイト！ ならば狭義解釈でスーパーロボット

「
おります」

なんの！セイント……

「以下同文です」

あうち。

しかし参った。良い感じのものが思いつかない。

召喚ものは数あれど、多岐に渡って役立つもの、となると知識が
どんどん限られてしまう。

召喚ものつてもしかしてもう打ち止め系なのだろうか。

……いやまて。まだ召喚ものの、日本最大クラスが残っている
じゃないか。しかもカードゲームだから、まさに召喚してくれと
言わんばかりのものが。

決まったぞ！遊g

「おります」

orz

がつくりし過ぎだ俺。

あー、でもそういえば、遊戯王ってやったことねえや、ははは……

じゃあ広義でカードゲームで出てくるキャラや呪文は？

「同文です」

まーじーかーよー。じゃあマジック・ザ・ギャザリングは？

「——問題ありません。提案者ゼロです」

これもか。他に何か応用効く作品あったかな……………ん？

いないの？

「はい、いませんね」

—— やった、助かった俺。しかもギャザ。これは神の啓示に違いない。

他のカードゲームは殆ど知らないが、このマジック・ザ・ギャザリングは何年もプレイし続けた、思い入れの強い作品のうちの1つだ。

何をするにしても、かなり無理がきく作品だろう。チート的な意味で。

マジック・ザ・ギャザリング（以下 MTG or ギャザ）

アメリカのゲームデザイナーで数学博士の称号を持つ男が開発。

全てのトレーディングカードゲームの始祖。

日本ではあまり馴染みは無いが、高い戦略性と豊富なカードの種類で一躍全米を震撼させたホビーゲームである。

じゃあ、その能力でお願いします。

「分かりました。では能力名は『集められた魔法を扱う能力』とします」

なるほど。ギャザの和名ってことですね。

ん？ でも召喚や使用にデメリットを伴う呪文はどうなるんだ？
カードの枚数制限とか召喚コストも。というか、カードルール全般。

「あるにはありますが多少は無視です。遊戯王のアニメ、見たことありませんか？」

ああ、ご都合主義万歳ってことですね。で、俺もその万歳の仲間入り、と。

「そこまで万能ではありませんので。もしお嫌でしたら、デメリツト、多めに付属させましょうか？」

いえいえ、主観になるのならウェルカムです。ご都合主義最高！！

「ははは。割り切りもココまで来ると清々しい印象を受けますね」

結構欲望には忠実なんで。

「その欲望は周りに害の無い限り、尊ぶべきものです。では、その他の設定を行います」

……………迷惑かけんってことですね。分かります。

「既存の作品であるマジック・ザ・ギャザリングを使う能力への条件として、以下のデメリツトが付属されます。覚えておいて下さい」

- ・1ターンは1日（24時間）。
 - ・カードは1日に、1種類につき1枚を1回のみ使用可能。
 - ・召喚や現存し続けるカードには維持費（体力）が掛かる。
 - ・マナを増加、あるいは減少させるカードは効果を発揮しない。
- 使うことは出来る。

・カードの効果が必ずその性能を全て発揮する訳ではない。

・これらは全て『原則』である。経験値を積むことで、これら制限や上限の開放が可能。

「といった内容が原則です。その他詳細なルールはご自身でお確かめ下さい。何かご質問は」

RPGみたく、敵倒してレベルアップして使えるカードの枠を広げていくって考えて良いんですか？

「大まかには。ただレベルアップは『経験値』の蓄積の結果です。討伐のみや何か1つ特化での『経験値』では一定以上の効果は見込めません」

色々やれっことですね。

「はい。ですが、戦闘関係で得られる経験値のウエイトは大きいので、先程のお言葉どおりの考えでも問題はないかと」

分かりました。続きをお願いします。

全ての設定が終わり、巨大で、やけに和風な門の前に俺は来た。

結局、身体的特徴は生前とあまり変わらず、けれど『こうであつて欲しかった』箇所の修正をした。

身長165↓175 体重60↓70 細？ マッチョ体系で黒髪、日本ではどこにでもいるような顔。ただし眼光だけは意識すれば鋭くなる。

うん、一部だけカッコイイとか良いね。

完全イケメンとかでも良かったのだが、何せ両親に貰った体だ。

思い入れも強く、自分が許す限り特徴を引き継ぐ。

そして、最低1億年はやっていかなければならない事への配慮として『倦怠』感情の制御と、何でも食べて栄養に出来る能力に、当然ながらの寿命の無効化。そして、記憶容量の増大化。

最初の3つは当然として、最後の1つは人間の記憶容量は140〜150年と、どこぞのラノベで言ってたので、納得の配慮だった。

そして生前と同じように、少しずつではあるが成長はすること。

体を鍛えれば体力が、勉強すれば知識が、精神力を高める努力をすれば、胡散臭い気孔くらいは習得出来るらしい。

なるほど、それがレベル上げてって意味か。

良かった、俺って元がスタミナ低いから、持久戦な場面になったら不安だったんだ。

ただ、普通に死ぬし、死んだらまたここに戻ってくる羽目になるので、気をつけるようにとのこと。

セーブなしのRPGとかマジ鬼畜、って印象を受けるのだけれど、好きな能力貰っておいで、さらにその事への配慮まで望むのは我が侂だろうか……。

「これで全ての過程を終了します。お疲れ様でした」

「こちらこそ、色々ありがとうございました」

そう言うと、この面接官のおっちゃん。言葉には出さないが、口元が笑みの形になる。

（事務的だけど優しかったなあ）

若干視線の高くなった、五体満足の体。

けれど今までの肉体とさほど違いが分からずに、違和感の無さを喜ぶべきか、はたまた違う自分を実感する為に金髪碧眼にでもするべきだったかと馬鹿な考えに思いを巡らせた。

「これからあなたが向かう先は、——あるPCゲームの世界です」

いきなりゲームか。しかもPC。あー、原作知識あると良いんだけどなあ…………エロゲだったらウハウハしたいな。

「名前は…………東方プロジェクト。人間が支配する地球で、その存在を忘れられた者達が集う場所が主な舞台です」

って結構大御所が来たね。

やばい、俺ゲームとか1回もプレイしたことないぞ。知識はそれなりにあるが。

「以上です。何かご質問はありますか？」

「…………いえ、何もないです」

俺とおっちゃんが話をしていた建物の奥（中？）には、転送装置っぽい門が幾つも並んでいた。

なるほど、ここからそれぞれ決められた世界へと送られていくのだろう。

そう考えながら、先頭を歩くおっちゃんにそれにつられて俺も移動する。

そうして、見計らったかのようにビルの4～5階はあろうかという巨大な門は開いていった。

溢れ出る光。

まるで前は見えないが、これから異世界へ行きます、的な雰囲気、実に俺を興奮させる。

期待を胸に、それへと足を進めて出した時、

「あなたが無事、成し得たい事を遂げられますよう、この場のみではありますが、応援させていただきます——がんばれよ、坊主」

光に溶け込む寸前。

事務的な優しさでしかなかったおっちゃんのその声は、本心のよ
うな気がした。

最後だけ優しくなりやがって……男として惚れてまっやる！

「——はい！ ってきますー！」

返した声は、とても澄んでいたと思う。

両親に申し訳ないと思う気持ちは多々あるが、今はそれよりも未
知への第一歩を踏み出せるのだという興奮が上回っている。

したいこと、しなければいけないこと、やってはいけないこと。

色々な思いを馳せながら、俺は人外魔境の地へと踏み込んでいっ
た。

あれ、何か忘れてるような………？

第01話 大地に立つ

どこまでも青い空、雄大に流れる白い雲、大地を埋める新緑の森、黄金のように降り注ぐ太陽光。

そして、今まで嗅いだ事の無い澄んだ空気。

（すげえ！ 空気って美味いんだ！（注・能力のせいです））

ああ、今俺は見ず知らずの、どことも知れない地面に足を付けている。

感動が感動を呼び、これから起こるであろう、不安や恐怖を一切吹き飛ばす。

どうしよう。どうしよう。何をしよう。

幼い頃、新年最初の日には『初寝起きー！』とか『初朝食！』なんて『初』を何でもかんでも付けていた。

それは、その行動がこれからの行く先を決定するかのようない、こ
う、何か特別なナニカを感じるのだ。

(どうしよう……体が超興奮してる……!!)

今すぐ走り出したい衝動に駆られるが、第2の人生の初めてがそれで良いのだろうかと逡巡。

しかし、もう抑えられないこの気持ちに全てを委ねる事にした。

それは、

「あああああ!!」

咆哮。

ありったけの声を腹から出す。

いや違うな。

もう腹とかではなく、全身から振り絞る感じで。

「あああああ!!」

しばらく叫び、それでも足りずに大地を駆け出す。

我ながら馬鹿みたいだと第三者のように感じながら、踊るような心の躍動を、今確かに感じていた。

楽しい。楽しい。——とても、楽しい。

親不孝な俺であつた。自分勝手だとも思っている。

だから、だからこそ。

今生きているこの瞬間を命いっぱい楽しもう。

粛々と生きるのは、俺を知る誰かが現れてからでいい。

今を生きる。

全ての存在にするものに与えられた使命を、俺は謳歌した。

結果

「の”ど”が……………」

潰れる寸前です、はい。

やり過ぎた。体力も限りなくゼロ。

声も出せず、思考能力も著しく低下していた。

(…………… どんだけハッスルしてんだ俺)

だが、心地良い。

大の字で倒れこんだ地面は、思った以上にふかふかであった。

気候も良いし、頬をなでる風も、少しひんやりとした草の布団も、疲れや熱をゆつくりと奪ってくれている。

こんなことならもっと体鍛えておくんだっただ、と今更ながら後悔。それと同時に、ようやく今自分が置かれた状況を冷静に振り返った。

身に付けているものは紺色Gパン、無地の白いTシャツ、白いスニーカーのみ。もちろん下着も確認済みだ。

何処ぞの歌のように、ナイフもランプもカバンも所持していない。そしてココからが本題。ここ何処、今っていつの時代よってわけ。

（いやいや、まずは能力の確認か）

命あつての何とやら。

今の俺は考えを間詰めるのが早い一般人。

殴られれば痛いし、打ち所は悪ければ死ぬ。

ここで死んでしまったら、またおっちゃんのお世話になるし。違う人かもしれないが。

「つてことで早速」

確か脳内で思い描くことでカードのものを召喚………だったか。

何が良いかな。色々あるけど、初めての能力行使だもんな。

そうだ。

「こういう時は、初心に戻るべし」

ルールは基本、度外視とおっちゃんは言っていた。

ならば、マジック・ザ・ギャザリングのカードに割り振られたコンセプトを思い返してみよう。

MTGには6種類の属性が存在し、それらは色で呼ばれている。

『白』

平和や秩序、正義を表す。ライフの回復やダメージの軽減に長け、平等化という意味でリセットカードも多く存在する（例・全てのクリーチャーを破壊する）。行動の制限や抑制なども長けている。

『緑』

自然の色であり、大地や生命・現実を表す。全般的に優れたクリーチャー（モンスター）が特徴。クリーチャー同士の正面衝突に持ち込み、強引にダメージを捻じ込むことに長けている。

『赤』

火や混沌を表す。直接ダメージを与える呪文（通称：火力）や、形がある物を破壊するのが得意である。敵、味方を問わず自傷行為を求めるカードが多いが、その攻撃速度はMTGで1〜2を争う。

『黒』

死や悲哀、狂気・恐怖の色。クリーチャーの除去、ペナルティ能力を持つ高性能なカードなどが特徴的。自身の何かと引き換えに、相手を倒す事に長けたカードが多い。

『青』

狡猾の色で水や空気、精神・知識・文明を表す。どの要素もカードの種類や強さ、対戦相手の戦力を無視するものがほとんどのため、常にマイペースな戦略をとることができる。が、反面ダメージを与えることは苦手。

『無』

無という色がある訳ではなく、どの色にも適合する色である。機械やアイテム、装備といった無機質なものがイメージに近い。ロボットや機械といった系のカードが多く、全ての色と相性は悪いわけではないが、決して良い訳でもない。

上記の属性に加え、MTGには様々なタイプの呪文があるが、今は考えなくて良いだろう。

「だって今やりたいのはクリーチャーの召喚だしね！」

アメリカ発祥なだけあって、キャラ——とうか絵が全般的に濃いので、選ぶのが大変だ。俺濃いキャラ苦手だから！

まあそのうち慣れるんだろうが、初めくらいは心臓に優しいクリーチャーを見たい。

色としては白か緑。

で、その中で一番見やすそう＆一番気になるカードは……………。

「うん、これに決めた」

某ポケ（げふんげふん）何とかマスター風な口調で、そのカードを思い浮かべる。

難しいと思つた空想も簡単に出来て、心でそれが、もう召喚出来るのだと判断出来た。

「カード名とか叫ぶのかこれ。あ、別に言わなくてもいいじゃないか……いやいやいや、こういうのはノリが大事なんだ。これ叫ばなくて何叫べってんだ！」

テンションは下がった筈だったか、クリーチャー召喚という儀式的為に、再度その炎が燃え上がる。

よし、ここは某ガンダムファイターみたいにしてみるか。あれ一度言ってみたかったし。

「来い！ガンdゲフンゲフン」

言い間違えくらいあるよね！

しかも天井！

さらにベタというか狙いすぎて逆に引くレベル！

でも今の俺は気にしない！

ではあらためて。

「来い！『極楽鳥』！！」

突如、どこからともなく光が集まり、それを形作る。

瞬きする間すら与えず終わったそれは、まさにMTGのカードから抜け出した、極楽鳥そのものだった。

0 / 1と飛行能力があるクリーチャー。

戦闘能力は皆無だが、全ての色のエネルギーを少量生み出す能力を有している。

炎のような赤い全身に、雄雄しいまでの翼。

小鳥よりやや大きいであろうそれは、俺の目の前で悠々と飛び回る。子供の頃何度もお世話になったカードのうちの1つであった。

「凄い……………本当に……………」

呟きつつ、手を上にあげ、この手に止まれと意思を送る。

すぐ極楽鳥は俺の手に止まり、その存在感を教えてくれた。

手を目の前に戻す。

周りを伺いながら、時折こちらに目を合わせては首をクリクリ傾げるその行動に、俺の心は早くもKOされた。

ゆえに。

「生まれる前から好きでしたー！」

空いていた片手で背中や喉をくすぐる様に撫でる。

撫でる。撫でる。超撫でる。

何だか視線が『うわコイツうぜえ』みたいになっている気もするが、そんなじゃ俺の衝動は止まらない。

結局、我に返ったのは、我慢出来なくなつた極楽鳥に手を突かれるまでであつた。

「だめだ、一瞬我を忘れてしまった」

一瞬ではない気もするが、細かい事は流そう。

そんな俺の態度が気にいらないのか、バツパラ（極楽鳥の愛称、英語名の Bird of Paradise より）は俺の頭に止まり、数回頭を突く。

突くと同時に髪の毛をつまみあげるといっておまけ付きで。

「いてえ！ 地味にいてえ！ すいませんでした！ 以後気をつけますから許して下さい！」

髪の毛数本の犠牲と引き換えに、バツパラの突く攻撃は終わる。

頭上にいるので奴の姿は見えていないのだが、何となく『参ったか』とどや顔してるイメージが浮かぶ。

まだ地味に痛むんだが……。血、出てなきやいいけど。

ずきずきする頭部をさすりながら、今の状況を鑑みる。

「召喚した時にそこその疲れ、か。召喚『コスト』が低いからなのかどうなのかは分からないけど、コスト1くらいならまだ召喚出来そうだな」

『マナコスト（略称はコストやマナ）』

魔法やクリーチャーの特殊能力などを発動させる為に必要なエネルギー。種類によって必要なマナの色や量は変わってくる。

今回召喚した『極楽鳥』は緑のコスト1。

能力は、好きな色のマナを1つ生み出す。

これによって他者より早く大量のマナを確保し、より巨大な魔法に繋げていく、通称『マナ・ブースト』要員の代表格。

愛でてよし、食べてよしのスペシャル要員である。

「ごめん！ 逃げないで！ 食べるのなんて嘘！ 嘘だから！ ちよつとした茶目っ気だからー！」

瞬間的に飛びのいたバツパラに、追いつかるようにその手を伸ばし叫ぶ男。

それは恋人に振られてもなおしつこく付きまとう、ヘタレの見本
のようだった。

後に某バツパラAはそう述べたという。

時刻は分からないが、日も傾きかけた夕暮れ時。

結構な時間バツパラを出していたが、奪われた体力はずっと立っ
ている程度のもだった。

初めはそんなでもないけど、後半からボディーブローのように効
いてくるなこれ……

そんな事を考えながら、食事は空気か土でも食べるとして、寝床
を確保したい。

「食事の心配しなくていいのはホント助かるな……。後は、雨風くらい凌げる場所があれば」

辺りを見回してみるものの、洞窟なんてものはないし、人が木陰に入れるくらい大きな木もない。

都合良くそんなものでもあればと思ったのだが、無いなら仕方ない。

本日2回目の召喚能力で、寝床を確保すると致しましょうかね。

「何があつたかなあ。こういった方面での見方でカードなんて眺めてないから、何出したらいいかさっぱり分らん」

家……………家系……………雨風凌げる系。

城？ はまずそうだな。大きさに。

他は……………なんだろう。『土地』か『アーティファクト』で何かあつたかな。

『土地』

基本マナを生み出すことの出来るカード。つまり、このカードが多く出ていればいるほど強力な呪文が行使出来る事になる。マナコストがゼロで召喚出来るが、通常は1ターンに1枚か場に置けない。MTGではこのカードを基盤にして様々な呪文を行使し、ゲームを展開していく。

『アーティファクト』

「魔法の道具」や「機械」のこと。多くは「魔力で精錬された道具」や「古代の失われた技術によって創られた機械」としてデザインされている。『無色』マナの代表。

脳内wiki（ただの思い出し作業）で検索をかけると、候補が幾つか上がってきた。

その中で今一番良さそうなものをチョイス。

お、これ良いんじゃないかな。

そう思い、思い浮かべたカードを使用しても問題のない場所を見つける事にした。何も無いところにバンと唐突に建造物が出来ていたら目立つしね。

……が、体力があまり無い俺は数歩進んですぐにバテた。

おいイ、さっきまで大声で走り回ってた俺はどこへ行った。

かむばつく！ その時の俺かむばつく！

……なんて思っても体力が戻るわけもなく。

ふと、先程から俺の周りを飛んでいたバッパラに目が行く。

「……………アイツに探してもらえば良いんじゃないかね？」

——数分後、指定した条件どりの場所を発見したとバッパラから報告あった。

マジ早いッス、バッパラさん！

この時に何となく分かったのが、この念話っぽい能力、どうも俺の声の届く範囲でのみ機能するらしい。

生物電話とかは出来なさそうね、とか思いながら、バッパラが教

えてくれた場所へと重くなった体を引きずる様に向かっていった。

「来い！『隠れ家』！」

そこそこ大きな木の1本。

その前で俺は、決めていたスペルを唱えた。

次の瞬間、木の根元に、人間大の丸い木の扉の付いた入り口が出現する。

隠れ家の召喚コストはゼロ。

但しこのカードは土地と部類されるタイプのものなのだ。

コストが無い代わりに、1ターンに1枚しか場にセット出来ない、というルールが存在していた。

この1ターンというのが土地というカードに対してどう機能するのか不明瞭だが、先程のバツパラと違い、召喚維持コストはかから

ないようだ。

これならもう少し召喚の幅を広げても大丈夫そうだと思いながら、召喚した隠れ家に目を落とす。

こんなので隠れられるんだろうかと疑問には思うが、今は睡眠が俺の中で最優先だ。

扉を開くと、ベットだと思わしき藁の敷き詰められた箇所があった。

そして、それ以外には何も無い。

ただ、どこまで続いているのか、この隠れ家は奥行きが半端じゃない………というより、部屋の端が全く見えない。

そういやこのカードって何体でもクリーチャー收容出来るんだっ
たか、と。

ぼんやりその能力を思い返すが、些細なことだと思い――、

と、周囲を飛んでいたバツパラが目に入った。

体力が続くのならずつとこのままでいたいのだが、生憎を体がだ
るくなってきている。

気は進まないが、戻ってもらおうしよう。

「ありがとうバツパラ。戻れ」

言うと同時に、バツパラは優しい声でひと鳴きして、光にかえっていった。

少し切ないが、今後何度もやる出来事でもあり、別に2度と会えないという訳ではないのだからと、気持ちを切り替えた。

そして俺は、隠れ家に対する感想を洩らす。

「さすが隠れ家。必要最低限ですってか」

せめて布の布団とかベットが良かったが、安全に寝られるだけ御の字だろう。

新聞紙の1枚でもあれば大分違うんだけど、そんな便利なものは手元にない。

ならばとカードで生み出そうか考えてみるが、紙1枚の召喚と少し悲しくなったので、気分を変えて別の方針で行くことにする。

先程考えた、戦闘力のあるクリーチャーの召喚、だ。

いざって時になって『何出そう』とかじゃ、きつと死ぬる。

「護衛してくれるクリーチャーとかいても良いよな………体力的にキツいけど。人型はちょっと怖いから、馴染みなれた………あ、犬系とか良さそうだな」

そうと決まれば脳内wikiだ。

といっても、今召喚したい犬キャラは1匹しか思いつかないのだ。

「俺が知ってるのの大半が黒色か赤色だもんなあ」

赤や、特に黒のクリーチャーはおぞましいものが大半なのだ。

好き好んでそれと一緒にいたいとは、少なくとも今の俺には思えなかった。

偏った知識だと改めて突きつけられたが、今更どうしようもない。

それに、今回は良いクリーチャーが思いつくのだ。それ以上何を望めというのか。

「つてことで、早速イメージイメージ」

今回は、犬。

継続力も考え、マナコストは最低クラスのを。

絵柄は怖いけど、きっと平時にはもふもふで可愛いであろう、アイツ。

「白くて忠犬でもふもふで——来い！『勇丸』！」

バッパラや隠れ家と同じように、一瞬で光が集まり、四散する。

略称での呼び名だったが、問題はないようだ。

そこに現れたのは、2Mはあろうかという、白い毛並みとトゲドゲの首輪がトレードマークの『こんだけのりようけん いさまる今田家の獵犬、勇丸』である。

特殊な能力はない、バニラ（由来はアイスクリームのバニラで、何も入っていないシンプルな、ということから）と呼ばれるカードの一種だが、白マナコスト1でパワー（攻撃力）とタフネス（防御力&HP）が2もあるという優秀なカードだ。（例・以下の表記はパワー/タフネス〃2/2とする）

MTGのクリーチャーには、パワーとタフネスという数値が存在する。

先に記述されている通り、パワーが相手に与えるダメージを、タフネスがそれを防げる防御力を示している。

そして、そのタフネスは1ターンの間にゼロになると、そのクリーチャーは死亡する。

2という数値は少ないように思えるのだが、MTG内で、コスト1以下でパワーとタフネスが2を超えるカードは殆どない。

あっても、それは殆どがデメリット能力を付随されている。

よって、ゲーム序盤での勇丸は中々の制圧力を誇るのだ。

召喚された勇丸は、四肢を揃え、背筋を伸ばしてこちらの顔をじ

っと見つめている。

——ご主人様、命令を。

そんな幻聴まで聞こえてきそうなオーラが伝わってくる。

ど、どうしよう。完全に主負け？ だ。

家来（犬）が立派過ぎて主（人間？）の面子丸つぶれでござる。

だが！ 俺は諦めない！

いつか勇丸の主として相応しい人物になるその時まで！

「今田家の猟犬、勇丸。以後、俺の手足となり、剣となり、盾となれ」

とりあえず形から入って格好付けてみようか。そう考えて、それっぽい台詞を言ってみたのだが。

………吼えるでもなく、動くでもなく。

ただ目線を細くして、勇丸は肯定の意をこちらに返す。

主人らしくカッコつけて言ってみたのだが、逆に格の違いを見せ付けられたような気分になる。

（やばい。おっちゃんに続いて、勇丸にまで惚れちまう！）

内心で色々な意味の涙を流しながら、寢床作りの為、周囲に散らばっている藁をかき集める。

だが、藁で寝るなんて人生で初めての経験だ。

どう使っているのか分からないので、とりあえずは体の上にかけてみるのだが、やはりというか、寝心地は最悪。

（メンタルとボディのダブルパンチっすか）

と、そんな事態に陥った俺を見かねたのか、勇丸はこちらの横に座り、背中だけだが、体と体を密着させる。

——俺！ 陥落！！

思わず声を大にして叫びたい衝動に駆られるが、勇丸の背中に手をあてもふもふすることですれを回避する。

(…………決めた。俺、コイツずっと使っていこう)

生前じゃ1回もデッキに組み込んだ事なかったけど、それも今日までさ！

そんな新たな決意を胸にする俺とは裏腹に、勇丸はいたって忠実に周囲を警戒していたのを知るのは、もう少し先の事だった。

第02話 原作キャラと出会う

所々に体が寒い。

けれど正面だけはとても暖かで。

温もりを求めて体を摺り寄せると、その暖かさはもそもそと動いた。

（——ああ、これ勇丸だったか……）

寝起きながらも状況ははつきりと分かった。

過去嗅いだことのないほど濃厚な土と木の匂いの交じり合う、ここ隠れ家の中。

勇丸にも匂いつてあるんだろうかと思い、嗅覚に集中するが、全く嗅ぎ分けることが出来なかった。

多分、匂いについての記述のないクリーチャーとかは、全てそうなんだろうと、段々と意識が覚醒していく中で結論付ける。

そう考えると、昨日のバツパラや、これから召喚する予定の天使やゴブリン、ゾンビにドラゴンなんかは大半が無臭なのではないか、と残念3割、安心7割の心境で判断した。

だって良い匂いの奴なんてそうそう居ないだろうし、居たとしても『良い匂いの強いクリーチャー』ってカテゴリに入る奴はまず居ないだろう。ってか俺が知らない。

先にデメリットの方から考えるなんて、相変わらずネガティブな思考してんな、と我ながら呆れた。

さて、いい加減目を開けなきゃなあなんて思っているので、何とか瞼を挟じ開ける。

思考のハッキリしない寝起きの為か、もうやる事なす事の初めに『初』なんとかなんて付ける気はない。

視界に飛び込んできたのは『白』。

予想通り勇丸の背中なのだが、コイツは寝そべりながら首だけを起こして、出入り口に警戒を続けていたようだ。

(一晩中ずっと警戒してくれてたのか……………?)

睡眠とか要らないのかもしれないと考えてみたけれど、完全徹夜を経験した時の自分と今の勇丸を重ね合わせてしまい、申し訳なさと感謝の念がこみ上げる。

そうとなれば、この気持ちを伝えておかないと。

「おはよう。警戒してくれて、ありがとう」

首をこちらに向け、勇丸は目を細める。

—— お気になさらずに。

言葉や行動ではない、言うなればニュータイプみたいな、心で分かる感覚が俺の中に届く。

どうも、このクリーチャーって奴は、心で気持ちを通わせることが出来るようだ。

言葉を話せそうな人間タイプの奴はどうなんだろうかと思いつながら、別の問題を考える。

（バツパラや勇丸もそうだけど、俺への忠誠は無条件で付いてると考えても良いのかな）

あたり前だとは思うが、この前提条件がなければ俺はこの世界でやっていけない自信がある。

“召喚したのだから俺に従えー”なんて、何とかの使い魔で出てきたサイト状態だったら目も当てられない。

なんてつつて、パラメーターだけ見ればただの人間なのだ。

間違いなく、最低ランクのクリーチャーでも殺される自信がある。

（初めに出した攻撃力のあるクリーチャーが勇丸で良かったのかも
しれないな）

体に被った藁を押しつけて、服に付いたそれらを払う。

朝日の差し込む唯一の出入り口の扉を開け、勇丸を先に行くよう
思いを伝える。

2M近くある大型犬なせい、勇丸が歩くだけで幻想的な光景が
視界を埋めた。

（こりゃ、大型コストのクリーチャーとか見た日にゃ卒倒するかもな）

誰もいなくなった隠れ家内部に目を向けるが、これといった感情は沸かない。

恐らく何度も利用するんだろうなと思い……………逡巡。

隠れ家の能力を思い出した。

（そういえばそんな能力あったな……………どうなるんだろ）

実験に近い気持ちで、誰も居なくなつた隠れ家の扉を閉める。

そのまま数秒。

何の変化も起きないことに、俺は内心ガッツポーズをする。

——隠れ家には無限のクリーチャーを内容出来る能力があるが、その収容されたクリーチャーを開放するには、隠れ家自身を生贄に捧げなければならないのだ。

そして今回、内包されたクリーチャー（俺もか？）を放出し終えた今でも、隠れ家は依然としてそこに存在している。

（デメリットはある多少無視出来るっておっちゃん言ってたけど、これホントにどこまで無視出来るんだ？）

使う側になった為、ご都合主義万歳派になった俺だったが、このデメリット無視がどこまで通用するのか確認しないことには足元をすくわれかねない。

（これから、手札を捨てる、ライフを支払う、ターンを前払い、なんてデメリットの検討もしていかないと……………）

やる事は山積みだが、今はそれよりも優先して調べたい事を思い出す。

それは、クリーチャーについているパワーとタフネスが、こちらの世界でのどの程度のものになるのか、という事だ。

バッパラは0 / 1。

これは攻撃力が皆無の、タフネスは最低ランクという事。

対して、勇丸は2 / 2。

攻撃力が2のタフネスが2という事だ。

一番なのは、何かと戦わせるか、同じく何かを破壊してみればいい。

そう思いながら、目の前の隠れ家を消す。

お世話になりました。と、宿家になってくれた木に感謝しつつ、林を先導する勇丸の後を追ひ、初日にいた草原へと戻った。

「さて、まずは今いる場所の確認をしてみますか」

思い、役に立ちそうなカードを思案する。

するのだが……

「…………ダメだ、さっぱり思いつかない」

ダメでした♪

……………うん、音符つけてもキモさ倍増するだけだな。以後自重しよう。

脳内wikiに検索をかけるも、そこまで容量がある訳ではないので、ゲームの対戦として使用頻度が低ければ低い程に、俺のギャザに対する知識は霞んでいく。

「仕方ない、周囲の散策をしてくれるクリーチャーでも呼びましようかね、っと」

分からないのなら、分かるようにするだけだ。

例え効率が悪くとも、停滞するのはただけない。

それに、カードを扱う良い練習にもなるのだと思い、探索に便利

そんなキャラを思い浮かべる。

探索……………機動力がある……………足が速い……………地形無視……………空……………。

うん、鳥———というか飛行系だ。

今度はバツパラのような攻撃力のないもじゃなくて、しっかり攻撃出来る奴を出してみよう。

コストゼロの隠れ家は出したし、コスト1のバツパラや勇丸は出したから、次は2で。

そして、どうせならと、あまり使われる事のない、少し捻ったクリチャーを召喚する事にした。

「イメージイメージ、っと。来い！『エイヴンの遠見^{とおみ}』！」

3回目ともなると慣れたのか、イメージもすんなりと形を成す。

そして現れるエイヴンの遠見。

人と鳥が融合したのような外見。

顔が鷹……だと思う。

手は大空を駆けるための翼がついていて、人間どころか牛やゴリラといった大型生物でも楽々と捕食出来そうな鍵爪が見て取れた。

天使を思い描くより、鳥人間といったコセンプトの方が合っている印象。

1 / 1 に飛行能力と、ちょっとした能力が付随されているのだが、そのちよつとした能力はこの場では無関係なので省略。

能力には表記されていないが、遠くを見渡すことに長けている筈だ。名前に。

召喚と同時に、ドツと体力を奪われる感覚が俺を襲う。

100m全力疾走しましたと言わんばかりに俺は荒い息を吐く。

(こりゃ3マナとか出したら立てなくなるかもな)

幾ら運動不足だったとはいえ結構疲労するなあ、と思いながら、召喚したエイヴンを見る。

俺をゆうに越えるその躯体に、思わず息を呑む。

これでガチンコの戦闘をしたら勇丸の方が強いというのだから、MTG内では不思議な現象も起こるものだ。

……………そして、その不思議現象をこちらに当てはめて考えるのはやや危険。

おっちゃんが『カードの効果が必ず効果を発揮する訳ではない』
といていた。

これは恐らくパワーやタフネスといった数値にも関係するのだろう。

カード上では戦闘行為は足し算引き算の結果だが、実際は経験や技術、その場の状況に運といった様々な事象が関わってくるのだ。

目安の1つにするならまだしも、絶対だと思い込むのは避けておこう。

そう思いながら、エイヴンを見上げる。

(うわぁ……………マジこええ)

ギンと睨む眼光に、俺の股間が竦みあがる。

きつと目つきが悪いだけだ、と強引に考え、遠ざけるかのように

周りを探索するよう言葉をかける。

「今ここにいる地点を中心に、探索を始めてくれ。ただし、人型の生き物を見た時は報告しに戻ってきてほしい」

一瞬。

しゅばっ、っと離陸して、彼は瞬く間に空の彼方へ偵察に出かけていった。

見届けると同時、緊張と疲労も合わさった疲労感を回復させるべく、すくと地面に腰を落とす。

雄大に大空を駆ける彼に憧れを抱き、機会があつたら何かの呪文を使って空を飛ばうと心に決めた俺だった。

（いつかは10マナ以上の召喚とかやってみたいねえ……………世界終わりそうだけど）

漠然と、視界から小さくなっていくエイヴンを見ながらそう思う。

10マナ以上ともなると、神みたいなクリーチャーが多い。

元々、MTGは次元世界を題材とした作品だ。

ギャザの神がどの程度の存在なのかはイマイチ掴めないが、間々、次元崩壊で星1つどころの話ではない事態が起こっている。

そんな事象を引き起こす存在を召喚出来るかもしれないというのだから、そりゃあテンションも上がるってもんよ！

俺TUEEEとか誰もが1度は夢みる出来事な筈だ。

ただ俺の体力がそこまでもたないので、気の長い話ではあるのだけれど。

（1マナが鳥とか犬で10マナ以上が神クラスだとしたら………単純に2マナだから1マナの2倍強い、とかつて訳でもないんだろ（うな）な）

その辺りは今後分かるとして。

お日様も真上に昇ろうかという時間帯。

クリーチャーとして召喚されたせいなのかは分からないが、周囲を警戒している勇丸は空腹なることはないようで、尋ねてみるも、大丈夫だという意思が返ってくる。

食費は掛からなくていいなあと漠然と考えながら、勇丸の様子を観察しつつ、何をするでもなく周りの風景を眺めながら、考える。

クリーチャー2体。1マナと2マナの計3マナ維持とは、中々に大変であることを実感した。

感覚としては、やや早歩きをし続けている位の疲労感。

一応は体を休めながら行っているのでそこまで苦ではないのだが、いつかは体力でもレベルでも何でもいいから上げて、召喚出来る範囲を広げていきたい。

考えをまとめつつ、ごろんと大の字に体を横たえる。

見上げた景色は1日目と同じで、青い空に白い雲。緑の絨毯はふかふかで、昨晚お世話になった林には、鳥達が時折飛び出す様子が窺えた。

——平和だ

心からそう思う。

能力の把握とか、これからどうするのかとか。

そんな思いすら、この景色の前では豆粒のような考えなのだと実感させられる。

ここは『東方プロジェクト』の世界だとおっちゃん言った。

だが、だからといって別にそれらに登場するキャラクターに遭遇しなくても良いのではないか。

教えられた時には『原作介入ひゃっほー！ 俺好みのストーリーにしてやるぜえ！』なんて脳内で息巻いていたのだが、今の俺には飽きることのない感情と、何でも食べられる能力が備わっている。

ぶっちゃけ、体調さえ崩さずに籠れるのなら、幾年だろうと問題ない。

何かカードを使つて、日が昇っている間は大地を、夜は星を眺めている状況を作るだけで、今の俺は満足なのだ。

それに、原作には原作の流れがあり、こと東方プロジェクトには悲しい出来事は多少あるが、幻想郷に集う時には、大体が円満になっている。

—— 原作に限らず、世界では悲しい出来事が多々起こっている。飢餓や戦争も、当然の事ながら。

だが、俺にはそれらは興味の対象外なのだ。

そこに俺がいなくてもなるようになるし、ならなかったら滅んだり、他の人がどうにかする。

世の中、そんなもんだった。

たかだか数年社会に出ただけの俺だったか、そんなもんだったのだ。

情もなく、思い入れもなく、繋がりもない何かの為に、少なくとも俺は動けない。……いや、動きたくない。

『力を持つ者の定めだー』とかクソ食らえ。

それは他力本願というものだ。

頼ってきたのならいざ知らず、こうべき、なんて押し付けがましい考えは、受け入れられない。

だから、このままゆったりと自然の流れに身を任せて――

突如、座っていた勇丸が四肢を広げ、何かを威嚇しながら、俺の前に盾になるかのように立ち塞がる。

低く唸り声を上げる勇丸に、俺の思考は一気に警戒を最大値に引き上げた。

氷柱を背中に入れられたように、一気に背筋が凍る。

天氣の良い、ただの見晴らしのいい草原。

それに寸分違う事無く、俺の視界には、ただの草原しか映っていない。

けれど、勇丸は何もない筈の一点に顔を向け、全身の毛が逆立っている位に警戒をしている。

（何かが………来ている………！？）

見えない何か。

俺が——人間が知覚できない存在。

決して真つ当な生き物ではないだろう。

（くそっ！ 東方の世界ならば、妖怪やら精霊やらが普通に跋扈^{はつこ}していたのを失念してた！）

思つや否や、チグハグながらも何とか思考を戦闘方面へと切り替える。

（正体不明。 攻撃……………は不得策。 防御を最優先に）

敵の正体を見破るのは後回し。

（今の状況で使えそうなカードは……………強化……………『エンチャント』か？ よし、あの2枚でいこう）

『エンチャント』

呪いや魔力の付与などの具象化された魔法のイメージ。個別と全体に効果を及ぼすものがあり、前者は加護や呪縛、後者は結界や聖域といったイメージが似合う。

（カード、『不可侵^{ふかしん}』、『鏡のロープ』選択。対象は俺！）

共にエンチャント呪文であるそれは、前者は付けた者は受ける全てのダメージをゼロにし、後者は装備したクリーチャーを呪文や能力の対象から外す……対象に選ばせない能力を持つ。

本来プレイヤー（俺）とクリーチャー（勇丸）は別扱いなのだが、クリーチャーのみを収容する隠れ家へ入室出来たことを考えると、俺はクリーチャーでもあり、プレイヤーでもある性質を持っているのか、それともそういった仕様は無視なのか。少し首をかしげるが、今は無視。

で、前者は俺の知る限り、アニメとか漫画じゃよくある能力かもしれないが、後者は東方世界にとっては致命的の部類に入るかもしれない。

相手を燃やしたり、境界を操ったり、破壊したりなど、他に方法はあるだろうが、こちらに干渉する手段をかなり減らされるのだから。

無効化などといったレベルではない、それを選択肢に入れることが出来ないのだ。

その能力名は、MTGでは『被覆』。

あるいは、決して触れられないことを意味する『アンタッチャブル』と呼ばれている。

ただMTGではそれすらも割と簡単に対処する方法が多々あるので、安心は出来ない。

というのも、一番楽な方法として、単体ではなく全体に効果を及ぼすものにはこの被覆は効力を発揮しないからだ。

相手がどの程度の力量なのか不明だけれど、もし個別の俺を狙えなかったのなら、やけっぱちの全体攻撃とか無差別攻撃みたいなのをやられて、その攻撃が通用してしまうかもしれないので、油断は禁物。

『不可侵』は外見上の変化はないが、『鏡のローブ』は名前の通り、所々が鏡面になったローブだ。手鏡を縫い合わせた服、といったいかもしれない。

ただこのカード。この手の戦闘では致命的な欠点があるのに気づくのは、もう少し先の話。

傍から見たら、突然衣類を着替えたように見えるであろう俺に、近づいてきた姿の見えない何者かはどう思うのだろうか。

不気味に思っ立去ってくれるのなら良し。

仮に襲い掛かってきたのなら、個別のクリーチャー破壊カードで

対応しよう。即死にはならずとも、それに近い効果が見込めるハズだ。

しかし、疲労感がマジやばい。

不可侵は2マナ、鏡のローブは1マナ。

計3マナの連続使用で、クリーチャー分も合わせるとそのさらに倍の6マナになる。

切羽詰った体力は、俺への死を否応なしに連想させる。

(きつつ……仕方ない、エイヴンには悪いけど、戻ってもらって余力を稼がないと)

今は目の事態を解決するのが最優先。

念話も届かず、いつ戻ってくるかも分からない状況では、何の足しにもならないのを痛感する。

心の中で謝りながら、エイヴンを戻すイメージを実行。

どこにいたのかも不明だったが、先程召喚した時から続いていた疲労感の一端が消えるのが分かった。

これならもう少し粘れると思いつつ、勇丸が見つめる先に目を

凝らして、けれど俺はその場から動けずにいる。

というのも、状況の問題もそうなのだが、疲労が限界近くに達していた

今の俺は荒い息を繰り返す、まさに突けば倒れる存在だ。

鼓動が煩い。

ドクドクと、心臓の音が痛いくらいに耳に響く。

唸り声を上げ続ける勇丸の後ろに隠れて数秒。……いや、数十秒だろうか。

時間の感覚が分からなくなっていたが、カードを使ってから少し間が開いた。

勇丸がずっと唸り続けているのだからまだ目の前には居る筈なのだが、やはり俺には姿を見ることは適わない。

（解析系のカードってあったかな……………）

望遠鏡とかメガネとか、そんな感じのカードが解析系なのだろうか。

それともゲーム的な視点で考えて、相手の手札を見る系？

守りのカード2枚が展開されている状況の為か、自身のスナミナと相談しながら、先程よりはゆっくりと思考を巡らせる。

——いや、巡らせようとした。

まるで、そんな思考を遮るかのように、

「ここへ何用だ、人間」

…………俺の胸に届くか届かないかという所か。

小さな体からは想像も出来ないような威圧感を放ちながら、黄金の稲穂を思わせる髪を独特な帽子の隙間から覗かせて。

何も無かったその空間。

さも当たり前のように、

（くそっ！ なにが『あーうー』だ。ネタに走った奴出て来い！ そんな存在じゃねえぞ！？）

土着神の頂点との二つ名を持つ、日本最高クラスの神が1人。

『洩矢 諏訪子』が俺の前に降臨した。

第03話 神と人の差

「……………ここへ何用だ、人間」

2度目の問い。

まずい、神様を無視したばかりか再度問い直させちゃったよ！

一瞬で混乱した脳内を正常に戻す。

だが。

（ぐぬっ、対面してるだけでもメンタル削られる……………！）

というか息吸えねえ！

ガリガリと、自分の中で気力が削がれていくのが実感できる。

人生初であろう神様との対面が、まさか日本全国の祟り神のまとめ役だとは夢にも思わなかった。

何とか喋らねばと声を出そうとしてみるも、まるで窒息する魚のように、口をパクパクと動かすだけにしかなくていいない。

まずいますまずい！

もう、何十回叫ぶんだってくらいまずい！

このまま相手を放置プレイし続けたら確実に呪われる！　ってか殺される！

しかし、口が動かない。

手も足も、いや、体中から滝のような汗をかいているのが分かる。

もはや自分が地面に立っているのかも分からなくなりかけた頃、こちらを見つめる神の眼光が、キツと細まった。

（あ……………俺死んだ……………）

噴火する火山を、もしくは降り注ぐ隕石の群れを見たような、諦めの境地とも言える心境の中、

「…………ふむ、これで話すことができるか、人間」

俺にとつての小さな死神様は、その威圧感を緩めてきた。

途端、俺は膝から倒れるように、四つん這いになる。

体中に酸素を取り込むように、過呼吸とも言えるくらい肺に空気を取り入れる。

（た、助かった！ 何とか俺生きてる！ 神様仏様！ 何より勇丸、ありがとう！）

とりあえず生きている事へ感謝をした後、今度こそと対応すべく、今し方、感謝を捧げた神様へ顔を向ける。

訝しげにこちらを眺める、幼い女の子がそこにはいる。

こんな容姿でも、威圧するだけで俺は死にそうになったのだ。

人間と神とはこれ程の差があるのかと畏怖の念が込み上げてくる
と同時に、自分の愚かさに怒りも湧き上がってきた。

（話にならねえ。攻撃でも能力でもなく存在で格が違うんだ。不可侵でダメージ無効つてのも、肉体面だけだし——いや、そもそもダメージだとすら認識されていない事象なのか。それともダメージゼロは神相手にや効果ないのか……こんなんじゃ、俺TUEEEなんて出来るわけないじゃないか）

今までの考えを悔いると共に、まだ震えの抜けない足に力を込めて、神様と向き直る。

こちらを興味深く観察するかのように、じつと見つめるその眼に
またも意識が薄れそうになるが、何とか堪える。

相手は神様。雲の上のお方。

ならば古来よりの例に習って、低姿勢で対応を試みよう。

——というか、だ。

さっきので心が折れかかって、反抗とかタメ口とかなんて考えらんねえだけだったりする。

「……………大変失礼致しました。こちらへは昨日着いたばかりでして、あまりの景色の雄大さに心打たれ、眺めていた次第でございます。出て行けと言われるのでしたら、すぐにそう致します故、何卒お許し下さい」

立ち上がってすぐ、俺は再び膝から地面に、手、頭と付けていく。

この頃の日本——諏訪子がいるのだから日本だろう——には土下座はあるのか疑問だったが、これが俺の中での精一杯の謝罪の形だ。

そんな俺の前に立っていた勇丸は、雰囲気を察したのか、俺の斜め後ろに回り、そこに座る。

「良い者を連れているな。犬畜生など、狗神しかまともな者なぞおらんと思っていたが。私に勝てないと見るや、即座にお前を逃がそうと機会を窺っていたぞ」

面白いものを見たかのような声色で、俺に言葉を投げかけた。

言われ、勇丸に視線を向ける。

こちらと目が合い、大丈夫ですか、と意思の確認をしてくるそれに、俺は今の精一杯の感謝の気持ちを伝えた。

「さて、人間。お前の事情は分かった。だが、ここは我が国の中で

も、聖域とされ、誰も立ち入ることを許されておらぬ土地だ。……
…首を刎ねられて当然。そんな所へ踏み込んだお前は、一体私に何を捧げて、その許しを請おうと言うのかな？」

さ、捧げるものって……。

何だろう、アーティファクトならいっぱいあるけど、それで良いんだろうか。

それとも便利なクリーチャー？ はたまた使えるエンチャント？

候補は幾つもあるが、大雑把な要望過ぎて、何を提示していいの
か判断がつかない。

よって、失礼になるかもしれないが、下手なもの差し出して『魂
よこせ』とか言われるよりはマシだ。

何か要望がないか聞いてみよう。

「……………恐縮ではございますが、何かご要望があれば、可能な限り
それに近いものを捧げたいと考えおります」

ふむ、と一言。

まるで玩具を見つけた子供のような目になった神様は、俺に

「では、お前の魂をもらうとしようか」

にやりと笑みを浮かべ、そう告げた。

超！ 藪！ 蛇！

地雷回避しとうとしたら、グラウンドゼロでした！

あかん！ やばいやばいの64乗だ！

自ら墓穴とか空気の読めない主人公だけかと思ってたYO！

「お、恐れながら………そればかりは………」

消え入りそうな声で何とか訂正してもらったと、尋ねてみる。

すると、それを見越していたかのように、この外道神様は再度、提案してきた。

「では、そちらの忠犬を貰おうか」

……………え、ちゅう……………けん……………？

「お前の後ろ控えている、その犬のことだ。その忠義を尽くす姿勢を見て、私も欲しくなったのだ」

ニタニタと、段々と笑顔の性質が変わっていくのが俺にでも分かる。

「まさか命を助けられ、1度私の要望を拒んだばかりか、2度もそれを繰り返すつもりはなからうな」

一転。

今度は笑みなど一切なく、先程と同じような、威厳を放つ存在となっていた。

再び俺の前に立ち塞がる勇丸。

先とは打って変わり、唸り声は今にも飛び掛らんばかりの音量にまでなっている。

そして俺はといえば、やはり息も吸えず、目の焦点すら定まらない状態に陥っていた。

——そんな中、1度体験したせいだ。

俺の思考だけは、この状況を打開する為だけに巡る。

勇丸を差し出す？ となると当然、アイツはこの神様が飽きるか死ぬかするまで返ってくることはない。

……いいじゃないか、数あるカードの中の1枚だ。

他にもカードは山のようにあるし、もし勇丸を取り戻したいのなら、差し出し、逃げた後で再度召喚すればいい。

だが——だが待つて欲しい。

そう俺の心の一部が訴える。

その一部とは、怒りと呼ばれる感情である。

相手は神様で、そして、崇り神の頂点だ。

西洋の神ならいざ知らず、こんな絆を引き裂くような真似をするものなのだろうか。

伝説や言い伝えは等は、羽陽曲折し、捻じ曲がるものだろうか、

それでも日本という国は、その神々達は素晴らしい方々だと――
そう、思いたい自分がいる。

日本嫌いの国民や政治家を見ていたせいか、俺は日本という国に
一定以上の崇高な何かを見続けていた。

それは無条件の信頼であり、信仰であり、誇りだ。

それは今でも俺の中にあるし、目の前の神を見たことによって、
それはより強固な確信へと変わっている。

だが。

その信仰は、俺に害を与えないことが前提なのだ。

威圧感のみで死にそうになったことは、こちらが不法侵入したの
だからと思っていた。

しかし、自分のみならず、勇丸を物のように『よこせ』と言っ
てきたのを、俺は許せなかった。

（日本の神様つてのは、もっと人間のことを考えてくれるもんだと
思ってたけどよ……………）

その結論に達すると、途端に威圧感が軽くなる。

いや、自身の怒りでそれらが気にならなくなったと言った方が正しい。

憤怒という名の覚悟は俺を炊き付け、後先考えずに、この口を動かす。

「申し訳ありませんが、それは出来かねます」

「断ると申すか。ならばお前の魂を貰うことになるが、構わぬか？」

「その忠犬——勇丸を選択肢に入れていなければ、それも致し方ないと考えておりました。ですが、あなた様の行動は、とても神とは思えません。まるで……まるで暴君、いえたちの悪い妖怪そのものに御座います」

「……………吐いた唾は飲み込めんど、小僧」

「——小僧で結構。生憎と親の育て方が良かったんでね、踏み込んじゃいけない領域ってのは心得てるつもりだ」

気分のせいかな、口調まで荒くなる。

「小さきことよ。神と人間を同じ尺度で測ろうなど、愚かな」

「だったら人間から完全に離れるってんだ。関わっている以上、お前のそれは我侭な言い訳だと思うがね」

もはや言葉では語らず。

辺りの空気がズンと重くなる。

青い空の、白い雲で、緑の大地と何一つさつきと変わらない光景は、それだけで一遍し、処刑場へと姿を変えたようだった。

神様の前に死が付いてしまった相手に、俺の頭では、暴走気味に高コストのクリーチャー群と凶悪スペルの列が並ぶ。

疲れや制限など知ったことが。

ここまで啖呵を切ったのだ。もはや行くところまで行くと覚悟を決めた。

それに、俺の物語はまだ序盤。

開始直後の死亡リトライなど、ゲームでは定石。

押しつぶされそうな世界で、俺は自称神様を睨みつける。

軽く俯き、帽子のつばで目の見えないそれは、怒りで暴れだす一歩手前の火山に見える。

そして、俺がクリーチャー群の第一陣を召喚しようとした矢先――

「——ぷっ、あはははは！ 凄い凄い！ あたしの神気にここま
で耐えられる人間がいるなんて！ しかも向かって来ようとするじ
やないか！ いやぁ長生きはするもんだねえ」

なんか今までの威厳をキングクリムゾンしたような出来事に出会
ってしまった。

………はっ！？

（これはあれか！？ 『ちよつとからかってやるか』的なシチ
ユエーション！？）

ダメだ。このシチユエーションって第三者から見たらまる分かり
だけど、当事者になると全くそんなこと考える余裕がない。

威圧感とはハンパじゃないからね！

あれだ。

上司とか得意先とか先生とか親から全力で説教食らってる時に、

『実はうつそで〜す』な相手の状況を思い浮かべられる余裕なんて無い感じ。

本日2度目の腰砕けになった俺は、今更ながら、自分が立ち向かおうとしていた存在の大きさを知る。

膝はガクガク汗はダラダラ、貧血でもないのに目の前がクラクラしやがる。

今まさに orz を体言している俺だったが、まるで慰めるかのように、俺の腕に勇丸が体を擦り付けてきた。

あんた、ほんま優しすぎるねん！

思わず体全体をもふっと抱きしめる。

何をするでもなく、成すがままにされている勇丸だったが、尻尾が少しだけパタパタと嬉しそうに左右に振られているのを俺は見逃さない。

（これが！　これがツンデレというものか！（注・違います）

ようし分かった。もう今日はお前を放さんぞその毛がツヤツヤになるまで撫で回し t

「気分が乗つてるとこ悪いんだけど、人間、そろそろこっちも相手してもらえるかね」

「はい！ 失礼しました！」

我ながら素晴らしい反射神経だと思う。

一瞬にして開放された勇丸はこちらの横に控えるように座るが、尻尾が心なしか寂しそうに垂れ下がっている。

すまん、後でいっぱい遊ぼうな。

「さて人間よ。実を言つとね。私はこの地にお前が入った時から、お前のことを眺めていてね——その、式神か妖術か分からないが、お前の使う奇跡に興味が沸いたわけなのだよ」

「あ……………と……………この、今着ている服の事でしょうか？」

「誤魔化すでもいいけどね、お前が前にしている私は、崇り神と呼ばれる存在だと思っていいい」

分かる？ 崇り神。

そう、小首を傾げ、くりくりとした目をこちらに向ける自称崇り神。

いやいや、あんた崇り神って言うよりそれを操ってる立場でしようが。

行動は可愛いのだが、話の内容は物騒な事この上ない。

ええ、あなた様の素性に関しては重々承知していますとも。……
…前世で。

「すみませんでした。お答え出来る範囲でしたら全てお答えしますので、どうか崇らないで下さい」

本日2回目の土下座だったか、1度目よりは真面目度が大幅に下がっている。

今の状況を例えるなら、浮気を謝る夫、というところだろうか。

情けない限りである。

「ふうん、それでも全部は答えてくれない、か。うん、ま、いいよ。聞きたくなったら絶対に聞くし」

ぶるりとこちらの背を振るわせる発言をして、神様——彼女は、近くにあった子供程ある岩の上に歩き出す。

岩まで着くと、その上にぴよんとひと乗り。

こちらを向き——ちよつと見てみたかった俺的東方名物のうちの1つ。カエル座り？ をして、俺を見下ろした。

（生ケロちゃんだぁ……………スカートの中は見えないんだなやっぱりゲフンゲフン）

「お前は人間にしては体が大きいからね。見上げるのは首がキツイし。それに私、神様だし。こういう格好のが、それらしく見えるでしょ？」

それはそうだが、だからって俺に同意を求めないでほしい。

この様子じゃ違うと答えても、『これが神様ってもんさ』ってな具合に押し通されそう。

彼女に習い、俺も彼女の前で胡坐を組む。

少し見上げる感じで、態度は悪いが、これくらいならば長時間でもいけそうだ。

「では人間よ。楽しませてもらったお礼に、まずは私から名乗ろうじゃないか」

やっぱり目上………というか神様から名乗らせるのは失礼に当たるんだろうな、今のセリフから察するに。

この時代、何が失礼に当たるかなんてさっぱり分からんぞ。

「私は、洩矢 諏訪子。ミシヤクジ——祟り神達を統括している、土着神だよ」

出会った時とは一転、コロコロと鈴を鳴らすように、軽やかに、諏訪子………様は告げた。

こっちが彼女の素なのだと思いたい。

だって神モードで対応されたら俺の魂魄消えそうだしね！

ただ、俺はここで、やっと忘れていた事を思い出した。

なぜ忘れていたんだと思うだろうが、そんなの分かっていたら、もうとっくにその疑問を解決していた。

今まで忙しすぎたせいで、考えが及ばなかったのだろう。

だから、今の状況を、俺は諏訪子様に素直に告げる事にした。

「お初にお目にかかります。昨日こちらの地に流れ着きました人間で、名前は――ありません」

「……へ？」

告げた答えに対しての返答は、神様にしては、あまりに間の抜けた声だった。

第04話 名前

太陽が地平の彼方へ消えようとしている。

まだ時間はあるものの、大地を燃やすその光に、俺はまた心を奪われる。

この光景を何度見ても飽きる事はないというのだから、この倦怠感の制御が出来る能力は、実は何にもまして代えがたい能力なのではないかと思う。

「へえー、じゃあお前は色々な奇跡を起こすことが出来るんだ」

「奇跡って言い方は大げさだと思いますが、考え方としては………間違っていないかと思います」

今、俺の前には、洩矢 諏訪子が——違うな。

勇丸に乗った諏訪子様が先行していた。

『他の民への配慮もあるから、様はつけてね』ってことだったので、何となく諏訪子様、と呼ぶことにした。

装備中の不可侵と鏡のローブを解除する。

その時に気づいたのだが、この鏡のローブ、俺がアンタッチャブルになるのであって、ローブが被覆になるのではない。

よって、精神攻撃とかなら効果を発揮しそうなのだが、よくある雷とか炎とか氷とか、生身の部分で対処しないとローブに当たるのだ。

しかも名前の通り全面鏡なもんだから、恐ろしく耐久性が悪い。……動いた時に何かに当たったのだが、パキンと嫌な音がした時は中々に焦ったのですよ。

しょっぱなから選択肢間違えてんじゃない俺、と次に生かせる教訓を学べた事に感謝した。

そんな中、『日も暮れそうなので私の国に来ないか』って話になったので、尽きぬ興味に動かされ、帰宅する彼女のご同伴をしているというわけだったのが……。

「乗りたい」

そうストレートに言われたのは、2人と1匹で少し歩いていた時。
諏訪子様の後ろ——俺の前に居た勇丸を指差して、そうのたま
つてくれた。

連続召喚で疲労感MAXのダレダレな俺に何言ってくれちゃって
んのこの神様。

（なんてこった！ 俺だつて乗ってみたいのに！ 重いから乗った
らきついだろうなあ。とか思ってたやらなかったんだぞ！）

俺より先に乗るのは許せん！ けど崇られてもイヤだしなあ。

……そうだ、遠まわしに勇丸に拒否させてみよう。

「……………私には何とも……………一応、勇丸に尋ねてみませんか」

「あ、それなら、お前が良いなら構わないって言われたよ」

勇丸ううっ!!

既に根回しが済んでいたとは知らず、最後の一押しをしてしまった自分を責める。

というか諏訪子様、動物と話せるんですね。

しかも話す姿を見ていないことから、念話じゃないかと推測できる。

ホント神様って何でもありね。

こっちは召喚者だからってチートな理由で意思の疎通ができるだけってのに。

まあ思考が読まれていないだけ良しとしよう。

リーディング機能なんて備わってる日にゃあ恥ずかしくてお天道様の下を歩けません。

理由？

エロいこと考えられないからだよ！

……さとりさんに出会ったら詰むな、俺。

「ってことだから、えっと、勇丸。宜しくね？」

不安そうに声をかけた諏訪子様に反応して、勇丸は体を寝かし、伏せの状態になる。

乗れ、ってことなんだろう。

行動だけで察することが出来る。

「ありがとう。えへへ、よ、っと、っと。お、お。………おお、ふかふかだあ」

少しギクシャクしながら、勇丸に諏訪子様は跨った。

それを確認した後、その忠犬はゆっくりと四肢を伸ばす。

一気に視界が高くなり、俺と同じくらいになると、諏訪子様は満足そうに顔に笑みを作った。

うう、良いなあ、ふかふか。

犬に跨る女の子つてのも可愛いと思うが、今の俺は もふもふ
>女の子 だ。興味の対象が違う。

「よしよし。それじゃあ私の国へしゅっぱーっ！」

明るく宣言しながら片手を挙げるその姿は、年相応の女の子に見えた。

それが、大体1時間くらい前の出来事だろうか。

眺める先には、幾つかの白煙の筋が見える。

その下には木で作られた家と、かやぶきで作られているであろう、藁の家リアル版が多数点在していた。

（おー、田舎へ泊まろう（番組名）、なんて目じゃない田舎だな）

感想がずれているとは思うが、なにぶん仕方のないことなのだ。

俺は、生前はコンクリートジャングルから1度も出たことのなかった。

あつたとしても、それは模造品。

テーマパークやアミューズメント施設の一区画でしかなかった。

ゆえにこの光景は、テレビやスクリーンの中だけの——言ってみれば、幻想の景色そのものであったのだ。

（そついやこの時代ってトイレは汲み取り式か？　じゃあやっぱ手とかでケツ拭くのか？　そもそもトイレなんてあるのか？）

少し下品な思考だが、今後の大切なことだ。

そう思っ て便意に気を集中してみるも、よくよく考えると、まだ1度も、尿意すら感じていない。

（まさか空気とか主食にしてると出るもんは出ない、と？）

この生理現象は人間とは切れない間柄の1つである。

そこまで考えると、目の前にいる1匹と1神にそれを当てはめようとするが……………。

（やめとこう、今俺は自ら墓穴を掘りにいつている）

嫌な予感がとまらず、断念。

ため息を一つついて、視線を上げる。

すると大分国の近くまで来ていたようで、柵のような囲いが周囲

に広がっていた。

恐らく、国（村？）を1周している……のだろう。

一部に隙間が開いているので、あそこが出入り口なのだろう。

もののけ姫で見たなと何となく思っていると、門と思われる出入り口の前で、諏訪子様が、ぴょんと勇丸から飛び降りて、俺の目の前に立った。

まるでとおせんぼをするように道を塞ぎ、こちらの顔をじっと見つめられた。

「人間、まだお前には名が無いと言ったね」

「ん、ですね。……こつちに来る前にはあつたんですけど、その名は置いてきました。本当は出発前に決めておこうと思ったんですけど……」

「それじゃこれから名が決まるまで、ずっと私は『お前』とか『人間』なんて呼ばなきゃいけない。私の国に入るんだ。他人との関係を築くのに無名じゃあちと難儀だろう。で、だ。ここは、一つ私がお前に名を送ろうと思うんだが、どうかな？」

突然のサプライズに、思わず目が点になる。

「…………え？…………これといった案もなかったんで、こっちとしては願ったり叶ったりですけど、良いんですか？」

「なになに。私は神様。民の願いを叶えるのが仕事の1つだよ。入国祝いだとも思って受け取ってくれると私は嬉しいな」

そう言ってニコリと笑う彼女を見て、どこか胸が締め付けられるような、それでいて暖かくなるような思いが広がる。

何が琴線に触れたのか分からないが、思わず涙が溢れそうになった。

（神様とか関係ねえ。…………諏訪子様、めっちゃ良い人や）

言葉では表せない感情が心を占めて、それでも足りずに、その感情は涙となって溢れ出そうとしている。効果音としてはウルウルって感じで。

けれど、俺の心がそんな涙する俺を恥ずかしいと思い、必死にそれを堪える。

神様とはいえ、こんな幼い女の子の前で涙するのは、男としての

プライドが許さないようだ。

「それじゃあ、お願いします。カッコイイ名前にして下さいね」

「どうだろうね。ただ、私は似合っていると思うよ」

「そのお言葉だけで充分です。——洩矢 諏訪子様、俺に、名前を下さい」

カッコつけようと思って俺には無理があつて。

ならばと気持ちを素直に言葉にする。

これから一生付き合っていくものなのだ。

しかも、それが日本有数の神様からの賜りものだってんなら、気に入らないことはないだろう。

ニコニコしていた彼女の顔は、笑顔のままで、けれど、とても真剣なものになる。

威圧感とはまた違った……神気とでも言えいいのか。

崇め、奉る存在だと思わせるオーラが滲み出ていた。

「——お前は私が見てきた中でも、さらに特別な奇跡を扱う。

それは、神々の中ですら異様と呼べるものだ。

鳥の、鳥でも人でもない者の、狗の——様々なものの呼び子。

まるで万物を生み出すかの如くその力を駆使するお前は、人間でありながら、まるで幾人もの生命を統べる神のようだ。

これらを組み込み、『多種多様な万物』という意味の、けれど、八百万には届かずとも、私に挑むその姿勢から、それに届き、いつかは追い抜かんとするその姿を示す——

『^{つくも}九十九』と。

その名をお前にあたえる」

神なんて、生前の俺が聞いたら鼻で笑うだろう。

けれど、今ならすんなりとそれを受け入れられる。

宗教とかは、切羽詰って何かにすがりたい奴か、金儲けを企む奴しか居ないのだろうと頭ごなしに馬鹿にしていた。

だが、実際はどうだろう。

今の俺には、この目の前にいる彼女が神かどうかなんて些細な事

なのだ。

決められぬ俺に名を与え、優しく微笑んでくれる。

言葉にすれば、たったそれだけ。

だがこの少しのことが、一体何人に出来るのだろうか。

理屈は分からない。

けれど名を告げられた瞬間、俺の胸にはストンと、彼女の言葉がはめ込まれたのだ。

まるで失った何かを取り戻せたような、そんな気持ち。

ご大層な宗教名文なんて知らないが、彼女になら——この洩矢諏訪子という人格者に対してなら、その信者になったとしても、それに仕える人物に出会ったとしても、馬鹿にするでなく、鼻で笑うでなく、純粹に、『ああ、素晴らしい方に仕えているのだな』と思えるだろう。

——日本人とは、本能的に誰かに仕えたいと思っている。

なんて発表した学者もいた。

それは、彼女のような神々が、この狭いながらも広大な日本という土地を治めていたという名残なのかもしれない。

「謹んで……………拝命させていただきます……………」

ちくしょう、ガチで泣き顔モードだよ……………。

俺の震える声にも笑顔を崩さず、彼女は小さな体を大きく広げ、ただ自力の声だけで、声高らかに宣言した。

「『洩矢の国』へようこそ、異国の旅人、九十九。私はお前を歓迎しよう」

第05話 洩矢の国で

国の中央に位置する、彼女が住む社の一角。

諏訪子様は、そこに俺を連れてきた。

仏像とか置いてありそうな中央の間に、団体さんで固まっていた、国のお歴々っぽい人物の前で自己紹介をしてくれた。

思ってたよりも中々広い。

20人近く集まってるけど、その3倍くらいは収容出来そうな大きさだ。

何でも、丁度統括している各地の代表が現状報告をしに来る日だったのだとか。

その時の諏訪子様は、俺と出合った時と同じように、神様らしい口調で説明をする。

その時も少しではあるが威圧感を放つ感じを漂わせていたので、ただの自己紹介が神託を授かる儀式のように思えた。

（あ。ように、というか、まさに神託か）

……ただ、自己紹介の際の『これは私の使いである』ってのは一体どういうことだねオイ。

確かに前は神々しい雰囲気と名前を貰えた感動から、気持ちが悪く感謝フルブースト入っていたが、だからってお前にや仕える気はまだ無いぞ。

しかも、

「物の怪や妖怪が現れた時は、この九十九に言え」

とか偉そうに（偉いです）言い放ちやがった。

やめてくれおっちゃん達！ 俺に向かって『ははあ！』とか。格好がGパンとかTシャツだから異様だけど、平伏す人じゃないから！ どこのお奉行様よ！？ むしろ逆の立場ですから！

……もういい。公の場じゃない限り、お前なんて敬語はいらねえ！ 呼び捨てだ諏訪子……さん（無理でした）、と心に決めた瞬間でもある。

紹介が終わり、お歴々の方々が部屋から全員退出するのを見届けて、辺りにはもう聞く者が誰も居ないだろうと思い、俺は諏訪子を問いただす事にした。

「アー、スワコさん？ 俺、確かに色々クリーチャーを召喚出来るけど、何だか妖怪退治っぽい仕事を俺に任せるみたいな発言をしませんでしたか？」

「うー？ クリーチャーってのが何なのか分からないけど、呼び出していた鳥やら勇丸やら、鳥と人の中間のような奴らのことだよね？ だったら問題ない。だって九十九、それ以外にも荒事に向いている奇跡を起こせるんでしょう？ じゃなかったら、勇丸を貰おうとした私と敵対しようなんて考えるはずないしね」

もはや疑問符すら付かぬ確定宣言。

俺的東方名物の1つ、『あーうー』の『うー』だけ聞くことが出来た。お前はレミリアかつつの。

おー、生『うー』だ。なんて感想は一瞬にして消え去り、食って掛かるうとするが、何が可笑しいのか諏訪子はこっちを向いたままニコニコと笑ってやがる。

この仕草といい『うー』発言といい、毒気を抜くのを図ってやってるんじゃないかと判断し、それに見事に引つかかっている自分を見て、落胆する。

実際、見事に俺の毒気は抜かれているのだから。

そして、そんなこちらに止めを刺すかのように、

「……………否定しないってことは、その通りってことだね。じゃ、それ系の荒事は任せたから」

そう宣言されました。

……………なにか？ 俺は誘導尋問に引つかかったのか？

情けなさを乗り越えて、涙が出そうだぜ！

うじうじと、orz ポーズをする俺に、勇丸が元気出せとばかりに体をすり寄せる。

ああ、お前だけだよ俺の味方は。

もうちょい熱血入った人なら『分かりました！この私めにお任せ下さい！』とか言つて、戦闘して経験値積んでレベルアップしてくストーリーもあるだろうが、俺は基本ものぐさ。

避けられる面倒ごとなら可能な限り避けて通りたいものだ。

「え？ だからこれは避けられない出来事なんだって」

「…………俺の思考を読まないで下さい」

「そんなことは出来ないよ。ただ、顔にそう書いてあったから」

どんなに詳しく俺の顔に書いてあるってんだ。

「…………ただ、さ。私の国は段々と大きくなってはいるけれど、それに対して私の守れる範囲がまだ狭いんだ。だから、九十九にはそ

れの補助をしてもらいたいんだよ」

「……………こう見ても俺、一度も生物を……………はないな。虫とか魚とか殺してるし。……………一度も大きな生物を殺したことないんですよ？ 妖怪退治って、ようは妖怪の殺害でしょ？ 追いつ返すとなでなくて。ずぶの素人で勤まるようなもんなんですか？」

「子供でもあしらえるようなものいれば、大人が何十人いても敵わない奴もいる。命の危険は常にあるよ。けれど、誰かそれをやらないと、誰かが食べられちゃう。幾らでも言い方はあるけど、有体になえば、九十九に犠牲になってほしいんだ」

幾らでも言い方あるのなら、せめてもっと口当たりの良い言葉で勧誘してほしかったです。

しかしまあ、変に真実をばかして言われるよりは、よっぽど好印象です、諏訪子さん。

ただ、それと俺のやる気が比例するってわけではないのは、ご了承下さいって感じだが。

「そんな嫌そうな顔しなさんな。なあに、私の国だと分かって侵略してくる奴は、強い妖怪にはいないよ。来るのはそれが分からない、私の神気も判断出来ないような、そういった奴ら。ちよつと強い動物、程度に思ってくれていいよ」

顔に出てたか。

俺の気持ちをくんでくれて何よりだけど、顔に出るのは直していかねば。

それに、命がかかっているとはいえ、誰かに頼られる場面というのは憧れていたことだ。

誰しも自分だけのナンバーワンがほしくて、けれどそれが叶わなくて、大半の者は身の丈にあった場所へと落ち着く。

だが、俺はその夢を再び掴むチャンスが巡ってきたのだ。

誰かに感謝され、必要とされる職は、それだけで何事にも変えがたい、心の満足感を得ることが出来るだろう。

ならば、やってやる。

チート能力もあって、誰からも頼られ、感謝される職で、神様から名前まで貰って。

命の危険はあるが、それはどんな仕事でも程度の差はあれ伴っている。

特に俺は、仕事上の事故が原因で、今ここにいるようなものだ。

ここまで来たら、多少の命の危険性は無視して、俺のレベルアップの経験値を積むことにしよう。

それに、車の免許を取る時、教習所の人が言っていた。

『フォローしてくれる人間が居る時に、うんと失敗しておきなさい』と。

理由は言わずもがな。

この場合、俺のバックには洩矢諏訪子というビックネームが控えていることになる。

妖怪退治をやれと言っているのだ。少しはサポートしてくれるだろう。

幾らかの失敗もするだろうが、それは今後の活躍をもって返上するとする。

よって、

「……………分かりました。この九十九。精一杯お勤めがんばります」

「ん、急に素直になったことに裏を感じるけど、まあいいか。――
――改めて宜しく。九十九」

「こちらこそ。宜しくお願いします」

一応ケジメをつけるように、軽く頭を下げて真面目に返答。

気持ちよくまとまったところで、うんうんと満足げに頷く諏訪子さんを尻目に、丁度良いやとさっきから気になっていた疑問をぶつけてみる事にした。

「そういえば、諏訪子さんの口調って、どっちがホントなんですか？」

「……………九十九ってばさっきから様を付けてないし……………まあ、いか。なんか九十九の『様』付けて気持ち悪いし」

ほっとけ。

「国民達の前では、ちゃんと様付けしてね。信仰に影響するから。最悪、九十九を食べないといけなくなるかも」

「……………マジ気をつけます」

「（マジ？）宜しい。で、どっちが本当の私かだったよね。……………ん、一別にどっちかが本当の私、とかつて訳ではないんだよ。私は神様。かく在りきと願われれば、それが私になるの。最も、私の根源から外れない範囲でだけどね」

「つまり、ここの人達は諏訪子さんのことを神だと崇めているから神様らしく、俺は諏訪子さんと仲良くしたいから砕けた口調になった、ってことですか？」

「そうだね。私は望まれてここにいます。それは、そうあるべきと願った人々に応えた結果で、私自身もそうしたいと思ったから。ん、こんな回答で満足かな？ 人間」

「急に偉そうにならんで下さい。でも、うん。よく分かりました。ありがとうございます」

「偉そうじゃなくて、偉いんだよ。……それに、迷い人を導くのも私の仕事の1つだからね。これぐらいは当然さ」

それは良いことを聞いた。

早速、確かめてみるとしよう。

「……………神様神様、楽に生きたいのですが方法を教えて下さいな」

「死ねば良いんじゃないかな」

間髪いれずに返ってきた答えに、思わずたじろぐ。

生きたいと言っているのに死ねばとはこれいかに。

……だからニタって笑いながら言わないで下さい諏訪子さん。

あなた祟り神の統括者なんスから。

そこまで人の生死に直接関連している神様なんてそうそういないんスから。

本気くさいのが笑えないッス。

以上、思わず語尾がス系になるくらいには動揺を誘える、神様からの神託でした。

それから体感で、大体6ヶ月。

諏訪子の社の一角に部屋を貰った俺は、起きて景色を眺めて寝るだけの完全ニート生活を満喫し———たかったなあ、もう！

初めの2、3日位は、勇丸と一緒に国———というか、村（諏訪子のいる社の周りだけ）だった俺の感覚的には———を見て回った。

縄文だか弥生だか時代は分かんが、逆ジェネレーションギャップに驚いたり感心したり。

諏訪子の生活（妖怪退治とか豊作祈願とか）を見て、神様の大変さを感じたり。

妖怪退治にしては、諏訪子が睨むだけで妖怪の足元から無数の蛇が絡みつき、毒が窒息か分からないが息絶えた姿を晒していた。……小便ちびりそうッス。

で、見るもん見たし、景色でも眺めてだらだらするかと思ったら、『九十九様！ 妖怪が現れました！』とか村人Aに言われた。

覚悟は出来ていたし、勇丸を常時召喚しているのにも慣れてきた。といっても体力が増えたのではなく、微妙な疲れ具体の中でも生

活する術を学んだ、というべきなのだが。

で、よしきたとばかりに連れられるままに行ってみると、そこには殺した家畜を食べている、黒い犬——いや、狼か？ がいた。

勇丸と同じくらいの大きさで、その口と目は真っ赤に色づき、あああれが妖怪なのだと本能で理解出来る容姿をしてた。まじこええ。隣には、いつでも俺の盾になれるよう、勇丸が吼えるでもなく佇んでいる。

諏訪子の時には今にも飛び掛らんとする姿勢だったのだが、今回の様子を見るに、苦戦しない相手なのではないかと判断し、行動を起こす。

勇丸へ『いけるか？』と思念を送ると、当然だと言わんばかりに黒い犬に向かって走り出した。

初めての戦闘。

クリーチャーである勇丸の2/2というステータスがこの黒い獣にどこまで通用するのか見る為に、俺はあえて何の強化もしないことにしている。

ただ、劣勢になったら即座に呪文を唱えて勇丸を助けるが。

飛び掛る勇丸。

それに気づき迎え撃つ妖怪。

いざとなったら勇丸を強化し、妖怪を焼き払い、瞬時に増援を召喚出来る体制を整えていたのだが、黒い獣は勇丸の噛み付き一撃で絶命し、その場に崩れ落ちた。

(……………あっけねー)

勇丸に全部やってもらっておいてあんまりな感想だったが、心はそれが全てだと言わんばかりに啞然の一言で埋め尽くされていた。

(あの黒いの、家畜の馬を何頭も殺してたから、少なくともそれらよりは強いんだろ？ で、勇丸はソイツをあつという間に倒した。……………パワー2つてこの世界じゃ結構強い部類なのか？)

この疑問は、後々解決していった。

その後何度か戦闘をして分かったことだが、こちらの世界では、パワーやタフネスの数値が1上がるごとに、どうも+1ではなく2倍もしくは3倍といった具合でパラメーターがインフレ上昇してい

るようなのだ。

様々なクリーチャーを召喚し、熊、怪鳥、人型と、多種多様な妖怪を相手にした結論だった。

じゃあ4/4とか5/5とかのクリーチャーを召喚出来る俺なら、体力面を考えなければこの仕事なんてチョー余裕じゃん。ということとは無かった。

何故ならあいつら、数が多い。

3日に1回は妖怪退治に出かけていると思う。

それだけ聞くと少ないと思えるだろうが、いやいやちょっと待ってほしい。

俺が守らなければならない範囲は家でも村でもない。国なのだ。

『ちょっとコンビニ行ってくる』的な距離ばかりに妖怪は出ないものだから、必然、そちらに出向いて討伐しなければならない。

目的地へ行くのに野を越え山を越え3日4日なんて普通。

西へ東へ駆け回る日々。

初めは自分の足で。

2回目の討伐からは勇丸に乘せてもらって。

初日に何キロ移動するんだってくらい歩いたので、体力もそうだ

が足が棒になってき為に、勇丸へ乗せてくれないかと頼んだのだ。

初めての勇丸騎乗？ がスナミナ的に辛いから乗せてくれってのは微妙な気分になったけれど。

ええ、超良い触り………もとい、良い乗り心地でしたよ。勇丸が俺に配慮して乗りやすいように移動してくれたのが大きな理由ですがね。とほほ。

そして、何とか空いた時間を利用して、今度は呪文系の特訓も始める。

『火力』ダメージの代表格である、赤マナ1の『インスタント』呪文。対象に2点のダメージを与える電撃つばい攻撃絵柄が特徴の『ショック』を選択。どの程度の範囲まで届くのかと試してみると、これも俺の声が届く辺りにまで有効なようだ。

『火力』

クリーチャーやプレイヤーに直接ダメージを与える呪文の総称である。語のイメージから、基本的に赤の呪文のことを指すが、直接ダメージを与える呪文であれば、他の色であってもこう呼ばれるこ

とがある。

『インスタント』

即座の、すぐに起こる、の意。ゲーム中、わずかな場合を除いてはほぼ全て任意のタイミングで唱えられる呪文タイプのこと。

ただ、ショックを甘く見ていたと、その時痛烈に感じた。

太さも人の胴体より少し太いくらいの、手ごろな木を見つけたので、それを的にした。

周りに人が居ないことを確認し、初めての呪文だからと、10m程離れて使う。

刹那、辺り一面に響く破裂音。

一瞬で耳が馬鹿になり、視界は真っ白に染まり、平衡感覚が失われ、俺はそのままぶっ倒れてしまった。

きんきんと耳鳴りのする、所々視界が白くにこる人間一丁出来上がり。

星が回る視界で何とか木を見てみると、半ばからまるで爆弾で吹

き飛んだように上下真つ二つになっていた。

……なんだこれ。ショックだよな？ 上位の『稻妻』じゃないんだよな？

確かに名に偽りなしだが、ショックどころかギガデイン、もしくはサンダガっぽい威力に、啞然。

効果を見るに、大気中の電気を対象にぶつける呪文のようだ。

ギヤザのルールを覚えるにあたって、初級の第一歩として必ず話題に上がるカードだっただけに、人生初の呪文詠唱がショックだったのは少し嬉しかった。

これでもつと威力のある『音波の炸裂』なんて使った日にゃ俺の耳は取れかねん。恐らく名前通りの効果を発揮するだろうから。

ならばと下位の……対象に1点のダメージを与える『ふにゃふにゃ』……は選ばずに、さらに下位の『焦熱の槍^{しやうねつのやり}』を選択。

1マナ1点『ソーザリー』とかホント誰が作ったんだろうと目を疑ったものだ。しかしMTGにおいて完全な下位のカードは存在しない。

きつと、何かの拍子で目の目を見る機会が訪れるかもしれないと、ちよつとだけ祈ろうと思う。

『ソーサリー』

魔法、魔術の意。上記の『インスタント』とは違い、基本、自分のターンでしか発動出来ない。だがその分、効果はインスタントより強い——場合が多い。

ショックで真つ二つになった木の近くにある、別の木に向かって、焦熱の槍を試す。

突然空間攻撃したようなショックのときとは違い、ピッコロさんよろしくマカシうんたらのように俺の指から出た赤い光線は、いかにも『魔法です！』的な軌跡をえがき、木に当たった。

パンと大きめの音が響き、メキメキと木が倒され、燃え上がる。

おお、ショックに比べればお手頃（被害的な意味で）な呪文を発見したぜと思う。暫定で俺のメインスペルにしよう。

……どうせすぐに上位カードを主に使うようになるんだろうしな。慣れるに。

焦熱の槍で燃えた木が周りに四散して森林火災になりそうになっていくのを、勇丸と共に慌てて消しながらそう決めた。

そんな感じで、割と精力的にどこまでMTGのカードを扱えるのか検証していった。

その過程で分かったのは、

●ライフを支払うデメリットは体の細胞の減少らしい。それ系のカードを使うとそこそこ痛いどころか体中に痣が出来始めた。何てこった。俺生前は黒使いなのに『スーサイド』系とかはもう最後の手段だな。ライフ（プレイヤーのHP）1でどれくらい何処の細胞が減るのかとか検証するのすら怖いからやめる。脳みそだけは減らないと思いたい。

『スーサイド』

自分のライフをリソースとして使うこと。また、ライフ支払いが必要なカードや自分のライフを減らしつつ相手に損害を与えるカードの総称。「欲しい物を得るためにあらゆる物を利用する」という黒が持つ基本理念そのもの。元々の意味は「自殺」らしい。

● 1日の上限使用枚数は7枚。ただしドロースる能力が発生した場合は、その効果が現れる。

● ソーサリーは俺が動いていると使えない。

● 体力の続く限り、どんな色でも使用可能。一度に同時使用出来るマナは約3で、自身のマナストック数は大体5つぽい。イメージとしては、蛇口から一度に出る水の量は3が限界で、ストックされている水の量は5。

ってな具合だった。

ゲーム風のパラメーターで表すなら、

HP 3以上（検証が痛いので断念）

使用可能なスキルの種類、 1日7種。

MP 容量5 MP 出力3 MP 回復力5

以下微々たるものなので未記入。

というところだろうか。

デメリットの多少の付随とか言っても結構制限あるなと思った。

あれなんで？ チートじゃなかったの先生。と頭を抱えるが、自分を鍛えていけば上限開放とかがあるんだろうと自分を納得させて、暗い気持ちを押し込めた。

まあそれでも3以下でも組み合わせれば無双は難しくとも効果的な『シナジー』を発揮するカードはごろごろあるのだ。

妖怪倒して経験値を上げつつ、今はこの3以下のカードをうまく組み合わせ、自分とカードの相性を最適化させていくことにした。

『シナジー』

相乗効果のこと（英語語源の直訳）。コンボと似たような使われ方だが、コンボは「勝利に直結する」ようなニュアンスで使われることが多く、その点で意を異にする。

「ちょっと西の最奥の村まで行って、貢物をとってきておくれよ」

「……………えらい唐突ですね諏訪子さん。後、西の最奥って言ったら山あり谷ありの難所じゃないですか。往復で1〜2週間以上は掛かりますよ」

俺たちが住んでいる神社の大広間に、諏訪子と俺は互いに胡坐をかきながら座り込む。

妖怪の討伐から帰ってきたら、ちょっとお話ししようと呼ばれ、今に至っていた。

「ふふん、神様はいつも唐突なのだ」

「…………唐突なのは別に良いですけどね。何でまた、急に」

「日ごろの感謝の意も込めて、道中にある温泉にでも、と思ってね。私がたまに行く場所で、よく疲れが取れるんだよ」

ケロケロと笑うその表情を見て、温泉に入る自分を想像する。

——昇りたちこめる湯煙。

一望する絶景。

吹き抜ける風は火照った体に心地良い。

良く冷えたお酒に、少し塩気の強いおつまみ。

ゆったりとダラダラ過ごす、至福のひと時。——はあびばのんのん。

……………良い。

「それは嬉しいなあ。正直、体を洗うのが川だ池だ雨だとか、キツかったツス」

「九十九つて結構良い家の生まれなの？ 普通はそうやって体を清めてるのに」

「……………ええ、かなりの良いトコのぼっちゃんでしたよ。衛生面とかは結構贅沢な生活してました」

今と現代生活を比べて、ね。

——俺はまだ、諏訪子さんに転生やら何やらを言っていない。

能力の一端は話したが、生み出すのとか維持するのが疲れる程度のことだけだ。

諏訪子さんもまだこちらから強引に聞きたい事はないようで、こっちが誤魔化しながら話をすると、察するように会話を切り上げてくれる。

一応は未来から来たことになるのだから、興味を持った諏訪子にせっつかれその世界での話しなんてしようもんなら、最悪日本が崩壊し兼ねないと思ったからだ。

科学の発展で神秘が神秘でなくなり、神や妖怪は架空の存在へと成り下がる。

豊かな森や空や川はその範囲を狭め、コンクリートジャングルなんて言葉が似合う国へとなった日本を見て、神々は——諏訪子さんはどう思うのだろうか。

「でも、その間の妖怪退治とかはどうするんです？」

「九十九が来る前に戻るだけだしね。それに、勇丸を置いていつてほしいんだ。なに、温泉は私の聖地の中にあるものだし、そこへ行く道も聖地内で安全だから、1人でも問題ないさ」

「そういうなら1人で良いですけど………勇丸をどうする気ですか？」

「別に何もしないよ。ただ、勇丸もずっと主と一緒にいたらかしばって疲れちゃうでしょ？ たまには別れて生き抜きさせてあげなきゃ」

確かに。

言われ、もはや positioning と化した俺の横で、勇丸は、やはり座りながらも周りの警戒をしてくれていた。

元はカードだし俺からの体力を糧に実体化しているとはいえ、例え問題ないとしてもこっちの気分的に勇丸が苦勞し続けているのは申し訳ない、と改めて考える。

半年近く勇丸を出し続けて、低コストクリーチャー1匹くらいならそこまで気にならなくなってきたのだが、そういった気づかいもたまには良いだろう。

「分かりました。勇丸を置いていきます。それで、貢物つてのはどんなものなんですか？ 熊を丸々1頭、とかだったら、俺無理ですよ？」

「何でも新しい酒を作ったらいいんだ。今回はそれをね。少しくらいなら飲んでも良いよ？」

「それは良いですね。頂いておきます。あんまり量は持てないですようけど、出来るだけ運んできますよ」

「大丈夫、完成したら西の村の若い衆が持ってくるさ。だから九十九は瓢箪1個分だけ持って来てくれればいいよ」

了解ですと返しながら、勇丸にその旨を伝える。

OKの返答があり、この世界で初めての気ままなぶらり1人温泉旅行だと思ってワクワクする。

「じゃあお言葉に甘えて、明日の朝からでも出発します」

「分かった。天候が崩れないように祈っておくよ」

「ありがとうございます。……………んっ、はあ。今日はこのまま休んで、明日に備えますね」

このまま寝るかと背伸びを一つ。

諏訪子さんと別れ、部屋で明日への準備を始める。

といってもこれといった準備もなく、せいぜい着ていく衣類の点検くらいだったけれど。

「それじゃあ、行つてきます」

「ゆつくり休んで来るといい」

「いつてらっしゃいませ、九十九様」

朝日も隠れている時間帯。

諏訪子さんと村長さんに見送られて、俺は村の出入り口から旅立っていった。

見送りには諏訪子さんと村の村長、そして勇丸が来てくれた。

村長の前だったので口調は神様バージョンだが、いつもの事だ。

どこか遠くへ討伐に行く際は、村長と諏訪子さんはいつも見送りに来てくれた。

村長は——この国の人々は、信仰心の関係で、俺に対して友人に接するような態度は今でもとってくれないが——そのうちフレンドリーになりたい——、それでもこちらを気づかい、感謝しているのは伝わってきていた。

なるべく早く帰ると伝えてると、それだと送り出す意味がないと諏訪子さんや村長から言われ、結局本来より1週間ばかり多めの期間、大体20日くらいをもらってしまった。

20日以前に帰ってきたら崇つてやるとか、どこまで本気なんだこの神様。

いつもは勇丸と一緒に来てくれるのだが、今回は1人。

少しどころか結構寂しいし心細いが、俺も子離れ？ をしないと
いけない時期でもあるのだろう。

旅行期間に新しいクリーチャーや呪文でも開拓して驚かせてやろう。

良さそうなシナジー見つけたら切り札その1とかその2とか名付けてやる！

期待と不安と楽しみがせめぎ合う心を押し付けるように、俺は西の村への第一歩を踏み出した。

勇丸が、元気付けるかのように遠吠える。

ふっ、俺は振り向かずにクールに去るぜ！ あゝばよう！

「……………これで、宜しいのですか？」

九十九が見えなくなって、少し。

村長は私に尋ねてきた。

「よい。九十九が来て半年。彼は本当によくこの国に尽くしてくれた。半ば脅しに近い形での出会いではあったが、それを気にするでもなく、ごく自然に私達に良くしてくれた。奴なら最悪、この国が落ちていても機微を察して逃げれるだろう」

「初めて諏訪子様が人間を連れてきた時には一体何事かと思いましたが、何とも面白い考えをしたお方でしたな」

「そうだな。こう——私やお前と根本で考え方が違う。何とも甘い考えを持った坊やだよ」

「……………一体、あの方は何者なので御座いますか？ 諏訪子様の眷属だとお聞きしましたが、どう見ても人間です。が、勇丸様を従え、物の怪を退治して下さった時には、様々な——まるで妖怪を従え

る大妖怪のようでしたな」

「言っていることへの辻褄が合っていないぞ？　そして、その割には恐れておらぬな」

「人は矛盾し葛藤するものだと思います。それに、あの方を恐れるなど、それは無理というものです。ことあるごとに私共に『仲良くしよう』と笑顔で言い、様々な知恵や技術を授けて下さいました。あの方は大したことはしてないと仰いましたが……最近また、九十九様から教えていただいた“千歯こぎ”なる道具で、稲作の負担が大分減りました。これで従来の半分以上の時間と労力で脱穀が可能で御座います。……そんなものを私達に与えて下さった方を、どうして恐れることが出来ましょう」

その話を聞いて、私はくつくつと笑う。

全く、どこの国から来たのかは知らないが、大層な拾いものをしたものだ実感する。

突如、私の聖域に現れた、異国の服に身を包んだ男。

『坤を創造する』能力を持った私は、それを即座に察し、その者へと近づいた。

よく見てみるとこの国の民よりも背は高かったが、肌も、髪も、目の色もこの地方でよく見られるもので。

私の神気で気絶しそうになり、こちらの姿を見た時など頭を擦り

付けて許しをこうてきた。

ならばと反応をみるように勇丸をよこせと言うと、一転。こちらを妖怪のようだと言い放った。

唇も青く、体も震えた状態で、お前は最低だと啖呵を切ったのだ。

何か策があつたのかもしれないが、あんな状態でよくもまあ大見得を張れたものだと感じする。

名前が無いと言うから付けてやったら、すこぶる喜んだ。

私の社に住んでも良いと言ったら、笑顔で感謝を言われ。

この国について、私の知る世界の話をしてやれば、目や耳を皿のようにして傾け。

崇つてやるぞとからかってやれば、それはそれは女々しく謝ってきた。

——今まで、私と相對した生き物は全て、神である私と接していた。

だが奴はどうだ。

初めこそ他と一緒だった。

けれど時間の経つうち、敬う態度ではあったが、それは“年上・目上だから”程度のもので、決して神だから、といったものではなくなつた。

かつて出会つた者達と比べれば何とも無礼だったが、九十九の行動や言葉はこちらと仲良くなりたいという思いから発生したものだ。

これまでなかった事に戸惑いはしたものの、私はそれがいつしか心地よく感じるようになって。

——この地に生を受け、人々の生活を見守り続けている中で見る、人と人との触れ合い。

私と九十九との関係は口調こそ違えど、その中の1つである“友達”と呼べる存在だったのではないかと今では思える。

（心が暖かい……。うん、良いものだな、友というものは）

踵を返す。

社に向かい歩みを進める先には、村中の男達が集まっているのが見えた。

集団を掻き分け、社の段の上に立つ。

何かの会合か集会か。

祭りの類ではないのは確実。

何故なら、男達の手には各々弓や棍棒や鍬などが握られている。

特に多いのが、この国で近年生産された、鉄と名付けた特別硬い
鉋石で加工した剣だ。

動物の皮や櫟の木の盾など、一刀両断に出来るだけの硬度と鋭利
さを兼ね備えている。

——これならば、多少なら戦力差を埋められるだろう。

「時は来た！ 彼奴らはぬけぬけとこちらに対して『従え』とのた
まった！ それを断るや否や、我が国に侵略を仕掛けてきている！
こんなことが許せるか！ 我らはこの国の為に骨身を惜しまず働
いてきた。しかし！ 他の国への侵略など1度たりとも行ったこと
は無い！ そんな我らがなぜ他者から略奪されなければならないの
か！」

声を張り上げる中、集まった民達の目に怒りの炎が灯るのが分か
る。

それはそうだ。私が焚きつけているのだから。

けれど、そうしなければこの国は一方的に負ける。

分かり合えぬからこそ争いが生まれ、負ければその分かり合えぬ者達の下で生きねばならない。

そんな理不尽、例え天地が許そうとも、この私が許しはしない。

「拳を握れ！ 目を見開け！ 我らはこれより死地へ向かう！ 敵は強大だ！ 生きては戻れぬ者もいるだろう！ だが忘れるな！ お前達の背中には、妻が、子供が、両親が、国がある！ それを忘れなければ、我らは鎧袖一触となって、敵を打ち倒すだろう！」

割れる様な声の渦。

これが祭りだったらどんなに良かったかと、一瞬の後悔が過ぎる。

「我が眷属九十九は、狗神である勇丸の力を最も引き出す為に動けぬが、その甲斐もあって今勇丸は最も気高く誇り高き獣となって、我らの怨敵を打ち据えてくれる！」

既に勇丸には話してある。このクリーチャーという存在は、仮に息絶えたとしても、九十九が無事ならば幾度でも蘇る事が出来るのだという。

すまないと思うが、勇丸にはこの国の為になつてもらう。

九十九を戦わせたくない私と、けれどそれをすれば民に要らぬ不安を与え一方的に蹂躪される事態に陥ってしまうことを考慮した、苦肉の策。

主の為だと騙すような真似をしたのに、勇丸はこちらの提案を受け入れてくれた。……この様子では、全てを理解した上でこちらに協力してくれているのだろう。

私の機微を察して、主の害にならないならばと最大限の譲歩をしてくれたようだった。

全く。ここまでの忠犬ならば、本当に私が貰っておくべきだったか。

「敵は『八坂』の神とその軍門。強大なれど、我らには恐そるるに足らず！ この洩矢諏訪子が打ち払ってくれよう！」

大喝が全てを揺らす。

天を、地を、人々の心を。

けれど、私の心までは揺らしてくれなかった。

恐らくこの男達の一握りも無事には戻れない。

そしてそれは、私にも当てはまる。

この国が鉄を精製出来るという情報を、相手が掴んでいない訳がないのだ。

現存するどの武具よりも強大なそれを知っておいてそれでも攻めてくるということは、そういうことなのだろう。

他国を次々と飲み込んでいった神が、いよいよこちらに牙をむく。

その為の準備はしてきたし、民達の鍛錬だって、九十九には隠れていたが、しっかりと行っている。

私自身も充分に力を温存出来た。

「人々よ！ 今が戦う時！ 勝って、勝って明日を勝ち取るうぞ！
総員、進めえ！」

号令に従い、民が進撃を開始する。

死地へ送り出す命令をしたことに心を痛めるが、そつと勇丸が腰に鼻を擦り付けてきた。

これが指導者として、先にたつものとしての義務。

そつ心を縛りながら、勇丸の鼻の頭を搔いてやる。

気持ち良さそうかは分からないが、目を細め、こちらに目を配る。

「……………ありがとう」

九十九め、良い家来を持ったものだ。

……………そんなアイツの戻ってくる場所を奪っちゃあ神様の名折れだね。

ああ、そうだとも。絶対に倒す。絶対に戻る。——絶対にこの国を守ってみせる。

だから、皆には申し訳ないが——私の為に死んでおくれ。

「——舐めるなよ八坂。例えこの身朽ちようとも、お前をこの地には入れはせんぞ」

第06話 悪魔の代価

「へ…………へっ…………。ぬう。出ないクシャミとか、勘弁してほしいわ」

むず痒くなつた鼻を擦る。

国を発ってから2日。思ったよりも早く発見できた温泉に、俺は早速お世話になっていた。

さすが神様御用達。体の芯から疲れが取れて、精神も澄み渡る効果も実感出来た。

すっかり1週間程そこで過ごしてしまったが（え、お陰で色々とカードの組み合わせもまとまった…………様な気がする。

うん、今度から度々ココに来るようにしよう。

温泉から上がり西の村へ向かうべく、散歩をしながら森林浴。

木々の間を吹き抜ける風が、火照った体から良い具合に熱を奪つ

てくれている。

格好は相変わらずのGパンに白Tシャツだが、今はそれプラス、灰色寄りの白い外套を装備中。

これらの外套を貰ったのは、洩矢の国で初めての遠征討伐の時だった。

流石にその格好で長期間の旅は辛いのでは、という諏訪子さんからの配慮でもある。

おお神様から装備品貰えるなんて！ と貰った瞬間に小躍りしたのを俺は忘れないだろう。

で、どんなSUGEE効果があるのかと思ったのだが、常に清潔であるだの通常より多少丈夫になるだので、攻撃力UPとか移動速度倍増なんてことはなかった。

でもこの外套。なんとミシャクジ様の抜け殻を使っているのだとか。

確かに蛇皮？ つばい、光沢の抑えられた白い生地で出来ているのだけれど、結構快適だったりする。

雨や風を通さず、野宿する時にはこちらの体温を適度に逃がし、中々に過ごし易い状況を作り出してくれる、優れもの。

厚みが無いので、下に敷く場合は地面を整地しないとゴツゴツし

てて寝難いのはご愛嬌。

軽くて丈夫で快適で。衣類として見るならこれ以上ない機能が搭載されていたのだ。

これが純白だった日にゃあ、俺は鷹の団とか作らないといけなかったが、色的にも性能的にも文句のない逸品だ。

それから、どこかに行く時にはいつもコイツのお世話になっている。

勇丸に続く、相棒その2って感じです。

（よっし。気力体力ともに充実。折角だから移動用のクリーチャーを試してみて、もう1度温泉に寄れるだけの時間を捻出するかな）

既に10日程経過しているが、急げばどうにかなるだろう。

毎回毎回勇丸に乗って移動するのは何だかあいつに悪い気がして、いつか移動用の奴を召喚しようと思っていたのだ。

良い機会だし、試してみようと思う。

……温泉気持ちよくて、だらだらし過ぎでカードの組み合わせとか全く考えてないのは忘れることにしよう。

「来い！ 『ターパン』！」

現れたクリーチャーは、ぱっと見は、馬。

しばらく眺めても、やっぱりただの馬。

それもそのはずで、こいつはどこからどう見ても少し能力がある程度の馬である以外の何者でもないのだから。

緑マナ1で現れる1/1の馬クリーチャー。能力は、コイツが死んだ時にプレイヤーのライフを1回復させるというもの。

このカードを見るまで知らなかったのだが、何でも前世では実際にいた絶滅種の馬なんだそうだ。名前もまんま『ターパン』。

カード製作者も粹なカード作るじゃねえかと召喚し、実物を前にして思う。

つぶらな瞳に幼い頃お世話になったポニーランドなる乗馬施設での記憶が蘇る。

その時はまるで山を見上げている気分だったが、今はさすがにそこまで大きく見えることは無い。

村では競馬に出てくるよりは小さめではあったがそここの馬がいたし、熊やら勇丸やらの大きな動物を多々みていたことで、感動

は薄れてしまったようだ。

「よろしく、ターパン」

ぶるりと鼻息を荒くし、こちらに答えたように返事をしてくれた。

OKみたいなので、早速ターパンに跨る。

……いや、跨ろうとした。

「……あれ、なんかこう、足とか引つ掛ける道具はないのか？」

ターパンの体を見ても、どこにもそんなものは見受けられない。

しまった、馬だからって騎乗に適した道具が付随している訳じゃなかったんだった。

「何だったか………あぶみ 蹬？ 兎も角、今度それを作ってみるかなあ」

構造自体はそこまで難しいものではなかった筈だ。

俺が楽出来るのなら、発案者達には悪いがガンガン製造していく。
それが俺クオリティ！

なんて調子に乗った思考を試みるも、ターパンの上に登るのは
キツそうだ。

壁とかならダッシュ飛び乗りとか出来るので良いのだが、またが
る相手は生物な訳で。

極力ダメージを与えないように、近場にあった木の上からターパ
ンの上に乗る。

カッコよく跳躍で飛び乗りたかったが、はてさて、垂直飛びで全
国平均以下の成績が当たり前の俺は、一体何年脚力を鍛えれば出来
るのやら。

ならば。

手綱も鐙ない乗馬だが、今の俺にはチートスキルのオマケである
意思疎通が備わっている。

乗ってる最中に色々とお願ひして対処することにしよう。

(今度からしゃがんでもらうか)

しゃがんだ状態から俺を乗せて立てるかなあ？

とか漠然と考えてみる。

次降りた時にでも試しようと思い、ターパンに西の村へ行くよう
指示を――

「

息を呑んだのだ。まさか、と。

体が突然軽くなったからだ。

温泉や気分の高揚から生じたものではない、まるで、クリーチャ
ー1 体分を維持することが必要なくなったような……。

(!?)

振り返り、今まで進んできた道を、その奥にあるはずの洩矢の国
を見る。

山々に囲まれて見えないが、なんてことは無い普通の道。

空は晴天。雲1つない快晴で。

けれど、何かがオカシイ。

「——静か……過ぎる？」

鳥も、獣も、虫すらも。

耳に届くのは、風が木々を揺らす音だけ。

今までこんなことはなかった。

何かがおかしい。その決定的な何かが分からないまま、俺はターパンへ洩矢の国へ戻るよう、指示を出す。

そうして、徒歩では考えられない速度で、木々の間に張り巡らされた道を駆け抜けていく。

この分なら、月が大地を照らす頃には戻れるだろう。

（何が……何が……何が——！？）

焦る気持ちと相まって、数刻の間、俺の頭は正常に動いてくれなかった。

やっと冷静になれたのは、日暮れ間近。

無休で走り続けたターパンも、流石に夜目は効かないようで、若

干の速度を落として走っている最中であつた。

（体力に空きがある。必要以上に力がみなぎって………違う。本来の体力に戻っただけだ。か、考え………考えられる………ことは………）

体力のレベルが上がった。なんて話だったら、手放しで喜べた。

けれど違う。そんな感覚ではない。

考えたくない結果に目をそむけ、それでもやはり辿り着いてしまふその結論。

（――勇丸が………死んだ）

初めてのクリーチャーの死。

カードゲームでの出来事なら、墓地と呼ばれる捨て札置き場に行くだけのことだが、こちらで死んだ場合はどうなるのだろう。

情報では知っている。あの世のおっちゃんから教えてもらったから。

この世界では死んでから24時間は脳内のカード捨て場に置かれた状態になり、時間が経つと脳内山札に戻ると。

そんな、何処にでもあるトレーディングカードゲームに乗っ取ったルールだった。

だが、記憶はどうなるのだろう。

俺と勇丸は決して短くない時間を一緒に過ごしてきた。

勇丸におんぶに抱っこ状態だったが、思い入れは今までのクリチャー達とは比べ物にならないほどある。

—— 召喚されたカードは、成長する。

身体や能力的には分らないが、少なくとも勇丸は俺に対してゆつくりとその態度を軟化させていったのだ。つまりは、思考の成長だ。

それが、無に帰す。

ただ実体からカードに戻すだけなら記憶の引継ぎは出来ると実験で分かったが、死んだ場合は試すことが出来なかった。

ならば今すぐにも勇丸を召喚したいが、あいつはクリチャー

の中でも特殊な『伝説』タイプが付与されている。

『レジェンド 伝説』

MTGには原案となった物語があり、そのストーリー上重要な人や場所、道具などがカード化された場合、この特殊タイプを持つことが多い。そんな重要なものが2つ以上同時に存在するわけがないという解釈の下、もし同時に存在しようものなら、その瞬間、それらカードは対消滅し、捨て札場に置かれる。

俺が召喚した『今田家の猟犬、勇丸』は白1マナで2/2のバニラという、MTGの価値観からすれば破格のコストパフォーマンスを持つクリーチャー。

その際唯一のデメリットが、この『レジェンド』。一度に複数枚は使用出来ないよう調整されていた。

今、あいつの生死を確認する為に勇丸の召喚を行えば、このレジェンドルールに引っかかり、対消滅を起こしてしまうかもしれない、

もしそうなったとしたら、最悪、勇丸を殺しかねない。

だからといって召喚しないのだとしたら、あちら側は勇丸が危なくなっている状態にも関わらず、雑多な妖怪相手だったが、6ヶ月無敗の戦力が急に消えている事になる。

遠くにいる相手を確認するカードを使うのも手だが、後少して村に到着しそうではあるし、マナを使うのも危険だ。

ターパンに使ってしまったので、使えるマナは残り4。

勇丸が対処に困る相手だと、4マナ位は無いと心もとない。

だから、今俺に出来るのは、必死にターパンの背にしがみ付き、少しでも移動速度を上げることだけ。

（待つてろよ勇丸！　すぐ向かうからな！）

例え現実が勇丸の死を肯定していたとしても、それを心が理解してくれるのは別だと思いながら…………。

駆け出す蹄の音は、それから1時間ほど続いた。

日もとうと暮れた、星々と月が大地照らす時間帯。

急いで勇丸のいる場所に向かおうと村へ来てみれば、そこには老人や女子供しかおらず、そんな彼女らは皆、社の前で、懸命に何かに祈っている。

これが俺の知らない夜の信仰儀式とかだったなら、どんなに良かったことか。

近づく俺にそのうちの1人の女性が反応し、泣きすぎる様に祈りの内容をぶつけて来た。

曰く『諏訪子様と男達全員が異国の神、それ率いる軍と戦っている』『自分達は、戦に向かった諏訪子様達の無事を祈っているのだ』と。

戦？ 異国の神？ 諏訪子さんが出陣？

色々な疑問が沸き上がるが、1つの出来事を思い出し、俺の思考は一直線にまとまった。

（諏訪………大戦！！）

東方プロジェクトの出来事で、大和の神である八坂神奈子がこの洩矢の国へ攻め入る戦争。

この大戦の後、八坂と洩矢は互いに共存の道を歩み、幻想郷へ辿り着く。

辿り着くまでの経歴は詳細には知らないが、幻想郷にいる時の——作品中で出てくる彼女達は、少しの寂しさは窺えるものの、それなりに面白そうな事件を起こしたり、色々やって楽しんでいた。

最後がハッピーなら良いじゃないと思うだろうが………その過程では、死にはせずとも、多くの血が流れているのかもしれない。

普段の俺ならば、そんなもの、と、興味もなく切り捨てる出来事。

けれど巻き込まれるのは、俺が接し、笑いあい、とても良くしてくれた人達なのだ。

とてもではないが、納得出来ない。

……… どうして忘れていたのだ。楽しかったから？ 話すのが怖かったから？ 言うタイミングを掴めなかったから？

どこぞの漫画やアニメの主人公なら明確な答えでも出せるのだろうが、その答えには、俺にはとても辿り着けそうにない。

—— 上げて上げるとするのなら、ただ。

ただ、本当に忘れていたのだ。

素晴らしい人達、不自由ながらも満足感のある生活、そして優しい神様。

どれをとっても素敵なことばかりで、自分がPCゲームの中にいるなんて、一瞬たりとも自覚することなど無かったのだ。

自分の愚かさに、怒りで我を忘れそうになるが、今やりたい事は決まった。

『助けて下さい』『お救い下さい』と懇願する人々の願いを背に、諏訪子さんが向かっていった方面へとターパンを駆る。

向かうその先。

幾筋ものか細い煙が立ち昇っているのが、遠目であるにも関わらず、よく分かってしまっていた。

「……………」

言葉が出ない。

星の光が降り注ぎ、夜だというのに本すら読めそうで。

小高い丘の上から見下ろす平原には大勢の人がいて、手には各々武器を持っている。

そいつらが見つめる先。

かつて激戦が行われたであろうその場所には、巨大な白蛇や人が大勢倒れ転がっている。

所々に防衛を行ったような櫓やぐらの後が見てるが、そのどれもが破壊され、崩れていた。

その周囲。

そこには言葉にならない呻き声を上げる者。大切な人だと思われる者の名を呟く者。

腕が足がと体の欠損を訴える者に、もはや呼吸をするのがやっとだろうと思われる者。

布団をくれた奴がいた。道を教えてくれた奴がいた。狩のやり方を教えてくれたり、恋愛相談をしてきた奴もいた。

……そんな奴らが、一人残らずこの地獄絵図を彩る絵の具になっってしまったかのような。

諏訪大戦。

どうにも俺は勘違いをしていたようだ。

八坂の神と洩矢の神の一騎打ちで、熱血よろしく八坂が洩矢を負かした後は手と手を取り合い互いに国をよくしていくのだらうと、

心のどこかで思っていた。

けれど目の前にあるこの光景は何だ。思い描いていた幻想とは、あまりに遠い。

勝てば官軍。

なるほど。そんな言葉を俺の目の前にいる奴らは実行したのか。

神だ何だと言いながら、本人はいざ知らず、周りの連中なんて結局そんなもののなか。

美談で固め、信仰の対象をより強固にする。

理解出来るし、事情も分かるが、納得できるものではない。

そんな漠然とした思考の中。

その軍隊の中央に、俺の記憶と外見が一致する人物がいた。

『八坂神奈子』

乾を創造する能力。

鉄の武器で挑んだ洩矢の国に対して、その武器に蔓を巻きつけ酸化させ無効化したという、主に天候を象徴する神。

まるで太陽を象徴するかのような円形に形とられた注連縄を背負い、辺りに巨木ほどあろうかという何本かの石柱を浮かせている。

けれどそんなものはどうでもいい。

今問題なのは、その八坂神の足元。

無事なところが見つけれないほどに傷つき、片足の角度はおかしな方向へ曲がり、自らが作り出したであろう血の海に沈みピクリとも動かない、洩矢諏訪子がそこにはいた。

「手間をかけさせたな、洩矢の神よ」

諏訪子に向かってなにか言っているようだが、関係ない。

無意識のうちに、乗っていたターパンを還す。

俺の脚は何かに盗り憑かれたように、ふらふらと諏訪子の元へと歩を進めた。

「鉄の武具、確かに脅威であった。しかしそんなものは私の前では屑だというのがよく分かっただろう」

駆け出すでもなく、1歩1歩ゆっくりと。

「見事に戦ったと褒めてやる。安心しろ、国の方は繁栄を約束しよう」

まだ、まだ生きている筈だ。

見える範囲でなら、人影は皆生きている。

だから、諏訪子も、まだ……。

「これで終わりだ洩矢諏訪子の神。お前の為にと先に逝った狗神に謝罪でもしてくるといい」

石柱の1本。

「あ………」

槍の様に細いそれは、血溜まりに沈む諏訪子の胸を貫いた。

少し走れば手が届く。

そんな距離で、神の鉄槌は無慈悲に下された。

広い平原。

1人でこちらに向かってくる者の洩らしたような一言に、周りの者はやっとその者の存在に気がついたようだった。

八坂とて例外ではない。

領土拡大達成の思いにふける中やってきた、1人の男。

人間にしては背の高いそれと、身に着けた外套はミシヤクジの皮で作られているのだとすぐに判断し、この神に仕えていた神職か何かだろうと思い、声をかける。

「主らの神は私が倒した。以後、この国は私のものとなる。民の命や財産は保障する。私を奉れ。国の繁栄を約束しよう」

男はそんな声など聞こえない。目の前の光景が信じられないとばかりに目を見開き、けれど歩みを止めず、倒れた神の前まで行き、手を伸ばす。

『あ………あ………』と言葉にならない声を上げる男に、八坂は訝しげな顔を向けた。

「八坂様、この者は心が壊れております。対話は難しいかと」

八坂の後ろ、人間の代表のような男がそう進言する。

言われ、それもそうだと考え直した。

神職が崇拝していた対象を目前で倒されたのだ。

こうなっても仕方ないのだろう。

「致し方ない。洩矢の神をその男に渡せ。我らがするより、その方が良かるう」

貫いていた柱を消す。

男は血溜まりに沈んだ神をそつと抱き上げ、顔を埋めた。

声を押し殺して泣いてでもいるのだろう。

他人事のように、客観的に八坂は判断し、自軍の状態を見る。

強大であつた軍勢が、4割程も減つていた。

それに、私の力も大分減少している。。

洩矢の民が手にした武具の威力は絶大で、こちらの攻撃や防御をものともせず向かってきた。

これはまずいと瞬時にその武具の特性を見抜き、風化させたはいものの、彼らはまるで意に返さず立ち向かってくる。

その先頭に立つ、巨大な白蛇と賢狼を引き連れた洩矢諏訪子の神。

こちらも八咫鳥などで対抗し勝ちを収めたは良いが、被害は甚大であった。

既に負傷した者は後方に下がらせ休養をとらせている。

復帰出来ぬ者が1割、残りの者はゆっくり養生させ神気で助力してやれば、元気になるだろう。

ため息が出る。

これでは再編には時間がかかるなと思い――

その場から一瞬で飛びのいた。

原作通りの変な神様だった。

偉いわりには小さくて。意地悪で、女の子で。

笑うたびにケロケロと、蛙を連想させるのは女性としてどうかとも思った。

時に叱られ、時に愚痴を聞き、時に笑いあい、過ごしてきた。

けれど、そんな彼女は今はとても冷たい。

触れた事など一度もなかったが、羽のように軽いその体は、今にも消えてしまふんじゃないかと錯覚させる。

(……………なぜだ。なぜ、こんなことに)

様々な“もし”が頭を駆け巡り、そのどれもが現実を前に否定されてしまう。

本当に——なぜ、こんなことになったのだろう。

前で、声がする。

纏う神気でそれが八坂神奈子だと思い出した。

(……………そうか。こいつ等に殺されたんだった)

思い出したように、頭の中でその事実が掘り起こされる。

憎いとか、怒っているとか、それらの感情が一気に沸点に達し、限界を超える。

ただただこの怨みを晴らすべく、抱えた諏訪子をゆっくりと地面に寝かせながら、考えられうる最高のカードを具現化させる。

(召喚、『ブラッドペット』『鬼火』『泥ネズミ』)

姿を見せるのは、その3体のクリーチャー。

いずれもコスト1で、パワーもタフネスも1以下の黒のクリーチャー。今この場で出しても俺の怨みを晴らすべき能力もないし、力もない。

けれど、黒のクリーチャーが3体ここに出ている事が重要なのだ。
八坂はこれらのクリーチャーが突如出現したことに警戒して、一
気に距離をかなり空ける。

まるで様子を窺うかのようにかのようにこちらから視線を逸らさ
ない。

(ああ、もう、どうでもいいか……………)

相手がこっちを見てるとか、見てないとか。

ようは相手を倒せばいいのだ。

オマケにマナのストックが、後1しか存在しない。

もう、向こう数時間は回復しないだろう。

ならばもう、やることは1つ。

さらに追加で1体。

思い描くは、またも黒のクリーチャー。

けれどそいつはマナコストが高く、今の俺では到底召喚出来るよ

うなものではない。

——だが、その縛られたルールを覆るのがカードゲームであり、MTG。

『ピッチスぺル』というものがある。

代替コストと呼ばれる、マナ以外のコストのみで唱えることができる呪文の俗称のことだ。

そして、出そうとしているクリーチャーが要求するコストは、『黒のクリーチャー3体の生贄』。

呼び出そうとしているそのカードは、攻守共に優れた6/6の性能を誇る、強力なもの。

維持出来るのならば、それは充分脅威となる。

しかし足りない。まだ、足りない。

相手は神。

諏訪子達と戦い減ったとはいえ、軍門は数多く、幾千の人間と力のある神々がその下に名を連ねている。

——足りない。足りない。この怨みを晴らすには、まだ足りない

い。

ならば、足るようにしてやればいい。

3体の生贄と……俺自身の体を糧に。

ライフの支払い——細胞の減少だと思っていたが、本当の意味を確かめる時が来たようだ。

（対象は、俺の左半身）

死ぬかもしれないし、仮に生きていたとしても、とても生き難い体になるのは確実。

……だからどうした。

それがなんだ。

今、この瞬間。

この思いこそが、俺の全て。

「来い——」

どこからともなく、俺の周囲が闇に染まる。

そこから伸びる、2本の腕。

人の胴体ほどあろうかという太さのそれは、片手で生贄とした3体のクリーチャーを串で肉でも刺すかのようにまとめて貫き、闇の中へ引きずり込む。

そしてもう片方の腕は俺の左手を掴み——引きちぎった。

視界が白熱する。

一瞬で瀕死に追い込まれるが、それでもこの思いは曲がらない。

止め処なく溢れる赤を羽織っていた外套で押さえつけながら、この状態でも冷静でいられる頭にミシャクジの加護でもあるのかと逡巡。

横たえた諏訪子に血が掛からぬよう、体を傾けた。

黒のクリーチャー3体と、自身のライフを6点。

6点というのがどう作用するのか不明だったのだが、それは左腕1本分らしく、ものの見事に俺の体は一部が欠けた状態になってし

まった。

自身のライフを大量に失うことはこういうことなのかと、痛みによる激痛に抗いながら、内心で苦笑する。。

ライフの支払い——それは、自身の体の一部を代価にすること。
手でも足でも、血でも肉でも。

初めて使った時は、捧げるものの指定を行わなかった。

恐らくその状態でライフを支払うと、体全体から生きるのに可能な限り支障の無いよう、均等に何かが失われていくのだろう。

……そうして。

代替コストを全て払い終えたのを確認し、心で、言葉で、奴の名を叫んだ。

「——来い！ 『死の門の悪魔』 ああああ！——」

第07話 異国の妖怪と大和の神

悪魔と呼ばれるものが居るのならば、それは恐らくコイツのことを言うのだろう。

背中に生えた羽は蝙蝠のようで、身の丈は俺の3倍を越えようか。

まるで人間を数倍大きくし、虫の羽をつけたような格好のそいつは、血色の眼を幾つも持ち、開く口はまるで昆虫をさらに醜悪にしたかのような、おぞましい顔をしていた。

だが、今の俺にはその醜悪さすらも充実感に変わる。

パワー&タフネス、共に9。

今まで召喚してきたクリーチャーの中では、もはや規格外と言っても良い数値。

実験の結果で、カード表記されている攻撃防御数値が1上がる毎に、戦闘能力は2倍にも3倍にも跳ね上がっていた。

では、この9という数値はどこまで神を相手に打ち合えるのだろうか。

——いや、どれくらいまで、敵を殺せるのだろうか。

暗い感情が心を満たし、それを燃料に感情が煮え立つ。

俺の大事な人達を傷つけたばかりか、勇丸を………何より諏訪子を殺してくれたのだ。

左腕のもがれた痛みと出血による意識の希薄化と抗いながら、一言。

もはや口上は無い。

頭の中には怨みつらみがぐるぐると渦巻き、考えられうる限りの罵詈雑言が思考を埋め尽くすが、出てきた言葉は単純明快。

「——殺す」

俺の怨みの代弁者は、今まで聞いたことも無いような咆哮をあげた。

「……………皆の者、下がれ。奴は私が相手をする」

神々や民達を下がらせる。

妖怪を使役している人間など聞いたことも見たこともなく、ましてその妖怪の頭に大の字がつけば、立場は違えど最低でも下層の神程の力は持っているだろう。

それが、私の目の前にいる。

虫の頭に人の体。

神職の男は死の門の悪魔と言っていた。

（悪魔……………か）

私も初めて見る。海の方この妖怪をそういう名で呼ぶのだったか。

見るもおどましく異郷な者なれど、その身に宿す力は本物。

辺りの靈魂を、体の全てを使って取り込んでいるのが見て取れる。

（魂喰の類か。……………死の門とは、また安直な）

自身の周囲に特殊な神気を練りこんだ石柱——オンバシラを展開する。

洩矢の国で作られた鉄より強度は低いが、鉄より重く、神気を通すことで手足のように扱う事が出来る。

これに対処出来ずに、大妖怪と呼ばれる奴らや、下級の神などは敗れていった。

そうして何本ものオンバシラが宙に浮く中、

「――殺す」

下手な神や妖怪より殺気の籠った言霊が聞こえてきた。

なるほど、洩矢の神は祟り神の統率者だったと知っていたが、言い換えれば怨みの力だと思い直す。

その神職であるものがその力を宿していても不思議ではなからう。

……… 悪魔とやらが咆哮を上げる。

見た目通りの畏怖を周囲に与えながら、魂すら奪われそうな声は、まさに絶望ともとれる光景に、思わず口の端がつり上がる。

他のものから見れば、それは死以外の何者でもないだろう。

だが私は神。

……… 絶望？ 笑わせるな。

人や妖怪ならいざ知らず、奇跡の1つや2つ起こせずして、伊達にその名を語ってはいない。

「我が名は八坂 神奈子の神。覚えておけ。お前を屈服させる者の名だ」

展開していたオンバシラのうち4本を射出。

身の毛もよだつような風きり音を撒き散らしながら、寸分違わず悪魔へと殺到していく。

だが、木々を裂き大岩をも砕くその攻撃も、1本はかわされ、1本はいなされ、1本は腹部へ当たったものの怯んだ様子もなく、最後の1本は殴り付けられたことによって粉微塵に破壊された。

「はっ！」

呆れるように、小馬鹿にしたように鼻で笑う。

ここまで効果がないと、逆に相手を褒めてやりたくなる。

この攻撃で幾人もの神や人を傘下に加えてきたというのに。

（面白い……………）

こやつ相手ならば、力加減など気にしなくても良さそうだ。

過去、全力で戦闘を行ったのは、1度か2度。

その際には地形が変わってしまい、復興までに中々の時間を要していたので控えていたのだが、構うものか。

「どこまで耐えられるのか、楽しみだ」

余力を残しつつ、けれど能力を最大まで使い対処するとうよう。

20本以上展開していたオンバシラを全て撃ち出す。

足止め位にしかないだろうが、それで充分だ。

体中に神気を行き渡らせる。

途端、空が泣き出しそうになった。

澄み渡る月夜だったにも関わらず、今はもう曇天で覆われており、視界も悪化し、時折空を走る雷のみが大地を照らすようになった。

どちらも闇に隠れるようになるが、片や体が神気によって青白く発光し、片や撃ちだされたオンバシラを碎きながら、血を凝縮した

ような輝きを持つ複数の眼がその存在を主張している。

私は神。

神とは何かの象徴として具現化している。

自分の場合は——天。

天候や風そのものと言い換えてもいい。

干ばつには雨を、日照りには曇天を、嵐には快晴を。

敵対者には——神の鉄槌を。

「天からの贈り物だ。色々あるぞ？　くれてやろう」

悪魔の頭上に出現するのは、雷。

人間の頭ほどある大きさの雷が、無数の雨となって降り注ぐ。

オンバシラを全て迎撃し終えた、悪魔に殺到するそれは、まるで天が地上へ落ちてくるかのような光景を彷彿とさせた。

しかし、それでは役不足。

オンバシラの直撃ですら耐え切る強度を持つあの悪魔は、体に揺らぎをみせるものの、羽を傘のように使い、まるでただの雨を凌ぐかのように防いでいる。

神職の男が、自分への被害が及ばぬよう、悪魔を壁のように見立てて配置したせいだろう。

地形を変えるほどの雹の雨を、何のこともなく耐えている。

耐久性は今までに出会った者の中でも最高峰なのではないかと判断しながら、片手を前に突き出した。

（丈夫な体だ）

その事にあまり効果の見られない様子を気にしする事もなく、私は次の攻撃を仕掛けた。

突き出した拳を握りこむ。

たったそれだけの動作だけで、周囲の風が一気に悪魔を囲むように渦巻いた。

風が土砂を巻き込み土色の壁となって相手を拒む。

(もっと……もっとだ)

こんな風では奴は消えない。

強く、強く、強く。

唸りを上げる風の渦は徐々にその力を増し、寸暇のうちに自然界ではありえない風力を持つ暴力となった。

地面の大岩すら持ち上げ、触れる者を切り裂き、バラバラに砕き散る渦となつたそれを収縮させる。

握りこんだ手をさらに握りこみ、渦の中心となっている安全圏を狭めてやった。

図体はでかいのだ。少しばかり範囲を絞ってやればいい。

[

 ■

 ■

 ■

 ■

 ■

 ■

 ■

 ■

 ■

 ■

 —

 !

 !

]

そうする事で、やっと悪魔に被害を与えられるようになったのだらう。

暴風によってあまり聞き届けられないが、渦の中心で奴の叫び声が始めた。

（小枝が岩にめり込む程の風速は、流石の悪魔とやらにも効果はあるようだな）

しかも、一抱えもある電を巻き込んでの台風。

その破壊力はほぼ全ての神や妖怪も屈服させてきた。

だが――

「ほう、まだ刃向かうことが出来るのか」

そんな地獄の中、奴は男を守る体制を緩めることはなかった。

その躯体には多少の傷を作ってはいるものの、その眼は今にもこちらを殺さんと輝かせている。

ならば追加だ。

「降り注げ、天よりの雷」

耳をつんざく雷鳴。

暗闇の世界の中、閃光が走る。

寸分変わらず悪魔の脳天に落ち、体中を沸騰させる電撃。

それが、無数に飛来し、蹂躪する。

風によって巻き込まれた電の間で帯電し、さらなる電力を伴って襲い掛かっている。

——暴風で切り刻み、電ですり潰し、雷で蒸発させる。

天災三重苦。

山ですら、これの前には平地と化す。

(……………くっ、やはりこれの維持は堪えるな)

幾ら神とはいえ、そう易々と天候を変化させられない。

なればこそ、この三重苦を行っている内に仕留めておく。

洩矢の国と戦ってなお余力はまだあるが、今後を考えれば温存しておかねばならない。

一国を支配下に置くには神気は幾らあっても困ることはないのだから。

……丁度1分。

もはや叫び声すら聞こえなくなった状況で、私は能力を解除した。舞い上がっていた瓦礫や電、土砂が落ちてくる。

まるで巨大な手で掬い取った様な窪地が出来ていた。

——隕石が落ちたかのようなその中心。

腕で顔を隠し、羽で体を覆い、自身を庇うよう死の門の悪魔を配置しながら、その足元に男はいた。

全身を見ても傷ついていない場所がない。

もはや立っている事も間々ならないようで、地面へと前のめりに倒れている。

けれど顔だけはこちらへと向けて、視線を逸らすことはない。

例え悪魔が無事だとしても、召喚した本人はそこ等の人間と変わらないのだ。

それが今こうして悪魔に守られていたとはいえ無事なのは、奇跡以外の何ものでもないだろう。

しかし。

ギリツ、と。

そう、思わず奥歯をかみ締める。

（凌がれた……………）

今まで何人も抗うことが出来なかった天災の三重苦を耐え切った。

天変地異といってもおかしくない光景を眼にしながら、男のその瞳には、強い恨みが色濃く残っている。

（洩矢の神は良い神職を従えていたようだな）

もし自分に仕えていてくれたのであれば、と思う。

しかし、その思いも一瞬で流す。

もはや覆ることのない事実を思い出したかのように——これから反撃だとはかりに、悪魔はこちらへと襲い掛かってきた。

神気を大量に使った反動で、いま少しばかり充填に時間を要する。

あの天災の中で男を守っていた結果、体はもちろん羽もボロボロだが、それでも飛行には問題ないようで、こちらとの距離を詰めてきた。

あっという間。

馬ですら全力で駆けても5秒は掛かるつかという距離を、コイツは2秒を切る勢いで到達した。

（間に合わんか！）

悪魔がとうとう私の前まで辿り着く。

屈強以外の何ものでもないその腕は、全てを圧殺する勢いで振り下ろされた。

天候を使った神気での迎撃が間に合わないと判断。

オンバシラの何本かを具現化し、避けながら、振り下ろしてきた拳に合わせる。

破碎音。

束ねたオンバシラが、悪魔の拳と激突し、全て碎かれる。

そのお陰で威力は大分削がれたものの、何とかかわしたその腕は、大地を抉り、それだけでは足りずに地面に亀裂を生んだ。

叩きつけられた拳から逃れるように土砂が四散する。

巨大な物体が落ちてきたかのような重い音を響かせて、奴の攻撃は一瞬止まった。

笑ってしまうくらいの豪腕。

こんなものを真正面から馬鹿正直に相手をしてはならない。

撒き散らされた土煙に紛れる様に悪魔から距離をとる。

そうすれば対処も容易いのだろうが、問題はそこではない。

——神が、化け物相手に退いた。

僅かの間だったとしても、それは屈辱以外の何ものでもない。

舞い上がった土埃のせいで民や配下の神々からは見えてないが、この事実是我の中で揺るぎのないものとなった。

もはや、掛ける慈悲はなくなった。

余力など考慮せず、一気に消し飛ばしてしまおう。

そう考えた矢先、

「がはっ」

悪魔の後ろ、私の前。

神職の男は、口から大量に血を吐き出していた。

生きている事さえ不思議なのだ。

むしろ、それくらいですんでいるのだから重畳と言えるだろう。

けれど、男自身が限界を迎えようとしているのと同調しているかのように――

その存在が維持できないとかばかりに死の門の悪魔は霞のように闇に溶け消えていった。

立ち上った煙が消えるように、何の後腐れもなく。

初めから存在していなかったかのように、夜の闇へと還っていった

「……………何だそれは」

苛立ちから、語彙が荒くなる。

今までの出来事は何だったのだ。

過去私を後退させた者など上位の神々ですら数えるほどしかおらず、ましてやそれがただの人間になど、生を受けて初めてのこと。

なればこそ真っ向から挑もうと、純粋な力では叶わぬのなら、神気でそれを補い正面から屈服させてやろうと思った直前、その相手

は私の前から消え去った。

そんな存在を召喚した男は、むせる様に咳をし、時折口から血を吐き出す。

虫の息とはこのことか。

つい先程まで戦い、負かした洩矢の国の者達と同様の状態になつてしまった。

自分の表情が表情が険しくなるのが分かる。

人として良くやつたと褒めてやるのが普段の私の筈なのに、今回は何故か怒りしか込み上げて来ない。

人間の身にあるまじき力を誇示したせいか、それとも洩矢の神ですら出来なかつた私をかすり傷とはいえ傷つけたという行為に対するの思案からか。

—— 兎に角、この沸き立つ怒りをぶつけねば気がすまない。

まだ息はあるようだ。

辛辣な言葉を浴びせたいのか、その命の最後をこの手で散らしたいのか。

湧き上がるものに突き動かされ、私はただ怒りのままに、その男の元へと向かった。

（ああ……………もう、視界が完全にぼやけてやがる……………）

視界も埋まり、曇天の世界がモザイクへと変わってどれくらいの時間が経っただろうか。

左手を取られたことによる出血で、段々と体力は奪われ、意識すらも霞んできている。

庇うように守っていた諏訪子は…… 諏訪子の体は、まだ俺の前にあるだろうか。

（…………… 全く、幾ら強大な存在を使役出来たとしても、自分が殺されたら終わりっていう弱点があるのなら、対処は簡単じゃないか）

現に八坂は雷を降らせて死の門の悪魔を防御に使わせるしかない状況を作り出し、台風をこちらの周りに展開し自由を奪い、止めとばかりに雷を無数に放ってきた。

雷は何とか防げたのだが、続く風の攻撃で呼吸が困難になり、最後の電撃で体中で無事なところの発見が難しい位に感電し、肉体を壊された。

——— そうして、限界が訪れた。

幾ら強力な存在を召喚出来たとしても、維持できなければ効果を発揮し続けてくれない。

天災の終わった直後、何とか顔だけを八坂が居た方へと向け、奴を殺せと悪魔に命令する。

刹那の如く移動し、大地が破裂するような一撃を与えた事を音で判断した俺は、もはや堪えるだけの力もなく、死の門の悪魔の供給を終わらせるよりなかった。

マナコスト9。

その維持は、常にほぼ全力で走っているかのような疲労具合だったのだから。

（もしこれで殺せなかったら……………）

自分が死ぬのは確定だとして、無念のままに潰えるのはイヤだった。

例え何度も人生リトライ出来るとしても、この思いだけはリセットできよう筈もない。

幸いにも耳……………いや、片耳だけはまだ聴力が生きているようだが、それでも体は、もはや痛みすら感じられず、消えそうになる意識を意思の力でキープしている状態。

このまま何も聞こえなかったのなら八坂を倒せたと判断し、満足のままに再スタートするとして、

「……何だそれは」

倒せなかったら、俺はどんな思いで第3の人生を歩めば良いんだろつ。

聞こえた声は、間違いなく風神。

しかも大したダメージを負っていない様な口調ではないか。

——イヤだ、イヤだ。このまま何の思いも遂げずに死ぬなんて。

大切なものも守れない。己の意思すら貫き通せない。

そんな状態で死ぬなんて——絶対に嫌だ。

だから——

（近づいて来い）

八坂の呟いた声には怒気が含まれていた。

恐らくただの人間の俺が抗ったのが許せないのだろう。

こちらは瀕死。あちらは壮健。

こんな状況、まさに強者が弱者を蹴るのにおあつらえ向きじゃないか。

——獲物を前に舌なめずり、大いに結構。

その油断を、その慢心を。その、思考力の低下した状態でこちらに来てくれ。

そうすれば……否。そうでもなければ、お前を倒せないから。

1歩1歩、こちらに近づく足音が聞こえる。

まだだ。まだまだだ。

もう少し。あと少し。

徐々に近づく気配に願いを込めながら。

俺の側まで寄って来い。

その時は俺の命を差し出そう。

だから、だからその時は。

「——お前は何者だ、洩矢の眷属よ」

来た。

残り1マナ。

最後のカードを思い浮かべる。

呪文系では効果が怪しい。

現状でも対象を破壊するカードは山ほどあるが、それが神相手にどこまで通用してくれるのかは検証したことがない。

ならば、純粋な力による撃破が望ましい。

よって、先程と同じように、クリーチャーを思い描く。

通常の状態では効果の薄い、でも、こんな状態の今だからこそ最大限の効果を発揮する、あれを。

……八坂、俺の命を差し出そう。

それ位ないと、今の俺には手が届かない。

——だから。だから代わりに。

お前の命をくれ。

「死、
……
ツね、え
……
！」

第08話 満身創痍

コストの代償と、能力の性能はほぼ比例する。

つぎ込めばつぎ込んだ分だけ効果を発揮してくれるMTGのカード達には、当然ならそれ以外の——代価と結果がアンバランスなカードも存在していた。

その代表が、黒。

ライフを、手札を、クリーチャーを、山札を、行動ターンを。

差し出せるものがあるのなら、黒のカードはそれらを覆す。

先程の『死の門の悪魔』は9マナという膨大なコストの対価として、数体の黒クリーチャーと、自身のライフを捧げた。

——今から呼び出すものは、やはり黒のクリーチャー。けれど、コストはたった1。

しかしそれは捧げるものが無くとも、現状では圧倒的な制圧力を持っている。

コスト1にして、13/13というMTGの中でも比類無き最高の『マナレシオ』を誇っていた。

『マナレシオ』

パワーとタフネスの平均を点数で見たマナ・コストで割った値。クリーチャーの強さを評価する際に使われる指標の一つで、基本的には値が高いほど良い。ただし、当然ながらこの値が高ければ必ずしも優秀というわけではなく、あくまでも目安の一つである。

けれど、そいつは当然ながらデメリットを持っている。

自分の体力が多ければ多いほど、そいつの力は減少する。

つまりは、俺が瀕死であればあるほどに力を増すのだ。

そのデメリットを、今の俺は相殺している。

風前の灯である自分を頼もしく思うのは、そうそうある事ではないだろう。

俺のライフの総量が幾つあるのかは分からないが、ここまでくそつたれな死体一歩手前状態なのだ。

これで先の悪魔より弱かった日には、目も当てられない。

そんなクリーチャーの名は『死の影』

俺の死が濃ければ濃いほどに、この影は強く、巨大になるようだ。

簡潔にして名は体を表すを体言するソイツは、俺の影からぼりと湧き出てきた。

全身風のように黒く覆われていて、体の中央には赤いコアのような球体が見て取れる。

それに彩を添えるかのように、骨だと思われる肋骨が何本か、コアの周りに存在していた。

まるでクワガタのような真っ白い牙を二重三重にも供えている死の影は、一瞬にしてその体を巨大化させる。

死の門の悪魔よりもさらに膨れ上がったその体は、輪郭が霞むように周囲の闇に溶けながら、空ろな風貌を完成させた。

「なっ……………!？」

八坂の驚く声と、その場から退避しようとする気配が窺える。

だが遅い。

瞬時に死の影はその巨大な手で、まるでそこにある闇が硬さを持つかのように周りを取り囲むように捕縛し、八坂の体を捕まえた。

体が地上から持ち上がる。

もはやそれは握りつぶさんとするほどの力であり、到底抗えるものではない。

しかし、流石は上位の神というところか。

神気を使い、拘束を解こうと対抗してきた。

両の手で全力を込めるよう命令するが、八坂はそれを弾き返さんと神気をまとう。

ここで逃せば、俺はもう八坂に何も出来なくなる。

コスト1のために維持する力は微々たるものだが、元の力がゼロに限りなく近いのだ。

後数分、いやもっと短いかもしれない。

それだけ経てば、俺の意識は——命は失われる。

このままでは握り潰せない………ならば。

ばくん。

私の頭上から、冥土への門が開く音が聞こえた。

油断。

その一言に尽きる。

もはや相手に抗う力など残っていないと思い近づいた結果がこれだ。

押し潰さんと籠められる力に、自身が持てる力の全てを当てる。

ここまで接近されては能力も使用困難になり、例え使えたとしても、使おうと他所に気を回した瞬間に圧殺されるだろう。

故に、今私は全力で神気を放出し、魔の手から逃れられるようにすることだけ。

幸いにも余力はまだ残っている。

そして召喚者の男は瀕死。このままなら、こちらが耐え切れれば決着が付く筈だ。

先の見えた勝負に、思わず口元から笑みがこぼれる。

——いや、こぼれ様とした所で、頭の上から、何かが開く振動が感じられ、思わず空を仰ぐ。

黒。

それが私が見た色。

私を握っているこの影人間は、その昆虫のような二重三重にもなっている巨大な牙を持った口を開放したのだ。

口内には無数の白く鋭い乱杭歯。

(……………ああ、私を喰おうというのか)

ゆつくりと、黒い口が迫ってくる。

拘束を解くことも、ここから逃れる術も今は無い。

(——まさかこうも早く終わりが来るとはな)

達観した感想を洩らし、次に来るであろう事態を考え、口をあけて近づく影人間を不敵に笑いながら睨む。

誰が目など背けるものか。誰が絶望などするものか。

その瞬間の来る時まで、睨んで、睨んで……………。

一向に来ないその時に、一瞬思考が停止した。

(止まつ…………た…………？)

疑問が駆け巡る。

大きく開いたその口は、今にも噛み千切ろうとする風貌のままに固定され、僅かにも動く気配がない。

まるで時が止まってしまったような光景に、内心首をかしげる。

瞬きを一度。そして浅い呼吸を何度か行い、今ならば大丈夫かと思ひ深呼吸をしようとした矢先——こちらを喰い殺さんとしていた影人間は、その口を閉じ、ゆっくりと私を地上に降ろした。

今までとは正反対の、壊れ物でも扱つかのような振る舞いで開放され、またも考えが止まる。

そして、その事を問いただす間もなく、影人間は消えていった。

一風。

曇天の空も晴れ渡り、夜空には星の照明が輝き大地を照らす。

影から生まれし者は影へと帰るのが自然だとも言いたいのか。

つい今まで生きるか死ぬかの決戦があったことなど夢のよう。

そこに残るのは私と、もはやピクリとも動かない洩矢の眷属。
そして、

「――八坂の神よ。…………私の願いを…………聞いてくれぬか」

体をオンバラシラで貫いた、洩矢諏訪子の神のみである。

（やった、やったぞ……………！ 捕まえた、捕まえたあ！！）

子供のように心の中ではしゃぐ。状況と相まって思考が狂人の域だが、こうでもしないと意識を保てない。

もう逃がさない。

絶対放さない。

この命、尽きようとも。

パワーやタフネスの数値なんて気にしている場合じゃないし、気にしてもいられない。

どんな値だろうと、もうやるしかないのだ。

やらなければ——この怨みは晴らせない。

死の影に握りつぶす様、指示を送る。

パキン、パキンと。ガラスが砕けるような音が聞こえるのは、八坂が何かバリア的なもので防いでいるせいだろうか。

青白い火花が散っているのがばやけた黒い視界からでも分かる。

拮抗。

ここまでしてこの程度なのか。

ここまでしないと対等にはなれないのか。

……… 圧殺がダメなら、他のやり方を。

手がダメなら足。

足がダメなら——口がある。その、見るからに凶悪な、クワガタの顎のようなモノが。

幸いにも八坂は死の影の手から逃れることで精一杯のようだ。

ならば、これはもう必勝の行動。

もぎたての果実に齧り付くかのように、その命を刈り取るう。

原作キャラが何だ。

女だから何だというのだ。

奴は——八坂神奈子は、俺の大切な者達を奪っていった。

だから奪う。

復讐なんて上等なもんじゃない。単なる八つ当たり。

けれど、やる。

今の俺にはそれが全てだから。それしかないから。

それすら出来なかったら……俺は、俺でいられなくなりそうだから。

（いけ、死の影）

地獄への門が開く。

し
洋画の地球外生命体を思わせるその光景に、俺は八坂の死を確信

「——つくも、やめて……」

俺の目の前。

血だまりにその身を沈め、石の柱に胸を貫かれていた、洩矢諏訪子が語りかけてきた。

「え……………」

生き……………ている……………？

同時、ピタリと死の影の行動が止まる。

俺の意思なのか影の意思なのか。

時が止まったかのような静止像が完成した。

「諏訪、子……………」

「九十九つたら……………とうとう敬称まで抜けちゃって……………」

「えっ…………あつ、す、すいません。じゃない、えっ、あれ？ 諏訪子、さん…………生きて…………？」

動揺しまくる俺に対して、囁く様に語りかける諏訪子さんの声はとても優しく、神様というよりは恋人か母親のようだった。

「ちゃんと生きてるさ。神に死って概念があるかは分からないけど、間違いなく、私は私のままで、今ここにいるよ」

そう言いながら、咳き込むように呼吸を始める。

器官にたまった異物を吐き出しているようだ。

体は冷たくなって心臓の鼓動も聞こえなくて、何より息をしてなかった筈なのに、こうして会話が成立している事態に、これは漫画でいう死ぬ間際の最後のセリフなのではないかと嫌な予感が頭を過ぎる。

「そんなボロボロになっちゃって……………20日は帰って来るなって言っただじゃない……………」

「俺のことはいいです……………ぐっ！……………はは、きつついなあ……………。諏訪子さん、死に際の……………捨て台詞とかじゃないですよね……………？」

「あまり話すな九十九。……………安心して。私は時間をかければ回復するから。問題はお前だよ。その傷——自分の体がどうなっているのか分かっているの？」

安心した。

なんで生きてるのとか、その手の疑問は置き去りにする。

だって、生きているのだ。

それ以外で、彼女に何を望めというのか。

「ははは……………もう、秒読みだって事は、何となく……………。1度、体験……………してますからね」

視界が黒で埋まる。

モザイクすら見えなくなった目には、何となく諏訪子さんの心配する瞳が向けられている気がした。

「そっか……………うん、大丈夫だよ。九十九は、私が助ける。だから、その八坂の神を放してあげて」

「……………何故ですか。コイツはみんなを、勇丸を——何より諏訪子さんに害をなしたんですよ。祟り神の頂点が、なんでそんなこと言っんですか」

親しい人に言われた受け入れられない言葉に、怒りから来る気力で滑舌が回るようになる。

何故。後一步なのだ。

もう1秒もしないうちに、俺は八坂に一矢報いることが出来るのに。

「九十九、ここで八坂を倒してしまつたら、洩矢の国は終わる。……いや、私の国だけじゃない。戦の主神となつた2人が消耗したことで、周りの妖怪や盗賊にしてみれば、この2国は格好の餌食だ」

「……………分かります。分かりますけど……………」

頭では分かっている。

今日本という国は盛大なバトルロワイヤルが行われていて、そのトップクラスの2国が激突し、疲弊しようとしている。

攻めるなり略奪するなり、どうにかしたいのなら、この時をおいて他にあるだろうか。

守り神の居なくなった神の国など、妖怪達から見ればご馳走だ。

俺はまだ見たことはないが、鬼や天狗といった日本固有の強力な魑魅魍魎が、美味しいケーキを切り分けるかのように国を分断させていくのだろう。

「ごめんね九十九。みんなを守れなくて」

諏訪子さんが謝っている。

別に何も悪いところなど無いというのに。

「ごめんね。帰る場所を失ってしまって」

まるで全ての非が自分にあるかのように、謝罪の言葉を紡ぐ。

それは俺への謝罪の意味もあり——自身の力が及ばなかった事への無念さを悔やむ声でもあった。

「——ごめんね、勇丸を守れなくて」

その言葉で確定してしまった。

自分の相棒の、死。

きつと何か特別なことが起きて、繋がりが感じられないだけなのだろうと思い込もうとした。

だけど、それも終わってしまった。

悲しみに涙がほろほろと頬を伝うのが分かる。

また召喚出来るのだからと言い聞かせ、何とか自制心を保つ。

これで記憶を失っていたのならどうなってしまっただろうかという不安を胸に押さえつけながら、ならせめて、と勇丸の最後を訊ねてみる。

「——勇丸は、どうでしたか」

言葉足らずな自分のセリフに、我ながら馬鹿だと思ったが、諏訪子さんは俺の聞いたかったことを理解してくれたようで、ぽつぽつと、けれど簡潔に、その光景を話した。

「雄々しく戦ってくれた。次々と相手の人間達を蹴散らして、最後は、2体目の八咫鳥と、相打ちに」

八咫鳥………神の使いとされ、太陽の化身なんてご大層な役職に就いていた奴だったか。

仮にも太陽の象徴の一端を担っていたのだ。

実際の戦闘は見ていないが、とてもじゃないけどただの2/2である勇丸が対処出来るとは思えない。

おまけに相手は鳥。空を飛ぶ相手に、地上を這うことしか出来ない生き物がどう対抗するのだろう。

けれど、2体。

きつと、あらゆる限りの知略を尽くして屠っていったのだ。

良くやったと褒めてやりこそすれ、何故逝ってしまったのだと嘆

くのは、全て終わってしまった今となっては虚しい限りではないのか。

分かってはいる。分かってはいるのだ。

しかし、頭で理解しても、心がそれを受け入れてくれない。

辛い、悲しい、憎い。

心が押し潰されそうの中。

ふと、では諏訪子さんはどうなのだと考えた。

………苦しいのは俺だけではない。

むしろ俺以上に感情をうねらせているのは、このボロボロの小さな神様な筈なのだ。

幾年もかけて築き上げてきたものが崩れていくその光景の前に、蹂躪されていくそれを見続けるしかなかった無力な神様。

正直、そんな考えなどクソ食らえだと思っていた。

他の人も辛いのだから我慢しなさいなど、他の場面ではいざ知らず、恨みを晴らすだけのこの場においては、火に油の言葉でしかない。

——諏訪子さんに話しかけられる前までは。

周りを、他人を、全てのものを怨み、けれど何より無力であった自分を最も責めるかのような謝罪に、隠し切れない恨みと後悔と、それらを覆い隠すほどの悲哀が混ざっているのが理解出来た。

それを押し殺し、この国を奪おうとする者を倒さないでくれとは、一体どれほどの葛藤と決断力がいるのだろう。

「……………良いんですね、本当に」

「構わないよ。もう、決着はついた」

言葉の裏に様々な感情が煤けて見えるが、それが諏訪子さんの決断だというなら、その気持ち痛いほど分かる今の俺は、従うしかない。

俺がもし最後の一步を踏み出してしまったのなら、もうこの小さな神様に救いは訪れないのだから。

死の影に、掴んでいた——いや、飲み込まんとする勢いで広げていた口を閉じさせ、八坂を地面に下ろす。

生憎と顔が見えないが、きっと驚いているはずだ。

「はは、は……………参ったなあ……………」

——これじゃあ、本当に無駄死にじゃないか——

言葉に出さず飲み込んだ。

閉じられた目の隙間から、ポロポロと大粒の涙が零れる。

鼻水も出てきて嗚咽も止まらないこの姿は、情け無いを通り越し、哀れの類だろう。

全く、原作様々だ。

確かにこの流れなら、俺の知っている東方プロジェクトのキャラ像に向かっていく事が予想できる。

屈服した諏訪子さんが負けた事にもめげず大和の国の為にと尽力して、それを八坂が評価し二人は仲良くなっていくのだろう。

本当に……………これでは道化もいいところだ。

一人で空回りをして、勇丸を死なせて、自分まで瀕死になって。

……………いや、笑いも取れないとなれば、もはや道化にすら及ばな

い。

ぐずぐずと、えぐえぐと。

大の大人が恥も外聞もなく、声を押し殺し、鼻水垂らしながら泣いた。

なんて、無様。

B級映画の脇役ですら、もっとマシな最期だろうに。

「本当に、ごめんね。そして、ありがとう」

ふわりと、俺の残った右の掌に暖かい感触が触れる。恐らく諏訪子さんだろう。

さっきまでは冷たかったのに、今では人並みに暖かい。

これは本当に、体の方は大丈夫のようだ。

（安心した、ら…………意識、が…………）

唐突に、意思をつなぎ止めていた最後の線が切れそうになる。

我ながらタイミングの良過ぎる思考電源OFFに、何もこんな場面で主人公属性を体験したくなかった、と軽く現実逃避。

せめて逝ってしまうのなら、もっとカッコつけたかったなと内心で苦笑する。

1度死んだ時と同じように、どうやら俺はカッコつけられない生き物のようで、理解するのに2度も死ぬ羽目になるとは、我ながら巡りの悪さに呆れつつ。

「ゆっくりお休み。後は、私が何とかするから」

その日俺が最後に聞いた言葉は、眠る我が子に言い聞かせるような、諏訪子さんの優しい声だった。

第09話 目が覚めたら

鳥の音がする。

頬を撫でる風が心地良い。ずっとこのままでいたい気分だ。

けれどそれを意識したせいか、眠気はどんどん消えてゆく。

瞼を閉じていても差し込む光が目を焼き、たまらず左手で遮ろうとして……。

——感覚の無くなった腕に気がつき、一瞬で全てを思い出した。

ただ、だからといってガバツとなんて起き上がる気にはならなかった。

じんわりと、雪が解けていくかのように今までの出来事が思い出され、整理されて脳内に格納されてゆく。

そんな、起こってしまった全てを受け入れるべく、ゆっくりと目を開けながら……

(…………知らない天zy——)

「目覚めたか、洩矢の眷属よ」

天井見えねえし。見えるの人の顔だし。

わあ、綺麗な人だなあ。

青黒いショートヘアに、首から掌くらいの大きさの鏡をネックレスのようにひっつけた女性が上から覗くように声をかけてきた。

キリッとした眼光が、可愛いとかではなくて、出来る女って印象を際立たせている。

うむ、こんな美人が俺と接点なんてあるはず無いから、これは夢だな。

ただこんな夢は望んでいる訳ではなかったもので、見なかったことにして再び目覚めるのを待つでしょう。

おやすみなs

「目覚めたのなら体を動かしてみるといい。違和感のある箇所は言え」

随分と堅苦しい美人さんだな。

夢は本人の無意識下での願望でもあるって聞くし、俺にはこの手の趣味があつたんだろうか。

いやしかしこの態度で付き合うとなったら色々と考えられる場面が出てきそうだな。

参ったな、こりゃ今後の嫁さん候補を真剣に検討しなきゃいけないぜ。はははは。

………無理だな。

「お前、何してんだ」

我ながら開口一番のセリフが結構冷たいと思う。

しかし、本当に何してるんだこの神様。

俺の記憶じゃ殺す殺されるの関係だった筈だが。神だから人間と

感覚違うんだろうか……。

こちらの顔を覗き込むかのように体をかがめていた八坂は、一瞥観察した後、ゆっくりと立ち上がった。

「無礼な口の利き方だ……まあいい。お前の体の面倒を見ていた。諏訪子との契約でな」

契約………？

諏訪子さんが？

八坂と？

———今までの出来事と、この手の漫画的展開の終始を思い出し、尋ねてみる。

「……………諏訪子さんが服従する代わりに、俺の治療をお前がやったのか？」

「その通りだ。生憎と失った腕は戻せんが、それ以外ならばもう充分に回復しているはずだ」

……………何てこった。一人で勝手に自滅したところか、他人の足ま
で引つ張るハメになるなんて。

「……………諏訪子さんは無事か？」

「ああ。今し方、念話で連絡を入れた。もう――」

「九十九！ 目が覚めたって！？」

襖が勢いよく開け放たれる。

大変ユニークな帽子にそこから覗く金髪な小柄な少女は、俺がと
てもよく知っている人物であつた。

「あ……………えと、おはよう……………」ぞいます

長年の習慣からか。混乱した頭から出てきた回答は、無難といえ
ば無難な朝の挨拶だつたと思う。

元氣いっばいで息を弾ませながら挨拶する諏訪子さんに、思わず
安堵のため息が零れる。

日の光に照らされて、祟り神だっというのに、それとは真逆の性質の太陽の化身に見えた。

子供は風の子元気の子って感じ。

良かった。どこも悪いところは無さそうだ。

「おはようって……確かに目が覚めたらおはようだけどさ……。うん、まあ元気そうだしいいか」

「諏訪子、これで契約は果たした。腕以外、心体共に健全な状態に戻っている筈だ。何かあればまた私に言え」

八坂め、諏訪子さん呼び捨てですか。俺が意識を失っている間に仲良くなったのかね……。

そんな面食らった諏訪子さんとは対象的に、八坂はサバサバした感じで会話を一方的に済ませる。

そしてそのまま背を向け諏訪子さんが入ってきた襖から、チラリとこちらを見た後、出て行った。

そのまま、しばしの間。

改めて周りを見てみると、俺が寝泊りしている諏訪子さんの社の大広間にいることが分かった。多分、神気とかそいつた気質を集めるのにココのが効率良いんだろう。前にそんな話を諏訪子さんがしていたし。

で、こっちは何から聞いたものか悩んでおり、逆にあちらは何から話したらいいもので迷っているような……お見合いのように会話の糸口を探り、けれどどちらも攻め手にあぐねている状況に陥っていた。

だったら、女の子にそれをやらせちゃ男が廃る。

1人で勝手に空回って、もう付けるカッコすらないが、それでも意地を張りたいもんなのだ。

「あれから……………」

「ん？」

「あれから、どれくらい経ちましたか」

まずはテンプレその1、いつまで寝てた？　な質問。

問い自体にあんまり意味はないが、この手の会話の王道。

時間も切羽詰ってるって訳でも無さそうだし、ここから色々聞いてみれば良いよな。

「丁度1週間。その間、国の合併と、民達への説明。そして、取り決めの制定をやったね」

「体の方は、もう何とも無いんですか？」

「ああ。元々神つてのは肉体にそこまで縛られてる訳じゃないからね。神奈子の奴も私を滅するより屈服させる目的で戦争起こしたんだし。確かに肉体的な損傷は激しかったけど、霊核………魂が健在なら、神様つてのは存命し続けるものなのさ。ある程度まで、ね」

本当にズタボロになったら消滅するってことなんだろうか。

………血溜りの中で腹にオンバシラ刺されてた時点で充分瀕死だと思っただけど（汗

「本当に良かった。俺が見たのは血の中で倒れてた諏訪子さんでしたからね。これでもかって位ボロボロな。最後には………棒で胸を貫かれてましたし」

「あの時は参ったね。心までは折れてなかったんだけど、あれやられてポッキリ」

昨日転んじゃってさ、みたいに気軽な物言いに、何だか問い詰めるのも馬鹿らしくなる。

……俺、あれを見て今までにないくらい怒ったんだけどなあ。

もう神様の定義が分からん。普通の生物とは違うと思っておこつ。生命力的な意味で。

それから、今までに起こった出来事を聞いていった。

国の合併と、在り方。

民達への救済と説得。

法の制定。

そして、八坂への恭順。

諏訪子さんがミシャクジの何体かの譲渡と八坂への服従を了承することで、国や民の安全と繁栄と、先の戦で傷ついた者達への治療の確約をしたようだ。

「で、最後の1人である九十九がこうして目覚めて、晴れてこの国は一から出発することになったのでした」

「……………あっさり言ってくれちゃってますけど……………俺が倒れる前に言った気もしますが、そんなにサバサバ割り切れるもんなんですか？」

「そうせざるを得なかったからね。確かに私はミシャクジの統括者で、恨み辛みを代弁する者ではある。でもそれ以上に民達の成長を願っているんだ。これで国民全員皆殺し、とかだったなら、私は消滅しても一族その他草木に至るまで、関わりのある者は例え空気であつたとしても、全てを呪い殺す気概があつたよ」

何だ空気を呪い殺すって。ミシャクジ様マジこええ。

「そついえば……………村のみんなは……………何人、死んだんですか？」

言つた途端、ばかりと頭を殴られた。

あまり痛くはないが、突然の行動に思わず鳩が豆鉄砲食らつたよ
うな顔になる。

「九十九。心して聞け」

う、ガチの神様モード。神気が少し溢れている。

1週間寝たきりだった体にあ、ちと堪えるッス。

俺は一体何の地雷を踏んだのかと思いながら、はいと返事をした。

「まず結論から言おう。——この戦で散った命は、勇丸だけ。神奈子は敵味方の死傷者をそれ以内に収めて戦ったんだ」

「ちょ、ちょっと待って下さい。だって俺が到着した時には、戦場は死屍累々の状況だったんですよ？ 何人も地面に倒れてて——
ん？」

あれ、倒れていて……呻き声とか……あれ？

「そう、倒れていたただけ。傷ついていない者は居なかったが、それらは全て神奈子が治したよ」

「……………勇丸が、敵兵を蹴散らして八咫鳥と相打ちになったってのは」

「殺す事よりも戦闘能力を奪った方が効率が良かったんだろう。戦い方を見ていてそう思った。事実、あいつは恐ろしいくらい速さで敵を無力化していったんだ。敵は生きている事で泣き叫びながら周囲に恐怖を与えて味方の心に傷を与え、その救助をする為に人手を割かなければいけない状況を作り出していた。人間達には足を、八咫鳥には羽を攻撃することで、封殺していったよ」

「…………でも、勇丸は死んだじゃないですか」

「ああそうだ。勇丸は死んだ。その事実は何の言葉を以ってしても覆らない。ただ私はそこで止まらない。まだ残っている者達の為に私は私でなくなるまで神としてあり続けねばならない。それが、傷ついてもなお付き従ってくれた者達への、何より勇丸への恩返しだと思っている。…………九十九は、自分の復讐を他人にやってほしいと思うかい？」

「…………その聞き方は、ずるいです」

「すまない。こうでもしないと九十九は止まってくれそうに無いからね」

一拍。諭すような表情を変化させ、今度は謝罪の言葉を紡ぐ。

「——勇丸との仲を引き裂いたのは私だ。私に出来ることなら可能な限り償わせてくれ」

そう言つて、諏訪子さんは俺に向かつて深く頭を下げ、両の手を地面につける。

土下座。

古来より人々が神に対して行つてきたものを、逆の立場で見ることになるとは。

「……………それに関しては俺にも思つところはあります。ですので……………」

諏訪子さんの手が強く握られるのが分かる。

恐らく、これから殴るなり蹴るなり罵倒するなりされるのではないかと思つてゐるのだろう。

その気持ちに答えるような真似もしたくない訳ではないが、そういうのは一番被害にあつた者が行ふべきものの筈だ。

仲を裂かれたのは不快だが、俺はこうして、腕は無いものの生きている。

なので、

「そういう事は、一番の被害……。違うな。一番の功労者に聞いて下さい」

「え……………」

疑問の声と同時に、視線を俺の方へと上げる。

白くて、大きくて、もふもふで。

そこには、初めて見た時と同じように勇丸が悠然と鎮座していた。

「いさ……………まる……………」

漏れるように諏訪子さんが言葉をこぼして、動きが止まる。

「勇丸……………私分かる？」

震える声で、すぐる様に尋ねた。

すると、僅かではあるが、はっきりと分かるように、勇丸は頷く。
途端、諏訪子さんは勇丸に抱きついた。

その首に顔を押し付け、すまかった、許してほしいと懇願する。

ちょっと空氣的に居づらいのだが、俺も当事者の1人ではあるの
で動くに動けない。

それに、諏訪子さんを覚えているということは、俺のことも覚えて
いる筈だ。これが嬉しくない訳がない。

勇丸召喚の僅かな疲労感に懐かしさと失ったものを取り戻せたこ
とへの安堵感が重なり、俺の心はそれだけで満たされる。

今の心中は恨みとかそんなものは一切無くて、いつもの俺そのもの。
の。

明るく楽しく過ごしたいなあ、『楽に』↑ココ重要。

の精神が前面に押し出ている常態だ。

ぼりぼりと頬をかく指にザラつく感触を感じながら、そういやヒ
ゲ剃ってないなあとかぼんやり考えていると、諏訪子さんの気が済
んだのか、こちらに視線を向けてきた。

「本当……何て言っているか……」

「気にしないで下さい。馬鹿な男が一人で空回って勝手に自滅しただけの話です」

「でも……それじゃあ……」

何もしないでいることに我慢がならないのだろう。

そわそわと何かを提案しようとするが、こちらが要らないと言ってしまったのでどうやって謝罪しようかと考えているようだ。

俺が諏訪子さんの立場だったなら、確かに何かしらの謝罪を行いたくなる。

だが困った。これといってやってほしい事など無いのだ。

謝ってもらっても逆にこちらが申し訳ない気持ちになるし、かといつて欲しいものがある訳でも……あつたわ。

ただなあ。この手の出来事にありがちな『え？ そんなことではないの？』的な要求をして驚かせてみるのも面白そうなのだが、勿体無い気がしてならないので少し悩む。こんな機会滅多にないだろうし、会いたくもないし。

腕を組み、うんうんと唸って考えること数十秒。

気持ちより実益！ と結局物欲に負けた俺が諏訪子さんに提案したのは、

「じゃ、服作ってくれませんか？」

というものだった。

今の俺は弥生時代の人辺りが来ていそうな服……つまりは、この時代の服を着ている状態。

GパンとかTシャツはボロボロになってしまったのだろう。

履いていたスニーカーだって、今まで歩き続けてきたせいで、戦う前からボロボロだった。

……誰が俺のこと着替えさせたんだ。まさか諏訪子さんとかじゃないだろうな。

考えない方が良くと、俺の良心と羞恥心が無意識下で働きかけたかのように、その出来事をスルーする。

あんまり考えたことは無かったのだが、身に着けるもの全ては消耗品。

ゲームとかアニメなんかじゃキャラは全員いつも同じ服な場合が

殆どだったが、歩けば靴は磨り減るし、衣類だって雨風でボロボロになり、武器とか持っていててもメンテナンスをしていたっていつかは完全に取り替える時期が来るのだ。

多分服自体が自己再生とか能力持つてるんだろうとか何着も同じの持つてるんだとかで当時は強引に納得するようにしていたのだが、その手のルールが今の俺には当てはまらないので困ってしまったという訳で。

ここに来てから約半年。

Gパンは問題なかったとして、Tシャツなんか別に土ぼこりの多いところへ行っていたわけでもないのに、1週間で野球漫画の主人公並みに汚れちゃったもんなあ。

村の人が手洗いしているのを横で眺めながら、2回目以降は自分で洗濯をしたものだ。

きつと冬になって水温が下がったら洗濯ローションが1週間から2週間に伸びていただろう。寒いイヤだから。

………そっぴや今って季節はいつなんだと疑問に思うが、これもスルーしておこう。

「分かった。最高のものを仕立てさせてもらっよ」

「前に頂いたミシャクジ様の外套みたいな感じのだと有り難いです。あれ今まで着てた衣類のどれよりも着心地最高だったんですね」

あ、地味系でお願いします。と付け加えたところで、諏訪子さんは目線をずらし、俺の後ろにある襖に、もういいよ、と声をかけた。
ん？ と首を傾げるまもなく、スツと入ってくる八坂神奈子。

出て行った時と違って、注連縄は外している。

ゴツさが取れて美人度UPな感じだが、やっぱりまだ怨む気持ちは残っているので、素直に感動することはない。

そんな俺の心情など気にする様子もなく、八坂はどかりと部屋の中央、元々諏訪子さんが崇め奉られていた位置へと座り込んだ。

組んだ胡坐を崩して、あの例の偉そうな（偉いです）ポーズになる。

ちよつと複雑な心境だが、諏訪子さんや勇丸は何も感じないようで、体を八坂の方へ向けた。

場の空気に俺も体を向け、それを見て、これで話す場が出来たとでも思ったのか、八坂が威厳に満ちた語りと言う名の自己紹介を始めた。

「私は八坂神奈子。大和の国を治めている者の1人だ。ここは我が国の傘下に入ること、名前も洩矢の国から守矢の地へと改名した。

——洩矢諏訪子、並びにその眷属よ。以後、私に仕え、称え、崇めよ。さすれば飢える事のない日々を約束しよう」

頭の中が真っ白になった。

諏訪子さんが八坂へと下るのは知っているし、国の改名も分かっていた。

ただ——ただ、だ。

並びにその眷属ってのはあれか？ 俺のことか？

『待つてくれそんな話聞いてないぞ』と諏訪子さんに顔を向けると、当の諏訪子さんもきよとした目でこちらを見ていた。

……あれ？ 諏訪子さんも知らない………？

………どういうことだ？

「ちょ、ちょっと待つて神奈子。確かに私の国は服従するし、私達ミシヤクジもその指揮に入るとは言ったよ。でも九十九は別だ。こいつは、私の眷属じゃないんだよ」

今度は八坂がきよとした顔をする。

え、何この展開。

面白い顔を見られて良いもの見たなとは思うが、口を挟むのも怖くて、とりあえず色々取り決めたした当人同士で話し合ってもらうとしよう。

「……………嘘を申すな諏訪子。この国の……………守矢の者達は口を揃えてその者はお前の眷属だと言っていたではないか」

嘘ついてんじゃねえと八坂が言った言葉に、諏訪子さんと俺があちゃー的な顔をする。

「あゝ、神奈子。その、ね。……………うーん言葉じゃあれだし……………。九十九と私の繋がり、見てみてよ」

いまいち理解し難いが、繋がりと言うからにはやっぱり霊的とか神的なものなのだろう。

眷属というのは、そういった繋がりがある——のだと思うので、それを見てみろって事なんだろうか。

無然としながらも八坂は目を凝らすように俺と諏訪子さんを見比べる。

1回、2回、3回。

視線を行ったり来たりさせながら、その表情は納得いったという風に深く目を伏せ、大きなため息を吐いた。

「どういう事なのか分からぬが……確かにお前とそのこの男、そしてその狗神との繋がりはないな」

「ごめんね神奈子。この九十九はさ、半年位前に私が招き入れた外来人で——」

そのまま、この国への異様な外来人を招き入れる為の方便である事。俺との出会いから、様々な奇跡を起こせる事を買われ、妖怪の討伐を行っていた事。この国の為に様々な知識や技術を授けてくれた事への説明を終えた。

崩した胡坐に肘をつき、添えられた手に頬を乗せながらじっとその話を聞いていた八坂は、最後までその姿勢を崩すことはなく、話し終えてからは瞳を閉じ、じっと何かに思考を巡らせているかのように、ふむ、と一言呟いた。

「なるほど。つまり洩矢の国の為に働いてくれたのは事実だが、仕えてさせていた訳でも使役していた訳でもないのだな」

そう、まとめる様に八坂は締め括った。

こくりと頷く俺と諏訪子さん。

勇丸は何をするでもなく、ただ静かにその場に控えている。ああ、この感覚がとても懐かしい。

「そうだな……。お前、名を名乗れ」

唐突に、八坂は俺に向かってそんなことを言った。

指を自分に当て、俺ですか？ というジェスチャーをしてみると、どうやらその意味が分かったようで、そうだとばかりに不適な笑みを浮かべる。

名前なら諏訪子さんが散々言ってただろくに、やっぱり自分で名乗る事に意味があるんだろうな、この手の挨拶は。

くそう、この高慢チキめ。

「……………九十九」

「何ができる」

間髪入れずに質問続けやがった。

まさか1問1答みたいに問い詰めていく気か!?

「……………色んなものを呼び寄せられる」

「やってみせろ」

……………何か腹立ってきた。

この野郎……………じゃない。この女郎、あんま舐めてっといてまうぞゴルア。

やってみせろなあ？ いいじゃねえかやってやるよ。

体力も回復しているし、わざわざ相手からやれと言ってきているのだ。

凶悪なクリーチャーかスペル使ってやんぞ！

と息巻いた目で八坂の方を見てみると、横から諏訪子さんが袖をちょんちょんと引っ張りながら、首を左右に振った。止めなさいって事なんだろう。

その仕草、おねだりする妹みたいでGJです、と一瞬意識が違う方向へ飛んだがすぐ戻ってくる。妹なんていたことないけどね。

仕方ない。ならばと違う意味での凶悪なカードを思い浮かべる。

その余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）な表情崩してやんよ！ 効果あるか分からんけどな！

あれ何マナだったかな。多分2だと思っただが……いや3だったか？

まあいいや。実行あるのみ！

「覚悟しんしゃい！『お粗末』！」

言動は気にしない。なぜなら俺だから。

我なら何言ってるんだとは思っが、そういうカード名なのだからしょうがない。

ふざけた名前なれど、その効果は折り紙つき。

『お粗末』

コスト2で、白のインスタントカード。

対象のクリーチャー1体を0/1にし、全ての能力を失わせる効果を持っている。

0/1ということは攻撃力は皆無となり、防御力も、下手をすれば俺以下。

何より能力の全てを失うのだ。

これが決まれば神だろうが悪魔だろうが一般ピープルと同等になる。

だが、MTGではこのカードの採用率は皆無。

クリーチャー対策をしたいのなら、そんなまどろっこしいものなど使わずとも、もっと単純に『このクリーチャーを破壊する』といった除去系のスペルを使えばいいのだから。

MTGにおいて、その手の除去系カードが高コストという訳ではないので、このお粗末はネタかカードの購入が揃わない時点での代用品くらいにしか記憶になったが、思わぬところで役に立った。うん、今度から捕縛系呪文その1として覚えておこう。

疲れが襲ってくるが、今までに比べると疲労の度合いが少なく感じ……お、ちょっとはレベル上がったんだろうか。と考える。

唱えたと同時に、八坂に光が集まり、四散する。

やはりその事に驚いたようで、目を見開き、次に俺を睨み付けた。

「何をした」

「やってみろって言うからやってみただけだ。呼び寄せたんだよ。奇跡の1つを」

ふふん、これでお前はただの女になったのだあ！

ぐへへへ。これであんなことやこんなことをし

「気味の悪い目で見るな」

ズドンッ！　なんて、そんな音がピツタリだろう。

俺の目前に何かが突き刺さる。

板張りの床を貫きそびえ立つそれは、紛れもなくオンバシラ（細め）。

後10cm近かったら俺の顔面剥がれていたよね？　ってぐらいの勢いだっただぞ。

（あれえ？　能力封じられてねえじゃん（汗））

と先ほどまでの余裕ぶっこきまくりな思考は捨てて、視線を遮るオンバシラを避けて、首を曲げながら八坂に目を向ける。

俺の青ざめた顔を見て満足したのか、彼女は鼻で笑うと、気に入ったとばかりに、

「九十九。お前——我に仕えよ」

なんてのたまってきた。

第10話 対話と悪戯とお星様

有象無象の者が私に仕えている。

神やら人やら妖怪やらが、私の傘下であり、力であり、守るべきものである。

だが、この者は何だ。

諏訪子の眷属ではないという。かといって、妖怪の類でもない。

ならば人かと問われれば、首を傾げざるを得ない。

奇跡、と。

この男——九十九はそう言った。

様々な異形の者を呼び出し、今私の身に起こっている事態を目の当たりにして、なるほど。これは人の身に出来る事ではないと判断する。

覚悟しろと言った後、私の体に光が集まり、四散した。

何をしたと眼力を込めて気負そうと睨み付けるものの、効果はな

く……いや、効果が現れず、九十九にだけは効果がないのかと思いきや、周りの者——狗神や諏訪子も何をしているのかとばかりに、表情に変化はない。

私の身に何が起こっているのかを知っているようで、九十九とやらはゲスな目を向けてきた。

神に牙をむき、後一步のところまで追い詰めたあの面は見る影もない。

……いや違う。追い詰められたのではない。もはや殺す殺さないの殺生権を奴は握っていた。

今の私は、コイツに生かされているようなものなのではないかと僅かながらの疑問を抱く。

なれば多少なりともコイツに良くしてやるのが神というものだろうが……

（その視線は我慢ならん！）

その視界を遮るように、大樹ほどあるオンバシラを具現化し、奴と私の間を隔てるように出現させた。

だが、どうだ。

（なっ！？）

出てきたオンバシラは私の腕ほどしかない、か細いもので、しかもそれは出現させた途端に神気を失い、無造作に床へと突き刺さった。

派手な音が響き、それに対して九十九はそのゲスな表情を引つ込め、今度は顔を青くしてこちらに顔を向ける。

その事自体は気分が良いが、力が上手く行使できない事に気がついていた。

確かめるべく、体中に神気を行き渡らせ、確認を行う。

神格が大幅に低下。

それに伴い、神気もかなり失われ、能力の発揮にも支障を来している、この状況。

（……………何だ、これは）

これではもはや、そこいらにいる下、中級の神々と変わらない。

流石に雑多な大妖怪程度には負けないだろうが、苦戦してしまう水準だ。

【お粗末】と、九十九はそう言った。

文字通り、私がお粗末になってしまった、と考えるべきか。

奴が言う奇跡とやらは、言霊を現世に呼び出す事なのではないか、とあたりをつける。

（くくくつ。たった一言呟かれただけで、名だたる神々とも渡り合え、打ち据える力を持つこの私が、こうも削がれるとは）

油断していたから、といえは聞こえはいいが、体に変化が起きたことすら意識しなければ気づかなかった。

1つの奇跡でこれだ。

多少の疲れは見て取れるが、奴の矍鑠かくしゃくとした態度はまだまだ健在。

九十九は色々なものを実現させるのだと言った。——恐らく、言霊を実現させるようなものだろう。

人ではない？ ああ、確かに人ではない。人でなどあるものか。

人でも妖怪でも諏訪子の眷属でもないのだとしたら、自然とそこに考えがたどり着く。

神。

それ以外の何だと言うのか。

神にしては人間のように表情をこころ変え、まるで強大な自分を偽らんとするが為に、わざと下賤な行動をとっているようだ。

何の為にそのような行為をしているのか分からないが、きっと委屈のぎの類だろう。そうでなければ余程偏屈な神だと言える。

『九十九』とは『憑く物』と韻を踏んだ名前であるところの、物に宿る神を表していた筈だが、名前は諏訪子が命名したと言っていたならば、本来は別の名が付いていたのだろう。

ただ、言霊を操る大神なぞ聞いた事がない。少なくとも、この大陸では。

その神——九十九自体は人間と変わらぬ体力しか持ち合わせていないようだが、その程度、こやつを持つ奇跡を行使する力を前にすれば霞む。

欲しい。

ミシヤクジの統括者を従え、鉄を精製する技術を獲得し、そして言霊を実現する神を手中に収めれば、この大陸はおろか、海の方この国々まで制覇出来てしまえるのではないか。

笑いが込み上がる。

弱体化した自分のことなど棚に上げ、九十九を誘う事にした。

このような態度なのだ。色好い返答はないであろうが、伝えずにはられない。

「九十九。お前、我に仕えよ」

我ながら、とても簡潔な一言であったと思う。

さて、わたくしこと九十九は、現在、神様からの勧誘を受けている真つ最中な訳でして。

日本でも最高位に近い神様なもんだから、本当なら諸手あげて嬉しさにピールタイムなのだろうが、この前の戦闘の相手が相手なだけに、そんな訳にもいかず。

あれか、【死の門の悪魔】とか【死の影】とか勇丸とかを傘下にしたいとかその手の類か。

それとも『歯向かって来るとは中々に見所がある云々』みたいな反骨心が好物なお方なのか。

ま、なんにしても答えは1つ。

「嫌です」

もつと遠まわしな拒否の仕方があったとは思うが、俺の心をストリートに表した結果がこれである。

第一、この八坂神奈子って神に仕えたのなら、息抜きとかだらけ

るとか出来ない——ゲフンゲフン、ではなく。

アニメ版ジャイアンに対して、初見で好意を持てるのか？ といった感じだろうか。

だって、まだ一度もこの神様の良いところを見たことがないのだ。

キャラ背景も性格も将来も知っているが、だからって、俺の大切なものに手を上げた奴に対して、全面的に好意を持って接する事など、出来る訳がない。

性格に関しては二次設定を多分に含んでいる印象を受けるが、あまり反れたものではないだろう。

だって、言動がまさにそれっばいから。

きつと、ここから親しくなっていくたのなら、もっとフランクな口調になるのだろうが、別に求めてはないのだし、今は無関心。

嫌だと答えた自分の心情を分かって欲しい。

「神奈子、いきなりそんな事言ったってダメだよ。せめてお互いにある程度相手の事を知っておかないと」

諏訪子さんが、もう少し手順を踏んでから勧誘しろと言っている気がする。

あれえ、諏訪子さんは俺が八坂陣営に行くのに賛成なんですか？
と思ったが、単純に会話をスムーズに成立させる為だけに言った
だけっぽい。顔が呆れてたし。

「それもそうか……。九十九、何故私の誘いを断る」

お前、人の話を聞いてないだろ！　ココは普通、自分語りとか始
める流れじゃありませんでしたか！？

「そりゃあ俺自身ボロボロにされましたし、諏訪子さん刺されまし
たし、国乗っ取られましたし、国のみんな傷つけられましたし、勇
丸殺されましたし」

ぶーぶーぶー。

とりあえず、思いつく限りの嫌な出来事を脳内再生しながら言っ
てみる。

これだけやられて、逆にどうして好意的な態度をとれるのか聞い
てみたいもんだ。ってか聞いてやる。

勇丸がその時の事を思い出したのか、尻尾がいつもより垂れ下がっている気がする。

よしよし、お前のがんばりは無駄にすまいぞ。

「これだけの事をされて、どうしてその原因である相手に従わなくちゃいけないんだ」

どうだ参ったかお前の提案は受け入れねえぞ、と自分を通す男、九十九。

ふっ、俺はNOと言える日本人だ！

「まあいいではないか。楽しいぞ、領土拡大やら統治やら」

……………うわあい、俺の意見が一言でバツサリだあ。

ここまで唯我独尊だと、これはこれで親しみが沸くものなのではないかと思えてきてしまう。

そついや原作でも、やれ産業革命だとかやれ太陽神の力だとか好き勝手やってたもんなあ……………流石、神様。

む、いかんいかん。

あまりに感覚の認識がずれ過ぎてて、段々と憎悪が薄れていつて
いる。

自慢じゃないが、俺は怨みやすくもあるが、情に流されやすくも
あるのだ。こんな美人と会話出来るだけでもテンション上がるって
もんよ。

………といった理由は後付けで、俺の中に八坂を怨み続ける燃料
が無い事が、態度軟化の最大の原因だろう。

国としては負けてしまったものの、諏訪子さんや国民は健康にな
っており、勇丸も無事に記憶を引き継いでいる事が分かった。

俺自身はボコボコにされ隻腕となってしまうたが、それは、悪意
からではない根源からの発生による暴力だと、原作を見ていて分か
っているのだ、相手の事を考える余裕の出来た今となつては、八坂
の出方次第で俺は許してもいいと思っている。

もつとも、負けた側が許す許さないと判断しているのは、このデ
スマツチ日本の中では些か滑稽だとは思うが。

なので、とりあえず八坂に何かを提案させて、それを俺が受け入
れて怨み辛みはチャラにする。という流れで事態の收拾………とい
うか、俺の気持ちに区切りをつけることにしよう。

諏訪子さんも、既にこの大和の国へ尽力する覚悟を決めているの
だ。

俺1人が反骨心を持っていても、この国の人は誰一人幸せになることはないだろう。

「……………八坂の神。あなたは俺に対して、何をしてくれますか？」

遠回りな意見を口にしてしまうと、この神様はスルーしてしまうのだと判断して、本心をストレートにぶつけてみる。

一応、雇用形態の確認というか契約という名の交渉をやっている形になるので、好かない相手といえど、口調はフランク過ぎず丁寧すぎず。諏訪子さんを相手にしている時より幾分忠誠心ダウンな感じしていく。

領土とか政治なんかは興味がない訳でもないのだが、そういったものはMTGの能力を把握してからでいい。

「そうだな……………。子孫繁栄を約束し、無病息災を確定し、この国の誰よりも富を持たせてやることも出来る。勿論限度はあるが、大体の事は出来ると思うぞ」

話に食いついてきたのが嬉しいのか、八坂は楽しそうに、そう話

す。

しかし困った。

子孫なんて悲しいかな、まず相手がいない時点でピンとこない。無病息災は確かに嬉しいが、それだけの為にずっと従僕になるというのはナンセンス。財はあつて困るという事は無いだろうが、金銀財宝とかは能力を使えばザクザク出せそうなので却下。

（参ったなあ、惹かれる提案がない……。八坂にも服作ってもらうか？　もしくは便利なアイテム貰うとか……。ん？）

——ここまで考えて気がついた。

さつきもさらつと思つたのだが、何か条件を飲んだ時点で俺はこの国に、八坂に仕えなければなくなる、という流れなのは間違いない。

誰かに忠誠を捧げるというのも悪くはないと思うのだが、今はまだアウトロー、もしくは一匹狼をしていたいお年頃。

多分やる事は諏訪子さんのところで働いていた時と同じように、妖怪退治をするのだろう。

となれば、長い間の休職は出来なくなる。この仕事ってのはそういうもの。

それはそれであり……だとは思っただが、諏訪大戦という重大な原作分岐点の1つに巻き込まれてしまったのだ。

どうせなら、見れる範囲は全て行ってみようかという気持ちが湧き上がっている。

（でも死にたくねえしなあ）

ストーリーは大まかにしか覚えていないが、この後のビックイベントは『かぐや姫』から始まって『西行寺』と向かってる………筈だ。多分。

正確に何年に起こる事態なのかは分からないが、生死が関わるものは、かぐや姫には月からの迎えの場面にさえ居なければ問題ないとして、西行寺に向かうのなら戦闘云々ではなく、幽々子さんと出会ったら能力で死ねそう。

……いや、俺の事だから出会う前に死ぬんじゃないだろうか。庭師に切られたりとかで。

ガチンコ戦闘する機会は薄そうだけれど、やっぱり、もっと経験値積んで強くなっておかないと、後々で苦しむ羽目になるのは予想できる。

どうせなら、情けない姿ではなく、真逆の態度で出会いたいもん

だ。

俺の中にはスキル『格好付け（偽）』でも備わってるんじゃないかと疑いたくなるが、やるやらないは兎も角として、目指すだけなら構わないだろう。

こう……ヒーロー的ポジションに位置する為には、今がんばらねば間に合わないくさい。俺の成長率的に。

「あなたっ！ 誰！？」

「名乗るものの程でもない。ズガガガン！↑なんか敵をまとめて倒した音。じゃあな。○。（好きなキャラの名前を入れてね）」

「待つて！ ……………あの人は一休……………」

——良い。

痛いだけな気もするが、この流れは厨二を乗り越してテンプレ……
……違う。もはや王道だ。一度くらいはやってみたい。

（うーん、じゃあやっぱり……俺の修行の為に付き合ってもらおうとかぐらいかなあ）

洩矢に居た時は、RPG系で例えるなら、序盤の村とかでひたすら雑魚を倒しまくる作業。

この間に俺の何のレベルが上がったのかは不明だが、体力はついたし、戦略の幅も多少は広がっている。

ただ、あくまで自己流の戦い方を学んだだけであり、指南してくれる人はいなかった。

もうそろそろ、次の段階へと進んでもいいだろう。

「そのどれも要りません。代わりに、俺の修行に付き合ってください」

「ほう、あの悪魔や黒き影と、再び私が対峙するということか」

「意味合いは近いですけど、それだけじゃありません。もっと色々な相手と、ってところです」

八坂は顎に手を当て、ふむと呟く。

油断からとはいえ、死の一手手前まで追い詰めたものと再度戦えというのは、やはり躊躇われるものなのだろう。

こりゃあもう少し条件緩めて、カードスペル効果の実験台だけでも良いかな、と考えを改めようとする、と

「お前が起こせる奇跡とやらは、まだ成長の余地があるということか？」

なんて尋ねてきた。

「ええ。というか、むしろまだまだひよっ子です。やっとスター……
……出発地点に立ったところですかね。………あ」

言った後に後悔した。

八坂を首の皮1枚まで追い詰めてしまった俺がこのセリフを言うという事は、『成長すれば、お前を倒せるぞ』と同義なのだ。

勧誘までしてくるのだから、理由はともあれ俺を必要としてくれているのは間違いないのだが、これが狭量な相手だったり疑心暗鬼に近い性質の性格だと、俺は消されかねない。

（た、頼むつ。『ははは気に入った』な展開になってくれっ！）

原作基準の性格ならそうなってくれるとは思っただが、微妙に思っていた展開と違った諏訪大戦を思い返してみると、今一歩踏み込めない心情に陥る。

表情には出さずに、内心で神（諏訪子さん）に祈りまくりながら、八坂の顔を見てみれば……………

「それは良い。楽しみが1つ増えた」

くつくつと、いたぶる相手を見つけたかのように笑う軍神様が

らっしゃいました。

（あちゃー……………バトルジャンキーな方でしたかぁー……………）

オラわくわくすつぞ！　って感じで明るく対応してくれたのならまだ良かったんだけど——それもそれで問題ありだが——と、案にやっぱり辞めたい願いを祈ってみるも叶わず、漏れる神気にびびって言葉の続きが出てこない。

「では九十九の神。以後我の手足となり、奮起せよ。尽力する限り、対価を支払い続けよう」

N O O O O ! !

決まっちゃったくさいー！？　ずっとなんて仕えたくないよ。

……………ん？　九十九……………の『神』？

「ちょっとストップです八坂の神。色々聞きたい事はありますけど、まず1つ確認させて下さい。——九十九の『神』ってのは何です

？ 俺、人間ですよ？」

「異国の言葉は分からね。——神というのは、お前の事だ、九十九の神。何の酔狂で人間の真似事などしているのかは理解に苦しむが、私の下に就くからには、ある程度は神の役割をこなして貰うぞ」

そっぴやストップって英語か……ってそうじゃない。

八坂さんや、何を以って俺を神だと言っているのか、こっちの方が理解に苦しむわい。

「話を聞いて下さい。俺は神でも眷属でもありません。それに九十九神って他に居るでしょう、物に憑く奴が」

「ならばお前のその力をなんと説明する。様々な妖怪——悪魔を従え、私の身に変化を来たすような奇跡を起こす者を人だとも言うつもりか」

「（変化？）そう言われると、俺自身首を傾げたくなりますけど……それでも、カテゴリ……部類としては人間なんです。腕力がある訳でも神気を使える訳でもない」

「だが、その奇跡とやらは我々神と近いものを感じる。魑魅魍魎を呼び出すその性質は真逆なれど、力は純然たるものだ。そんな力を、精々数十年しか生きていないただの人間が持ちえている訳がない」

そこ突っ込まれるとキツいんですねー（汗

どうしたものか。諏訪子さん相手だとその事は空気読んで流してくれたけど、八坂相手じゃそれは期待出来そうもない……………というか現在進行形で突っ込まれてる。

「神奈子。九十九は過去に関して決して話さない事を理由の1つとして、私の国の為に働いてくれていたんだ。もし仕えさせるのなら、それには触れない方がいいよ」

ナイスフォローです諏訪子さん！

ちゃんとした確約ではないけれど、俺と諏訪子さんの間にはそういった暗黙の了解があった。

嘘は言っていない作戦ですね！ 分かります！

何度か『聞き出してやるぞ』って空気はあったのだが、全て冗談……………というか、俺をからかう為にやっていただけという場合だけだった。

おお、八坂が考え込んでいる。これで引き下がってくれば良いんだが……………はっ！？ このセリフはフラグ踏んだか！？

「…………致し方ない。だがいつか話せ。興味がある」

フラグは回避したっぽいが、状況はあまり変わっていない。

剛速球がスローボールに代わった印象だろうか。

どちらにしろ相手にボールは届く的な意味で。

…………何とかして忘れてくれないかなあ。もしくは諦めてくれるか。

どっちも無理だとさっくり諦められれば楽なんだが、きっと俺の事だからことある毎に悩むに決まっている。

そこだけはさっくり諦められるな。ははは、情けない方向に自信満々だぜ。

「それへの返答は、否としか応えられませんが……………助力は出来るだけやりますよ。ただし期間がありますけど」

「ほう、言ってみよ」

「（この時代の人の寿命ってどれくらいだったかな……………）……………100年。その間だけ、俺は尽力します。あなたの為ではない。こ

の国の為でもない。……この国に飲み込まれてしまった洩矢の民と、諏訪子さんの為です。そこを履き違えてくださらなければ、私はあなたの下で働きましょう」

「（……100年、か。やはり人間ではないではないか）分かった。よく覚えておこう」

そう言つて、八坂はすくと立ち上がる。

こちらにゆつくりと歩みを進め、俺の前で立ち止まった。

目前で持ち上げられる右手。

手を差し出すその行為は、握手を求めているからなのだろう。つられてこちらにも立ち上がる。

確か相手から名乗らせるのは、こいつた友好関係を結ぶ際には失礼なんだったか。

「俺の名前は九十九。一応人間です。宜しくお願いします」

「八坂 神奈子。大和の国の一端を治めている。好きなように呼べ。人間と言ったんだ。私に対して敬う事を忘れるなよ」

「じゃあ……神奈子さんって呼ぶ事にしますね」

「ふふ、そうやって呼ばれるのは初めてだな。ただし、諏訪子にもやっているように、私にも民達の前では呼称を変えておけよ」

『様』は付けろってことですね。了解です。

色々と聞きたい事もあったが、何だか話の流れ的に聞き難くなっ
てしまい、結局、まあいいかとスルーすることにした。

どうせ決して短くない付き合いになるのだ。

尋ねる機会は、それこそ無数にあるだろう。

さて、これで諏訪大戦という原作のビックイベントの1つが区切
りが付いたわけだ。

俺の心にも同時に区切りというか踏ん切りが付き……………これで残
すところ憂いは後1つになった。

……………くつくつく。

「じゃ、早速ですけど神奈子さん。修行……………というか、実験に付
き合ってください」

「もつか。構わんが、何をするつもりだ」

よっし。OK発言、確かに聞いたぞ。

「簡単です。少しの間、動かないでいてほしいだけです」

うわぁ…………。

急に顔が強張って睨む様な視線になっちゃったよ。

「そうおつかない顔をしないで下さい。何もあの悪魔とかをまた召喚して殴らせようとかって訳じゃないんです。痛くも痒くもありません。むしろ楽しい事かと」

「ならば言え。何をするつもりだ」

眼光緩まらねえ。警戒心MAXだぜ。

ふふふ、でもそれじゃあ俺の気持ちは止められない！

神気が強まって結構息苦しくなってきたいるのだが、流石に半年

近く諏訪子さんの側に居たせいか、ある程度は無理が利くつてもんよ。

「それを言ったら実験にならないもので。それともあれですか？大和の国の一端を担っているお方が、自分の発言には責任が持てないത്？」

おお、神奈子さんの顔が面白い事に。

美人の困り顔というのも乙なものだが、今回の目的ではないので残念ながらも安心させるよう言葉が続ける。

「別に害をなそうって訳じゃありません（ある意味害だが）。天地神明に誓います（信じてないが）。もし命の危険を感じたら、俺をぶっ飛ばして構いませんから（優しくお願いします）」

「……………分かった。この場から動かなければ良いんだな」

「はいそうです。ただ、少し足を崩していただけると助かります」

「足……………？ん、こうか？」

「ええ。そのままその足を揃えて、前に向けて下さい」

一体何をするんだって表情の神奈子さん。

それもそうだ。俺だって同じ立場ならば困惑している。

………うん、良い足だ。一点の曇りもない美脚は至宝と認定しても良いだろう。もう少し雰囲気があれば、そのまま顔を埋めてしまいたいくらい。

足を投げ出した神奈子さんの横に座る。

何かしたら分かってんだろうな、と顔を向けてくるが、本当に、傷つけたり痛めつけたりといった類の事はする気は無いのだ。

そつと、その2本の足の踝くるぶしを上から押さえつける。そして、

「勇丸！ GO！！」

満を持して、今勇丸が神奈子さんに突撃。

思念で命令は既に伝えてある。

元から近い位置に居たこともあり、すぐに側まで寄ってきた。

そのまま俺が抑えてつけていた足に顔を近づけ………

舐めた。

「——っ！?!?!?」

おお、悶えとる悶えとる。

バタバタと足を動かそうとするが、自力での体力は男には適わないようだ。良かった、この辺は神様が規格外じゃなくて。

諏訪子さん、洩矢のみんな。そして俺の清算は終わった。

けれど、勇丸だけは、まだなのだ。

さつきから、とんとん拍子で進む俺と神奈子さんの関係に対して『ご主人様が望むのなら』ってな具合に沈黙を保っていたけれど、晴らしたい恨みが無い筈がない！と俺が気持ちを汲んでやり（独断）、けれど血みどろな結果は避けたいなと考え、ハッピーな方面でそのストレスを発散してもらおうと、ペロペロ作戦を仕組んでみた。

「九十、九っ！ お、おま、お前という奴はっ——！！！」

こちらを必死に叩くものの、まるでノーダメージな俺。いくら女性だからって非力過ぎるにも程がある。

ははは可愛いですよ神奈子さん。

ああ、さっき言ってた変化ってこういう事なのか。

恐らく先ほどの呪文、【お粗末】の効果なのだろう。本来なら問答無用で対象を雑魚にするスペルだが、原因は不明だけれど、中途半端に効果が現れているようだ。

能力の方は分からないが、力はまさに0/1に相応しい症状が發揮されている。

(……………何だ、やっぱり効果あるんじゃないか。微妙だけど……………いや充分か？ 最高ランクの神を相手に、この成果なら)

湧き出す笑みを隠そうともせずに、俺は神奈子さんへと話しかける。

「そつえばまだ言ってますでしたね。実験内容は、神様の弱点

探しです。神様側からしたらとてもじゃないけど協力なんてしてくれないでしょうし、こういう手段をとらせて頂きました」

なんて託けて言ってみるものの、結局は悶える姿が見たかっただけだったり。

勇丸に足を舐めさせるなんて……。とも思ったこともあったが、そこはほら、俺の悪戯ゲフンゲフン。——勇丸自身に恨みを晴らさせてやらねばらないので、このような形になったのだ。

他にいくらでもやり様があるだろう、なんて気にしない。

こういった、地味だけど効果がありそうな（相手が嫌がる）意地悪をするのが、俺は大好きなのだ。

転生前の能力を考案していた時は、『水虫にさせる能力』とか『歯並びを悪くさせる能力』など、別に死にはしないし生きる上で支障は何も無いけど、やられたら嫌な能力の取得を一瞬だけだが本気で考えたりもした。広義解釈で『相手に嫌がらせをする能力』。これ結構汎用性高そうだなとも思っただよな。

そんな話はさておき、現在進行形でペロペロの刑を執行中なのだが、いい加減そろそろ“来る”タイミングだと思うので、心頭滅却し、いつ起こっても良いように備える。

正直すまんかった勇丸。こんな下らない我が侘に付き合ってくれて、お前ホント忠犬だわ。

だから、こんなことをお前にさせた俺は、そろそろその対価を支払ってこようと思う。

諏訪子さんだって、さつきから呆気に取られ、声を上げる事すら忘れていたようだし。

……あ、神奈子さんの目がこっちをロックオンした。

「このっ——痴れ者があああ!!」

天井ではなく、後方にあつた襖をぶち破り、空を飛ぶ。

『ふふふ、オンバシラって結構飛ぶんですね』なんて意味の分からない思考のまま、人生初のギャグパート修正による致命傷の無効化に思いを馳せつつ、俺は今日、星になった。

第11話 大和の日々へ前編

この島国でかなりの国土を持つ国となつた大和には、幾つかの大きな社がある。

そのうち1つはこの国の一端を治める神である、八坂神奈子を祭る場所。

もう1つは、近年新しく領土となり、洩矢の国から守矢の地と名を改めた、洩矢諏訪子の神社。

片や太陽や天候などの陽を司り、方や生きとし生けるものの感情の、もつとも暗き陰を司る者。

その国の名の下には、有象無象の権力者や中々下級の神々。そして人間達と、僅かではあるが、妖怪が名を連ねている。

言葉で並び立てるだけならば、それは無敵の帝国と言い換えても間違いではないだろう。

そんな国に、こじんまりとした社が1つ、新たに建造されていた。何を祭っているのかも分からず、けれどもはや絶対的な存在とな

った二神の命令により、速やかに。

ある人物の希望もあり、とある温泉の付近に据えられたそれは、お世辞にも大きいとは言えないが瀟洒な作りが施されており、居住性を特化させた結果の機能美とも言える出来栄であることが窺えた。

そこに、幾人かの息遣いが聞こえてくる。

1、2、3……。全部で4人、と1匹。

うち3人は社の中にある、広間とも言えない小さな部屋の中央に位置しており、そこに、1人の人間——村の男が入ってきた。

格好はこの国の人間なら誰でも着ている、イグサ、ヤマブドウの蔓、樹皮などを編んで作られたものだ。

ただ、その入ってきた村人はおかしい。

言動や格好が、ではない。……いや、ある意味格好がおかしいのだが、そのおかしさが問題なのだ。

足が、無いのである。

右の膝から下。本来あるはずのものが欠けている。

足りない箇所を補うように松葉杖を不器用ながらも操り、3人の前に崩れ落ちるように座り込み、頭をたれた。

丁度、三対一の面接のような図式になったその場で、部屋を中心に構える村人は、額が床についてもなお頭を下げようとし、

「止めなさい」

部屋の横。村人から見て右側にいた人物によって静止の声が掛けられた。

青黒い袴のような着衣の下半身に、純白とは言えないものの、ぬめる様な光沢が見て取れる白を基調とした上半身の服。肩からは同じく白の外套を羽織り佇むその人は、八坂の神でも洩矢の神でもなく、彼女らに力を貸していると言われている、神でも人でも……まして妖怪でもない、正体不明の者——白い男。

頭を上げる村人。

それを何の事はなく見つめる二神。

村人の顔には脂汗が滲み、これから起こるであろう出来事に不安と期待が入り混じっているのだらう。

「なに、そう身を堅くする必要はない。すぐに終わるさ」

言つて、白い男は村人を見ながら目を細める。

……効果は、すぐに現れた。

「あつ、ああつ………！」

村人の口から、驚嘆と歓喜の言葉が漏れる。

それは失ったものが取り戻せた際に発せられる、感謝の言葉。

足が、生えている。

もしくは、戻ったといった方が正しいか。だが、男にとってはどちらでも良いことだ。

目の前にいるこの国の最高神の事など、対面してただけで畏怖で気絶してしまいそんな過去の自分を忘れたかのように、座っていた姿勢から足の感触を確かめ、恐る恐る立ち上がる。

指は動くか、感覚はあるか。筋力は、肌の色は、爪は。

1つ1つ目を皿の様にしながら確認し、足を軽く床に下ろす。

トントン、トントン。

何度も足を打ち付ける。

神々達は何も言わず、白い男もその様子を見守っていた。

そして、最後にしっかりと大地へ立つかのように足を床へと踏み込んだ村人は、再び膝を折り、頭を下げて、

「……………」

何か言おうと嗚咽のような声を漏らす、けれどそれは言葉にならずに出てこないでいた。

「これで終わった。さあ、帰れ。皆に無事を知らせてくるといい」

その言葉に突き動かされたのか、村人はふらふらと立ち上がると、しゃんと一礼をし、入ってきた場所から出て行った。

遠ざかる足音が聞こえ、入れ違いになるように1匹の大きな白狗が入ってくる。

通り過ぎる村人を横目で見ながら、その狗は白い男の横に座り、差し込んでくる夕日に目を細めた。

もう、日も暮れる。

これから朝までは、恐らくこの国の民は誰もこの場所に立ち入る事はないだろう。

夜の帳が近づき、虫達も騒ぎ出す。

そろそろ明かりが必要になる刻限だ。

暗闇が大地を侵食す

「さて、九十九。飲むか」

……………もう少し語りの脈絡なんかを考えて言葉を発してほしいです、神奈子さん。

「腕………無いと不便だな」

当然といえば当然な感想を溢す。

つぶやく様に言ったにも関わらず、一緒に温泉に入っていた勇丸は、目を細めながら同意の意思を送ってくれた。

良いですなあペット同伴の温泉。ペットじゃないが。

湯にやんわりと広がる勇丸の純白な毛を見ながら、のぼーっと今の状況を思い返す。

俺がぶっ飛ばされてから、幾日の月日が経ち、その間、一応の休養も兼ねて諏訪子さん御用達の温泉に再びお世話になっていたのだが、兎に角、不便なのだ。

バランスが悪い、無い感覚が気持ち悪い、幻痛は無いものの、どうも腕のある感覚で生活を送ろうとしてしまう、等々。

『じゃ、生やせば良いじゃん』と古今東西全ての者が思い、けれど諦めて来たそれを行うべく、俺はそれが可能なカードを思い描く。温泉に浸かりながら。

何とも罰当たりな感想な気がするが、それを咎める者はいないので意味はない。

（腕を生やすねえ……………『再生』？ ライフの回復？ ……………再生方面でやってみるか）

手ぬぐいを絞って頭に載せながら、脳内wikiを使い考える。

『再生』

かなり簡潔に述べるのなら、言葉の通り、腕や足が『再生するだけ』とも言える。

MTGの定義で説明すると難解になる為、やや緩めた噛み砕き方で説明すると、カードが破壊された場合、この再生が発動すると、受けたダメージ含む、そのカードの破壊効果を上書きし、無効にする。あくまで上書きである為、破壊されなかった事にはならない。

ちなみにルールに乗っ取りきとんと表記すると(MTG wiki 丸写し)、

- キーワード処理の1つ。パーマナント(場に出ている全てのカード)の破壊に対する置換効果を作るということを意味する。

- 呪文や能力の解決による効果の場合、「「パーマナント」を再生する」とは、「このターン、次に「パーマナント」が破壊される場合、代わりにそれから全てのダメージを取り除き、タップし、(戦闘に参加しているなら) 戦闘から取り除く」を意味する。次の破壊1回だけに対して有効。

- 常在型能力の効果の場合、「「パーマナント」を再生する」とは「「パーマナント」が破壊される場合、代わりにそれから全てのダメージを取り除き、タップし、(戦闘に参加しているなら) 戦闘から取り除く」を意味する。能力が有効である限り何回でも有効。

なんて壮大な説明になる。専門用語が乱れ飛び、文章だけだと何とも頭の痛くなりそうな解説である。

（再生カードかあ。あんまり多様してなかったからいまいち想像し
難いなあ）

再生能力は、元々カードに備わっている場合が多い。特に多いの
が体感的に緑、次点で黒、といったところか。

緑は植物や野生といった力強い生命力を。黒は不気味に蘇る闇の
力を意味しているのではないかと思われる。

ただ、これらの色には後天的に能力を付随させる事はコストが高
くなるのだ。

というのも、この手の能力はやはり継続して効果を発揮させたい
場合が多く、エンチャントの形をとっている場合が多い。

要約すると、

●継続して再生能力が欲しい↓エンチャント呪文↓平均使用コス

ト3〜4

● 1度だけ再生能力が欲しい↓インスタント呪文↓平均使用コスト1/2

といった具合になる。

前者は戦闘面でのクリーチャーの強化による生存率UP&攻撃力増加。後者は本来備わっていない能力を瞬間的に付与する事による『コンバット・トリック』に使えるのだ。

『コンバット・トリック』

戦闘を自分に有利に運ぶ目的で戦闘中に使用される呪文や能力のこと。奇襲の類だと思ってもらっていいだろう。

よって、呪文を継続させるだけでも体力を消費するこの世界のルールで当てはめるなら、エンチャント系は避け、インスタント呪文系を行使するべきか。

そして、その手の補正を与えてくれる代表格が『白』である。

ダメージを軽減し、ライフを回復させるといった、プレイヤーやクリーチャーの生存率を高める、防御面に優れたカードが多い。

先に述べた緑や黒が再生の代表格なのは間違いないのだが、そのどれもがコスト2以上のものばかりなのだ。

勿論例外はあるものの、それは今の状況下では制約があり、発動するか怪しいので除外する。

その中で今回の条件に合うものとなると、1つ該当するものがあった。

（頼む。効果発揮されてくれよー）

内心不安に押しつぶされそうになりながら、まだ選択肢はあるのだからと勇気をちよびつと振り絞り、選んだカードを実行する。

そのカードは『蘇生の印』。

白が1マナのインスタント呪文。効果は、対象のクリーチャー1体を再生する。というもの。

だいぶ前に、俺は自分がプレイヤーでもありクリーチャーでもあるのではないか、という仮説を立てた。

クリーチャーにしか効果のないカードを自身に使用した際に、変化が見受けられたからだ。

なので、今回も効くのではないかと思い、実行してみる。

これだめなら、次はライフ回復系かなと思いながら。

そしてそれは、瞬きをする間に終わってしまった。

光った？ と思った瞬間、俺の左手は元通り。

握って開いてを繰り返し、ぶんぶん振り回して見たり、お湯をすくって宙に放り投げることも、背中を搔くことも出来た。

もっとこう壮大な、『腕再生劇場！』って感じで効果が表れると思っただけに若干の戸惑いはあるものの。

きちんと生えてきてくれた左手に、胸の前で拳を握りこんで、目を瞑る。

ああ、腕がある。

たったそれだけのことなのに、どうしてこうも涙が溢れ、止まらないのか。

数日。たったそれだけで、このザマなのだ。

——ならば、と、俺が世話になっていた人達のことを思い出す。

諏訪大戦では、実質、死者は一人もいなかった。だが、俺が見た光景には、体の各所を失った、あるいは機能しなくなった者が、多数居た筈なのだ。

気を許した相手が悲しんでいる姿は見たくない。

よし、と一声。

勇丸と一緒に湯から上がる。

こちらから少し離れ体中の水を身震いで飛ばす勇丸を横目に、俺も木に掛けてあった衣類を着込む。

心身ともに回復した俺達は、身支度を整えながら、政務をこなしているであろう土着神の元へと向かった。

太陽が頂上に昇り、これから傾きかけるかなと言った刻限に、俺は諏訪子さんの住居に辿り着いた。

あの戦いの後もこれといって変化の無い社を見ながら、ちょっと嬉しい気持ちになりつつ中に入る。

何の理由だかは分からなかったが、諏訪子さんの社に訪れていた、体の一部の無い村人に協力してもらい、カードの効果が現れるのかどうかを実験した。

といっても、いきなり『治してしんぜよう』なんて真似は出来ない。

治ったのなら良いのだが、もし治らなかった場合は余計に落胆させかねないからだ。そんな希望を奪うような真似など、俺には無理。

なので諏訪子さんに事情を説明し、2人が謁見している間に、こっそりさりげなく忍者のように呪文を行使した。

辻斬りならぬ、辻回復。

右の手首から先が無かったその村人は対話の最中、突然の発光に驚き、それを確認しようとして、生えていた右拳に驚愕した。

何度も右拳の感触を確かめ、何かが決壊したかのように涙を流す。

その事に諏訪子さんも民の前だからと表情は威厳を保ちつつ、けれど目だけは驚きを隠せないように、大きく見開かれていた。

むせび泣きながら感謝する村人に、神様っぽい（神様です）対応をして、退室させる。

そんな出来事の影でガッツポーズをしている俺に近づき、凄い。良くやった。これで皆……等々。傷ついた者達が、五体満足に帰れる喜びを分かち合った。

それから三日。俺は休まず再生呪文を使いまくった。

1マナで再生出来る　蘇生の印　を筆頭に、それと類似したカードを片っ端から実行する。

この時に分かったのだが、俺の1日最大マナ保有量が1つだけだが増えていた。

これはありがたい、と喜びよりも先に、救いの手が広がった事への感謝が湧き上がる。

だが、1マナ再生カードは俺の知識の中では一枚だけ。それ以外だと2マナ以上かかってしまうものになり、1日に回復させられる人は3人しか出来ない計算であった。

これは不味い。時間が迫っている訳ではないのだが、俺の心情的

にこんな悠長な現状は許せなかった。

よって、個別ではなく全体に効果を及ぼすカードを考える。

なんでもっと早くその結論に辿り着かなかったのか疑問が尽きないが、とりあえず前進はしているのだし、と、次に生かす事にした。

初めは10人。

選んだカードは『活力の覆い』。

自軍全てのクリーチャーを再生する能力を持つ、2マナの緑カード。

この自軍、というのがどう機能するのか不明瞭なところはあったが、問題はなかった。

諏訪の社に集められた彼らは、瞬時にその効能に驚き、そして感謝する。

——これならいける。

五体満足になった村人達を見ながらそう思い、諏訪子さんをお願いして、四肢のどれかが欠けている者などの括り無く、外傷を負っている者全てを日数を分けて呼んでもらった。優先順位はあるが。

それからは、徐々に人数を増やしてもらった。

まずは10人。もう10人。さらに10人。まだまだいけるかと、一気に100人。

話を聞きつけた神奈子さんから、大和の民も見てほしいと言われ、承諾しながら日々を過ごす。

1000人以上を超えた辺りから大まかにすら数えるのを止めて、さらに数ヶ月。国中の怪我人が俺の元に押し寄せる事態になった。

最初の頃はこちらから各地へ向かうとしたのだが、どうも俺が思い立った時には皆こちらへ向かっている最中らしく、ここで待っていた方が早いと言われ、回復職に精を出す。

来る人来る人がお礼（貢物？）だと言って海山の幸を持ってきてくれたり、集まってきてくれた人の待機所としてなのか『いつそ社を建てろ』とか二神に言われて、俺の意思など無視して強引に建造されたり——温泉の近くが良いって要望だけは通った——そんな感じで1年くらい経ったか。

山が色づき、黄金色に田畑が輝き。

純白の化粧をした大地を眺め。

新たな生命の躍動を感じる緑と出会い。

天の存在を身を以って感じる熱を体感した。

世間じゃ俺は怪我や万病を治す神だと言われていたり、言霊を司る存在だと囁かれたり、百鬼夜行の主じゃないか、なんて噂も飛んでいたり、もう言いたい放題。俺はスイカ（何故か変換できない）じゃねえつつうの。

厨二ネームが跋扈^{はつこ}し始めたのはスルーして、温泉に入っては怪我人を治し、温泉に入っては妖怪を倒し、温泉に入っては村人達と交流を深めた。

今の俺の血にはきつと温泉が流れているんじゃないか、ってくらい入ってるな。……生前は別にそこまで好きじゃなかったんだがなあ。

そんなこんなで今日、神奈子さんと諏訪子さんが言っていた人数の最後の一人の治療が終わり、一区切りが付いた訳なのだが……。

「今日は何食べよっか？」

諏訪子さんあんたもか。

ずるずると神奈子さんに引きずられる俺を眺めながら、楽しそうに、そう切り出した。

ってか酒を飲むならご飯食べてからにして下さい、神奈子さん。

「そうですね……。しらす丼と……。白身魚の赤だし味噌汁なんてどうです？」

今更逃げられないと分かっているので、観念して返答してみる。

もつとも、本気で逃げたい訳ではなく、少し呆れているだけなのだけ。

「おお、しらすどんってのは聞いた事無いけど、なんだか興味が掻き立てられる名前だねえ」

期待して下さいな。とっても美味しいですから。

北陸の……何処だったか。信越？ 江ノ島辺りで有名だった筈だ。多分。

—— 兎に角、旨いんだからノープログラムってもんよ。

いい加減引きずられるのにも嫌気がさしたので、神奈子さんの腕をタップして放してもらおう。

諏訪子さんはニコニコ笑顔で、神奈子さんは柔らかに笑みを浮かべる。

それだけ見れば和む光景なのだろうが、その表情の裏には、食事と酒のつまみに対する期待があるのだと知っている俺にとっては、やや複雑な心境ではある。

ま、頼られるのは嬉しいですよ？ 理由はどうあれ、ね。超美人だし。

第12話 大和の日々へ中篇

湯気を立てるご飯に、生しらすをふんだんに盛り付ける。

小皿に醤油と生姜を取り分け、山葵も好み程度に追加で添えておく。

少し風味の強い赤味噌の出汁に、適度な大きさに切り揃えたタラの身を投入して、さつと味をくぐらせて。

箸休めとして大根と胡瓜と人参の3色浅漬けを用意したら、完成である。

「おお、このしらすという小魚が、いい塩梅に暖かなご飯と合うな」

「神奈子、こっちの味噌汁も美味しいよ。ちょっと味が濃い目だけど、しらす丼と一緒に食べると丁度いい感じで」

美味しそうに食べてくれる2人を見ながら、俺も一緒に箸をすめる。ポリポリかじる大根の浅漬けが、しらす丼や魚の赤出汁で鈍

った舌の感覚をクリアに戻す。

我ながら良い仕事してますねって言いたくなる様な出来栄に、思わず頬が緩む。ま、カードのおかげなんだが。

団欒のひと時を楽しむ大和一家、とでも言えるだろうか。

俺の目指していた光景の1つである。

何でこんな事になっているのかというと、事の始まりは、戦勝祝いだっただかの祭りの際に出された食事から始まった。

今までずっと空気を食べてきて、飽きの来ない能力によってこれといって不満もなかったのだが、あの味の無い団子やら焼き魚やら粟やら何やらを、基本塩味のみで食えというのが、現代生活だだ浸かりだった俺には拷問にも等しかった。

せめて味噌か醤油でもあればと思ったけれど、今は恐らく………
西暦2ゝ300年位か。

どちらの調味料も、後数百年は待たねば味わえないときた。

これは無理、と。

そう、祭りの最中に思った。

その祭りも終わり、勝手知ったるなんとやらと化した、諏訪子さんの社の一室で考える。

かといって自作出来る知識も無いし、この状況を甘んじていられる訳でもない。

ということで、MTGの出番と相成ったのであるが……、

（食べ物を出す効果を持ったカードなんてシラネエ）

カードゲームにそんな効果を持つカードなどある筈も無く、料理を知っていそうなカードキャラも思いつかないし、かといって手当たり次第に召喚する線は、時間も体力もマナも食う。

おまけに目標を達成するまで、一体いつまで掛かるのか不明と来た。

こりゃダメかななんて思って諦めようとした時、ふと、別の観点からカードを召喚してみてかどうか、という考えが浮かんた。

それが、『フレーバーテキスト』である。

『フレーバーテキスト』

MTGの雰囲気や世界観をあらわすために使われる文章を指す。ゲームのプレイやルールには関係しない、ルール・テキストでない文のこと。元はバニラクリーチャーという何の能力も持たないカードの能力欄を埋める為のもの。

ちなみに勇丸にもそれはあり、

『その獵犬は空気に鼻をひくつかせ、低いうなり声をあげた。武野御大將は忠実な勇丸を見下ろし、撫でて落ち着かせた。「兵を準備せよ。神が来るぞ。」』

という一文が記述されている。

この文の効果か否かは分らないが、勇丸は姿を隠していた神である諏訪子さんに気づけたのかもしれない。

思い出すのは、あるアーティファクト。

多分、公式の大会では一部を除き、1度として使われた事など無いであろうもの。

コスト2の、クリーチャー戦闘を若干サポートする程度の能力を有するそれは、フレイバーテキストに、こう記してある。

『旅の間、ジャンドールが毎日、鞍袋を開けるたび、そこには羊肉から、チーズやマルメロの実、ナツメヤシ、ワインまで、ありとあらゆる種類の、おいしく滋養に富んだ食料が詰まっていた。』

と。

その名は『ジャンドールの鞍袋』。

ジャンドールというのは誰の事だか分からないが、馬に備え付けられる機能を伴っている、食べ物関係で特化した道具なのだろう。某青タヌキの秘密道具を思い出す。

召喚したそれは、まさしく袋。

所々に金銀宝石で彩りが鮮やかになっているそれは、サッカーボール2〜3個なら収納できそうな大きさだ。

（すげー、こんなに貴金属が付いてる袋とか初めて見た）

若干の疲れを感じながら持ってみると、思ったより重く、あんまり長時間の持ち運びは出来ないなと考える。売ったら高いだろうなあ…………。

で、早速能力を行使。多分カードを使用する要領で脳内に描けば袋の中に現れるのかな？　と思って試してみる時——ふと、気になる疑問を解決する為、脳内にある食べ物を思い浮かべる。

それはラーメン。

完成された食品が出るのか、その一段階手前の食材が出現するのか、カード絵を見る限りだと後者な印象が強く、不安に思ったからだ。

チーズやワインといった、ある意味完成された食品は出てくるらしいが、これが汁物で様々な工程を踏んだ食品だった場合はどうだろうか。

まさか器の無い状態でびちゃびちゃになって出現することは無い

だろうな、とビビりながら袋を確認すると、そこには湯気を立てる
オーソドックスな、ザ・ラーメンとも言わんばかりのものが収ま
っていた。

ただし、あの卍の連なったような模様が特徴的な器に入った、4
00〜600円で食べられそうな、あれではない。

スーパーカップと呼ばれるカップ麺のしょうゆ味が、今3分経ち
ました的に湯を注がれた状態で収められており、嗅覚を刺激する。
カップヌードルでないのはご愛嬌。

久しく嗅いでいなかったあの独特な醤油ベースの中華麺に舌鼓を
打ちながら、胃へとかつ込む。

手元に着など無かったので必然と流し込む形になったが、今の俺
はそんなことなど気にならない。

ああ、この安っぽい味が堪らない。

口内を軽く火傷させながら、まだ半分ほど手元に残っているカッ
プメンをマジマジと見つめる。

どう見ても俺の記憶にある、あれそのもの。

水を通さない特殊な容器から、プリントされている鮮明な絵柄ま
で、記憶の中のそれ、そのまま。

何となく予想を立てながら、次々に頭の中で思い描いた食品類を
取り出し始める。

日本酒——豚の丸焼き——うまい棒。

日本酒は中部地方地の大吟醸『究極の花垣』。

一般的に酒瓶と呼ばれる、無色透明の頑丈な容器に入っている。

豚の丸焼きはアニメフォオではなく、中華街などで見られるあれが皿でドンと出てきて、うまい棒は考えていた味が全てパッケージごと出てきた。

……あれだ。この袋、食べ物に関しては一部を除き、制限が無いっぽい。そしてその一部というのが、どうにも空想というか二次系の代物のようで。

ドラゴンボールの仙豆や、蟲師の光酒、ハリーポッターのビーンズなど、色々後から試してみたのだが、欠片すら出る気配は無かった。残念。——光酒、飲んでみたかったなあ。（追伸・仙豆、ハリーポッターの百味ビーンズは商品化されていますが、現状はスル——）

そんな訳で、出した料理や酒を調べてみると、酒は味や香りは全く問題なく。豚の丸焼きは流石に袋には収まりきらなかったようで、切り分けしたような感じで大皿に盛られて出てきた。駄菓子系に関しても味も形もしっかりとしている。

この袋の口径が食材の大きさの限界なのだと思いながら、久々のチート能力に内心で歓喜の声を上げる、俺。

しかし、やはりというか、能力を使えば使いほど疲労が溜まるようで、何百品も出してたんじゃへとへとになりそうである。それで

も大パーティー1回くらいならいけそうな感覚なのだけんど。

で、わいわいと自己満足的に酒やら食べ物をもぐと2人で楽しんでいたら、匂いに釣られて諏訪子さんがやってきて、あれよあれよという間に食事担当に。

とはいってもマナも体力も地味に使うので、週に1回だけって制約を飲んでもらった。

ただ1つ気になったのが、アーティファクトもそうだが、クリーチャー以外の呪文を維持する体力の度合いが少なく感じたのだ。

コスト2のジャンドールの鞍袋を維持し続けているのが、同じくコスト2のクリーチャーに比べるとあまり苦にはなっていないので、体力が増えたのかそういった制約なのか悩むところではある。

その一件以来、気分が乗らないとき以外は、俺が一から食材を捌いたりして料理やらつまみを提供している。その方が、料理を作る楽しみがあるからね。

何しろ食材は全て一級品を新鮮なうちに用意出来るのだ。いくら俺が単純な料理しか作った事がない独男とはいえ、不味くなる筈がなかった。

食事の後半になり、デザートにと用意していた苺大福とほうじ茶を用意する。

やっぱり苺大福は香川の夢菓房でしょ！……………と想ったり思わなかったりしながら、2人の前に差し出した。

諏訪子さんは目を輝かせて……………というか“キラキラ”とか効果音が聞こえそうなくらい光っていらっしやる。目から星がこぼれそうです。

一方の神奈子さんも嬉しそうな表情をするのだが、諏訪子さんに比べれば反応が薄い。

……………そうだった。神奈子さんはこっちよりも別のものが好きなんだった。

ポンと。片手をもう片手に打ち付ける。

隅に置いてあったジャン袋を引き寄せて、取り出したのは、またも大福。

けれど中身は別物で、今度は苺ではなく塩大福。

巢鴨の通りにある、塩大福といったらこのお店、的なポジションになる『みずも』のものを前に置く。

諏訪子さん程ではないものの、何処かその表情が柔らかくなったのを確認しながら、俺は自分用の豆大福（そこらのスーパーで売っ

てそんな奴）を確保する。

この時代じゃあ、ちゃんとした甘味なんて数が限られている上に、どれも味が微妙（俺の感覚で）だと来たもんだから、この手の食品は受けが良い。

美味しそうに頬張る諏訪子さんと、一口一口吟味するように、けれど感じる幸せは隠し切れずにこぼれてしまっている神奈子さんを見ながら、そういえば、と前々から思っていた疑問を口にした。

ちよつと込み入った事だから聞きづらかったんだが、ある程度は親密になったし、こういったまったりの場なら尋ねても良いだろ。

「神奈子さん神奈子さん」

「ん？ どうした」

「その、ですね。前々から気になっていたんですが……答え難かったら、それはそれで構わないんで、教えていただければ」

「ほう、私に何を聞きたい。……いや、私“の”何を聞きたいんだ？」

いつも浮かべている不敵な笑み、というものが現れた。

何となく聞く内容が想像ついてんだろうなあ。

その辺の察しの良さは、流石神様、とでも言うべきか。

恐らく嫌な事を聞く事に対して、ものによっては答えてやる、的な気分になったのだろう。

「簡単に言いますと、ここに侵略を仕掛けてきた経緯が聞きたいんですよ。今でこそ、こうして3人で大福食べる仲ですが、あんまりその手の過去の話とか知らないもんで」

直接本人の口からは、ですがね。

今更語るまでも無い事実として、俺は転生を行っている。

知識として仕入れた東方プロジェクトの設定は多少なりとも目を通しているのだが、神奈子さんの侵略経緯までは知らない。というか見ていない。

諏訪大戦が起こる前に知っていたのならこの戦いを止められたのかもしれないが、全てが終わった今となつては、ただ、俺の興味を満たすだけのものに過ぎない。

「何だそんな事が」

「またもう、あっさりと……。もう少し重めに言っして下さいよ。」

そのせいで俺や諏訪子さんは侵略されちゃったんですから」

「それで何が変わる。せいぜいお前の気持ちくらいだろう？　ならば問題あるまい」

「神奈子って、九十九に対してはいつも等閑なおだりだよ。他の配下達には、それなりに優しいのに」

「私を神として見ているからな。それに答えるのが我々だろう。それは、お前にも言えるのではないか？　諏訪子」

「そりゃそーだ。九十九ってば私達に対しても………もっとうっ、崇め奉るって気概を持って接しても良いんじゃない？」

げ、よく分からんうちに俺が説教くらっとる。

「そういう関係になるくらいなら、俺は逃げ出しますよ。あんまり格式ばった関係ってのは好きじゃないんです。……………もう職場復帰とか出来んな（ボソッ）」

自傷気味に呟いた言葉に『職場？』と首を傾げるお二方。

すみません、転生前の事なんで流して下さい。

「それより、さっきの話の続き、聞かせて下さいよ」

「お前は物事をはぐらかすのが好きだな。いつかしっぺ返しを受けるぞ」

「うつ……………すみません」

強引にやり過ぎちゃいけませんって事か。

しかし、今の俺にはそうでもしないとちゃんとした言い訳なんて思いつかんのだから、勘弁してほしいッス。

「自覚はしておけ。いつかそれが行動に変わる。……………さて、この国に攻め入る切欠となった話だった」

です。

「とつても、先にも言ったとおり、大した理由はない。——国を従える者とは、国の発展を考え、人材、資材、国土を確保するよう勤め上げるものだ」

「えー、より豊かになる為に攻め入った、と？」

「むしろ、それ以外で他国に侵攻する理由が思いつかんぞ。あんなもの、国が発展する行為の1つでなければ、誰がするものか」

前にチラッとバトルジャンキーな面を覗かせていたけれど、やっぱりその辺の分別はしっかりあるようだ。

国の指導者がその性格を前面に押し出すようなら、それこそ民がついて来ず、神などではなく妖怪として名を轟かせるようになるだろう。

「それは、まあ何と言うか……これから続けていくんですか？
戦」

「当たり前だ。広い国土とはそれだけで選択肢が増える。当然問題も増えるが、そんなものは些細なものだ。豊かな土壌が国を発展させ、それが強い国を生み、安心して暮らせる場所を作り出す。それは民達が私に従う前提条件。そうでなければ、誰か進んで戦場で命を捧げるものか」

ものの本では、戦争は最も儲かる事象の1つだと書いてあった。

儲かる、という事は、金だけではない。軍事、行政、教育など、様々な分野の躍進も行ってくれる。

一時的には国としての成長率止まる、もしくは伸び悩んでしまうが、戦争が終わった後の……外敵が居なくなり、軍事方面に割く資金を他の分野に回せるようになるだけでも、大分変わるものらしいのだ。

「それは分かりますが……」

「他により良い手段があるのなら、そうしよう。だが現状でそれ以上、国の発展を助長する手段を私は知らない。これを否定したいのであれば、代案を示せ」

そんなん分かったら俺は億万長者どころか世界一の大富豪だわさ！

何だろなあ、国を戦争より豊かに出来る方法なんて……。

既存の知識や技術じゃ思いつかないし、かといってカード方面に頼るつてのは、俺がずっと居るならまだしも、あんまり頂けないよなあ。

「そう渋い顔をするな。私とて、現状のままで良い、と思っている訳ではない。年に1度、出雲に話し合いの場を設け、それによって他の案を模索しておるわ」

『もっとも、良い代案など近年はとんと出てこないが』

そう言つて締め括る神奈子さんに追隨するように、諏訪子さんが横から声を掛けて来た。

持つていたお茶碗を置いて口を拭う姿が愛らしい。

「そつえば、もうそろそろじゃない？ 出雲に出向くのつて」

「ん？ 出雲つて、神様の会議がある、あの？」

何の名称だったか忘れたが、旧暦の10月10日には、年に1度。日本中から八百万の神々が集まり、1週間程、自国の行く末なんかを話し合う会合が行われていた筈だ。

それに赴く、と言っているのだらうと当たりをつけて、尋ねてみた。

「あれ？ 九十九つて知らなかったっけ？」

「ええ、そついった祭事があるというのは知っていましたが。……
…神奈子さんは兎も角、諏訪子さんは去年もその前も行つてません

でしたよね？」

「私は代わりの者を向かわせていたからね。そもそも土着神っていうのは、その土地からあまり出たがらない性分なのさ。自身の力が弱まるっていうのもあるんだけど、土地自体の力も弱体化してしまうのが大きい。だから、滅多な事では、ね。私もそうだけど、他の土着神達も、自分達の使いを寄越すだけかな」

そういえば、諏訪子さんはその土地の神なんだった。

というか日本の神って殆どがそれに部類されるんじゃないだろうか。

って事は、その祭事って殆どが代理出席？ ううん、ちょっと残念な気分。

「ただ、今年は流石に私達も出なきゃダメかなあ。戦の詳細を伝えないと、下手をすれば、報告するまでずっと戦時中、ってなる可能性もあるし」

「私もあまり動きたくないが、仕方がない。幸いにして、国の融合はあまり支障が無かったからな。諏訪子のお陰だ。感謝するぞ」

「神奈子がこっちの死者を勇丸以外誰も出さなかったのが大きいからね。ホント、戦で戦死者がほぼゼロってどうなのさ」

「ゆくゆくは我が国の一端を担う者達を、出来うる限り存命させたいと思うのは当然だ」

情けは人の為ならず、ってか。

それを地で行える神奈子さんマジばねえッス。

しかし、出雲かぁ。

1度で良いから見てみたいよなあ、神々の集会。

「出雲の会合って、やっぱり名立たる神々も出席されるんですよね？」

「そうだ。イザナキ、イザナミは勿論、ツクヨミやスサノオなどが常連だな。アマテラスを筆頭に、他の皆がそれぞれ報告やら相談事を持ち込む、といった事が、神在祭の概要だな」

おお、1度は耳にした事のある神様の名前がオンパレードで出てきましたよ。

話を聞くに、太陽神のアマテラスが司会進行役で、ツクヨミやらが副司会。イザナキ、イザナミは完全中立のご意見番、といった立場のようだ。

良いなあ、ちょっと見学させてくれんなあ。

日本に生まれたからにやあ、その国の神話の光景に興味が無い筈が無い！

といつても前々から興味があつた訳ではなく、見る機会があるのなら見たい、という野次馬根性丸出しな理由なのだけれど。

……ん？ イザナキとかつて神様の部類なのか？ まあいいか。

「良いですねえ。ちょっと見れるものなら見てみたいです」

もしかしたらご同行出来るかなあー？ なんて暗に期待しながら二神に目をやると、諏訪子さんは『どうだろねえ』的な表情を浮かべ、神奈子さんに至っては至極真面目な顔で考え込んでしまった。

流石に、ただの人間がお偉いさんが集う場を覗き見るような真似は不味いか。

神様の御付の人で、なんて路線なら“もしかして”と思っただけだなあ。

「……お前は出雲に行った事が無いのか？」

「？　ありませんけど……………」

不意に、神奈子さんがそう尋ねてきた。

転生前ですら行った事無いですからね。

日本人としては1度くらいは出雲大社とか見てみたかったです
が…………、て、あ。

「神奈子さん、前にも言いましたけど、俺、神様じゃありませんか
らね？　その辺を考えても無意味ですよ」

どうもこの神様、前々から俺の事をどこぞの神だと勘繰っている
節があつて、その度に色々と微妙なフェイクや誘導尋問っぽい言葉
攻め…………？　をされているのだが、本当にそいつた裏事情なぞ
無いので無駄なのですよ。

「今、そう判断した所だ。なに、いずれ外の神とやらにでも、お前
の事を聞くとしよう」

って今度は外国な神様路線ですか。

外国って言うよりは、地球外な神という方向性なら合ってるのかもしれないなあ。

あのカードとかこのカードとか。

神系列で考えるのなら基本はクトゥルフ……………だけじゃないか。

変なところで色々な体系が出てきてるから、何処、と当てはめる事が出来んわ。

「……………だが、我らについて来れば問題無かるう。出雲に集まった神々は、大概そこに控えている従者達で身の回りの世話をさせているが、先にも言った名立たる上位の神達は、専属の者達を連れて来ているからな。それに習い、お前を連れて行く事も可能だろう」

「ああー、そういえば、そういった事もあったねえ。私は殆ど代理に行かせていたから、すっかり忘れていたよ」

「諏訪子……………まには顔を出すようにしておけ。いずれ、お前の神気すら忘れてしまう輩が出てくるかもしれないぞ」

「無い無い。負の感情に私は潜むからね。憎しみの裏に洩矢あり、つてな具合さ。人間が居る限り、私（憎悪）を忘れるという事は無いよ」

「ふむ、想いに宿る神は、そういったところが羨ましいな」

互いの良いところを再認識しているお二人だが、こっちは、ついていけるかもしれない、という選択肢にドキドキが止まらない！
……とまではいかないけれど、内心で期待を膨らませる。

御付の従者路線がまかり通りそうだぜ！

まあ、色んなトラブルもありそうだが……言っちゃ悪いが、2000年後には全ての神は表舞台から退場している。

最悪、それまで逃げ切れれば良いのだし、この出雲の集会在期間限定モノだと来たら、見ない訳にはいかないだろう。

もし行く事になったのなら、何か、その手のトラブルをやり過ごす事の出来るカードを考えておくべきだろう。

——そのまま話は続き、その延長線上にあった、この地を統べている神々の話を聞いた。

北から南。西へ東へ行ったり来たり。

あちらの神は信仰が強い、そちらの神は無病息災に秀でている、

等々。

全てが新鮮で、どれも興味をかきたれられる物語ばかり。

今まで御伽噺としてしか知らなかった知識を、体験談として聞く機会があるというのは、これまでに無かった面白さの発見である。

気づけば日も完全に沈んだ頃合。

ぐいぐいと神奈子さんや諏訪子さんの話に引き込まれ、あっという間に時間は過ぎていった。

第13話 大和の日々〈後編〉

「九十九、ちょっと北の村まで行って来てよ」

話も一段落つき、酒のつまみにと、ホツケやらきゅうり味噌やら摘みながら齧っていたら、諏訪子さんが唐突に、そう切り出した。

「……………良いですけど。確かそっちって海側に面したところですよ？ めっちゃ遠いじゃないですか。ってかその台詞、前にも聞いた」

「いやぁ良かった。私も神奈子も何かと忙しいからね。そう言ってもらえて助かるよ」

「うわひでえ。強引に押し込まれた。」

「お前が治した者達が、感謝をしたいと宴を開くそうだな」

「神奈子と私が中央の行政を取りまとめるから、気にせず行って来ていいよ」

……まあいいか。もう諏訪関係での血みどろフラグは点在していない筈なのだ。今は何も考えずに行動したって、問題はないだろう。

「はあ。相変わらず唐突というか何というか……。でも、俺の為について言ってくれるのなら、それに応えないわけにはいかないですね」

とか何とか軽いツンデレを披露しながらも、内心は久々の遠出に胸が高鳴っていた。

海かあ。定期的に海水浴が出来ないのが残念だが、久しぶりに、あの独特の磯の香りを嗅ぎたくなる。

「そんな訳で、ね。九十九」

諏訪子さんが俺を呼ぶ。

ん？ と首をかしげ、2人の顔を見る。

うわ、目が輝いていますよお二方。

「お前が帰ってくるまでの間、私達は二人だけで晩酌をしなきゃいけない。民達と宴会するのもいいけど、それでも頻繁には出来ないからね。だから――」

OKよく分かった。

「明日中におつまみやお酒類を出しておきます」

やったー、とハイタッチする2人。

古代日本に現存する神々のハイタッチ。レアなもの見れたな。

神奈子さんも、ゆっくりではあるが、表情が柔らかくなってきている。

段々と神奈子さんの態度というか行動が軟化しているようで、後ヶ月もすれば、原作基準のフランクな姉御口調になってくれそうだ。

その時になったら修行にでも付き合ってもらおう。うん。

「私は辛口の酒がいい。海産のものと良くあうからな」

「こっちは和菓子を多めに残しておいてほしいな。いちご大福、だっけ？ あれが特に美味しかった」

酒に大福か。太るぞ。

なんて前に言ってみたが、『神様は太らないもんね』って言われた。悔しい。

荷物なし、衣類よし、勇丸よし。

その他諸々異常なし。

空は快晴。絶好の旅行日和。

「それじゃあ行きますかねっと」

神奈子さんも諏訪子さんも、既にそれぞれの役職をこなしている。

妖怪討伐ではないので村人の見送りもなく、この秘湯『諏訪』（勝手に命名）付近には人っ子一人居ない。元が諏訪子さん用の聖地だからってのもあるが。

「んじゃ勇丸。ちょっと供給絶つね」

頷く忠犬を脳内カードに還しながら、目的地までの移動用のカードを考える。

流石に地上に行くには馬であっても幾日も掛かりそうなので、空を飛ぶことにしたのだ。

選ぶカードは3種類。どれも飛行という目的は達成出来るが、そ

のプロセスがいずれも異なっていた。

1つ目のカード『羽ばたき飛行機械』

コストがゼロという、アーティファクト・クリーチャーの部類に当てはまるカード。攻撃能力0のタフネスが2である、0/2の『飛行』能力を有するもの。0マナクリーチャーカードの代表格。

『飛行』

数ある『回避能力』の中でも、最も一般的なもの。そのままの意味だと考えてもらっていい。飛行を持たないクリーチャーは、飛行を持つクリーチャーの進行を防ぐ事は出来ない。一部例外がある。

『回避能力』

クリーチャーが攻撃する際に、相手のクリーチャーによって防がれてしまう事に対して何らかの制約を設けて回避する能力のこと。MTGに限らず、トレーディングカードゲームでは相手にHP、またはライフが設定されており、それをゼロにすることが勝利条件の1つとなっている。よって、相手のクリーチャーを突破する能力が

あるクリーチャーは、それなりに重宝される。

2つ目のカード『飛行』

コスト1の能力である飛行を後天的に永続効果としてクリーチャーへと付与する、青のエンチャント呪文。

3つ目のカード『ジャンプ』

同じくコスト1の飛行能力を一時的に付与する、青のインスタント呪文。コンバットトリック目的で使用する。

この3つの中で、1番目は飛行能力のあるクリーチャーに目的地まで運んでもらうもの。これはこれで楽しそうなのだが、自分の力で飛んでみたいなと思ったので、一瞬にして却下。

2つ目は、自分に飛行能力を付与するもの。これが最も軽く、エンチャントによる永続性も期待出来るので、恐らく飛行能力万歳な東方世界では主力になるのではないかと思う。

だが、だ。3つ目のカードであるジャンプ。これもジャンプと名がついてはいるが、効果は飛行能力を与えるもの。

どちらも受ける恩恵は一緒だが、さて。

「とりあえず、一番不確定な奴を試して……あれ、諏訪子さん？」

視界に入る、金髪の小柄な神様が1人。

「良かった。まだ行ってなかった」

息を弾ませながら、俺へと近づいてきた。

「何かありましたか？」

「いいや、ただの見送り。今回は距離があるからね。しばらく会えなくなるし、こっちの時間が少し空いたから、丁度良いかかって来てみたよ」

「ははは、それは嬉しいですね。実を言うと、ちょっと寂しかったところですよ」

今更隠し事やカッコつけをする仲でもないので、思ったままに心中を吐露する。

いや、カッコつけたい場面では真似事くらいはやりますけどね？

そのまま、他愛のない会話をした。

思えば出会ってこの方、2人だけでの会話なんて数えるほどしかなかった。大体は勇丸か、それ以外では村の人々が側に居たし。

生い茂る木々には未だに黄色の葉がついていて、落ちる木の葉は諏訪子さんの姿と相まって、まるで1枚の絵のようだ。

——いかん、2人だけつてのを意識したせいで、変に意識してしまう。

悲しいかな、こと女性に対する接し方は経験値ゼロ。

なにせ俺は生まれてこの方、この手の出来事からは完全に疎遠であつたから、どうもうまく意識をまとめる事が出来ない。

今までそういった目線で見たことは無かつたけれど、容姿はあれだが、間違いなく全国で5本の指に入るであろう美人なのだ。幼と付くが。———そういや東方キャラってそんな奴らばかりだな。美人枠の入る指の数を増やしておこう。うん。

「どうしたの？ 九十九。目が泳いでるよ」

わあお態度にまで表れてましたか。

やめてー、そんな綺麗な瞳でみつめないでー。俺のライフは……
…まだあるな。

ではなく。

これ立場逆じゃね？ 普通、こついう目線を逸らす的な行為は女の子側がするもんじゃね？

そうやって、内心でおちゃらけてみるものの事態は進展せず、むしろ見つめられる諏訪子さんの目線でゴリゴリとライフポイントが削られていく。

ちよつともう耐えられそうにないと思い、強引に、もう旅立とうとすると、

「——あれから、もう2年くらいかな」

なんて、諏訪子さんが言い始めた。

良かった。いや助かった。相手から話題を提供してくれるのなら、今はそれに飛びつくしかない。

切羽詰まった思考とは別に、急にしつとりとした会話になったことに若干戸惑うけれど。

秋風がやや肌寒く感じる。もうすぐ冬がやってくるであろうことが分かる。

だから……、だからこんな会話もしようがないのかもしれない。

「……………そう、ですね。長かったような短かったような。ちょっと色々あり過ぎて、正直もうお腹いっぱいですよ」

諏訪大戦が脳裏に浮かぶ。

大切なものが傷つき、時に失う場など御免こうむるというものだ。

「私だつてごめんだよ。ただ、そこに人の本質が若干はあるからね。完全に無縁には、人である限りならないだろうさ」

……たはー。まさにその通り。頬をポリポリと掻きながら苦笑
いする。

1500年以上先から来た俺の時代ですら、それは変わっていない。
い。

何だか『餓鬼は餓鬼のままさ』って感じで皮肉られた印象を受けるが、事実その通りだから苦笑するしかなかった。

「——人の生涯は短い。私達神からすれば、それこそ瞬く間に、人も世も移り変わる。いつも私だけがそこに立っていて、皆、私を抜いて去っていく」

諏訪子さんが、ぽつりと、そう呟いた。

「耐えられないってことはないんだけどね。時折、心に穴が開くん

だ」

分かり切った——けれど避けられない思いを胸に、この神様は皆の為にと過ごしてきた。

それでも人間と共に歩むことを止めず、みんなが幸せなら、とがんばり続ける彼女に、俺は何がしてやれただろう。

妖怪退治？ 技術提供

違う違う。それはどれも民に対しての尽力であって、彼女本人を手助けするものではない。

愚痴は今まで色々と聞いてきた。

ただ、今回の話は愚痴というより、自身の行いに対して、揺らいでいる心を静めようとしているかのようで。

急に小さく見えるようになった姿に、胸を締め付けられる。

表面上は、いつもの諏訪子さんだ。

少し湿った会話ではあるものの、ニコニコと笑顔を絶やさない土着神。

しかし、俺には、今にも泣き崩れてしまつのではないかと思えてくる印象を受けた。

足が前に出る。

何も言わず、諏訪子さんの方へ。

思い違いであつたのなら良い。その時は、俺が馬鹿をやつただけの笑い話になる。

「……………あ」

ふわり、と。

まるで羽のような、小さな神様を抱きしめる。

この時を失つたら、恐らく俺は、一生諏訪子さんの心には踏み込めない気がした。

寒さからか、それとも他の要因からか。彼女の体は、か細く震えている。

身長差から俺の腹部へと諏訪子さんの顔が当たり、表情が分からなくなったが、否定の意思は感じ取れない。

成すがままにされて、一方的な抱擁が続く。

互いに何も語らず、動かず。

彼女の熱が体で感じられるようになって、俺は切り出した。

「……………どうにか、したいですか？」

「……………え？」

疑問の声上がる。

体を少し離し、諏訪子さんは顔を上へと向けた。

「心に穴が開くのは、どうしようもありません。その穴——スキマを埋める事は、失ったスキマの欠片にしか出来ない。他のものでは、埋まったように見えるだけで、実際は空いたままだと思います」

小さい頃、犬を飼っていた。

一緒に遊んで、一緒に寝て、一緒に食べて、一緒に過ごして来た犬。

そんな犬も、俺が小学校に上がる頃には年老いて動く事も間々な

らず、その年の暮れ。そいつは旅立っていった。

悲しかった。

何が悲しかったのかも分からないくらい悲しかった。

心にぽっかりと空いた、穴。

埋まらず、無視できず、漠然とそこにあるその穴は、俺の心の中に影を落としていく。

けれど、それも時間と共に解決していった。

何かが切欠になった訳じゃない。

ただ、両親が夜寝る俺をずっと抱き続け、友人達がいつもと変わらず俺と遊ぼうと言い続けてくれた。

それだけで俺の顔からは、段々と笑顔がこぼれるようになっていった。

忘れた、という事ではない。

少し大きさに言うのなら、世界が広がったのだ。

見続けていた闇は視野が広がる度に段々と小さくなり、視界に入ってもただの点に見える程に気になくなって。あれほど冷たかった心は他の幸せで温かくなり、凍てついて動けなかった体を動かすま

では回復させる。

愚直に言ってしまうのなら、他の幸せで誤魔化したのだろう。

けれど、決して悪いことではないはずだ。

これが悪なのだとしたら、正義というものは、なんて胸糞悪くなるものなのだろう。

失ったものに嘆き続け、それでも取り戻せないスキマに心を締め付けられながら、時にそれに耐え切れなくなり、一生を終える人生など、少なくとも俺は御免である。

だから。

「俺が、居ますから」

返ってくる言葉はない。

「誰も彼もが居なくなっても、例え地上の生物全てが死に絶えたとしても。——俺だけは、諏訪子さんの側に居ますから」

俺の服の裾。そこに、彼女の手が控えめにそれを摘む。

「それに、最近じゃあ神奈子さんも居るじゃないですか。勇丸も居ますし、決して1人だけじゃありません。後、寿命がめっちゃくちゃ長い生き物なんて結構居るんですよ？」

蓬萊人とか月の民とか天人とか。

言ってて段々と恥ずかしくなってきたので、誤魔化すように、他にもこの思いを共有してくれそうな者達の存在を思い浮かべる。

“ははは”と笑いを振りまいてみるも諏訪子さんからの反応はなく、ちよっとくさ過ぎる台詞を思い返しては『あれはねえだろ』『そこは違うでしょ』の単語が脳内でフォークダンスを踊っていらつしやる。死にたい。

「……………じゃあ、さ」

不意に、声が掛かる。

別に涙声という訳でもなさそうで、少なくとも悲しい気持ちにはなっていないようだ。

「九十九、ちょっとこっち見て」

顔を向けると、こちらを真っ直ぐ見つめる2つの眼。

「もっと腰落として」

言われたとおりに姿勢を下げる。

………はっ！ ま、まさかこれは！？

「そのまま動かないでね」

来るのか？ 来るのか！？

思わず目を瞑り、唇を突き出す。

もはや言わずもがな。この手の展開の後は――

こっん。そんな柔らかい音が、俺の額から聞こえる。

――ん？　こっん？　ちゅっ、じゃなくて？

「……………何してるんですか？　諏訪子さん」

「いいから少し動かないで」

柔らかい口調なれど、思ったより真剣な物言いに、何も言えずに沈黙する。

諏訪子さんが、額を俺の額に当てている。

おかしい――この行為は風邪を拗らせた時にするお約束イベントだったのではないか。

いやいや、そもそも今の流れは、もっと別の行為をするための伏線であつた筈だが……………。

今の俺は体調も頗る良好。むしろ痛いぐらいの心臓音に頭がどうにかなりそうなくらいだ。

——目を閉じるタイミングを失ったせいで、俺の視界は諏訪子さんと埋まっている。

光のような白い肌に、綺麗に整った眉毛。

閉じられた目と唇が妙に艶っぽく見えて仕方ない。

一瞬ロリコンではないかと思ってしまうが、それでも良いのではないかと思えてきた。

小さな子が好きなのではない。たまたま好きになった子が小さかっただけのこと。

（うう、東方キャラって美人揃いだから、そういった目線で見たら惚れるの分かってたのになあ）

村の皆は十人十色な顔だったのだが、やはりメインなお方は出来が違うと申しますか……。これ以上は村人達に失礼なので自重。

（あー……美人だなあ。可愛いなあ。このまま言ってしまいたいなあ、付き合ってくださいって）

デートして下さいってコクってみるか？ 俺、この任務が終わったら……。

無理だ。

フラグ云々の前に、心臓が先に過労で死ぬ。

「ん、もういいよ。ありがとう」

ふと、諏訪子さんが俺から離れる。

何だかよく分からないが、用件は済んだらしい。

ハグとかだったら『心の充填』とかの理由で分かるのだが、デコ同士くっ付けあっていただけってのはなあ……。それはそれで気持ちよかったが。

だって諏訪子さんめっちゃ良い匂いやもん！

なにこれ？ どうやったらそんな匂いになるの？ 結構な割合で

この神様の側に居たが、香料とか何も付けてないよね確か。

「一体何だったんですか？」

「ん」。帰って来てからの秘密。今言っただんじゃ面白くないしね」

少しばかりテンションが高い。

話す言葉の節々には明るい笑みがこぼれており、こちらまで楽しくなりそうな雰囲気になる。

何だろう。何かの加護でもしてくれたんだろうか。

体にこれといった変化は見られないが、いざとなったら発動するタイプなんだろうか。

しかし、なんにしても、今一步のところで押しに行けない自分が恨めしい。

人生初のそれらしい場面だったのに。勘違いかもしれないが。

……でも、まあ。諏訪子さんの気分が晴れたようで良かった。

旅立つ時には、やっぱり笑顔で送り、送られてほしいと思うから。

「そう言われちゃ仕方ないですねえ。ん、っと。それじゃあ行ってきますわ」

「はいはい。お土産は何でも良いからね」

はいはい、お土産希望っと。

「持てるだけ持ってきますよ」

「俺が疲れない程度で？」

「そういうことです」

ははは。よく分かっていらっしやる。

——よし。ではきりが良くなったところで、早速ぶっ飛ぶとしますかね。

選んだカードは『ジャンプ』

カードを使用した時点で飛ぶのか、俺の意思で飛ぶのかは不明だが、ジャンプなんて名なのだから、きつとぴょんぴょんホップする呪文なのではないかと予測して、唱えたと同時に。

不意に、頬に暖かいものが触れた。

（は……………？）

一瞬見えた、金色の髪。

とととと俺から離れていく小さな女の子。

その顔はとても楽しそうに、嬉しそうに。この世にある幸福全てを噛み締めているかのような。

「九十九がずっと居てくれるんでしょ？　だったら少しくらいは発言に責任を取ってもらわないと」

ね？　と可愛らしく言い放つ神様に、俺の頭は真っ白になった。

頬が温かい？　柔らかい？

え？ なに？ あ、ああ……これは……ああ……あれか。

——俺、転生して良かった。

父さん、母さん。親不孝な俺をお許し下さい。

俺は今——青春してます。

「——責任！ 取らせていただきます！！」

懇親の思いを込めて。

諏訪子さんに近づく為、一歩踏み出し、

「……………は？」

飛んだ。

視界に広がるのは、自然が支配する、日のいずる国。

臓腑が無重力の制約を受けて、何とも形容詞し難い感覚を脳に伝えてくる。

……………あゝ、ジャンプの効果っスか。

風圧によって、俺の顔が可笑しなことになりながら、その結論に辿り着く。

どうやら、カードの効果の発動タイミングは自分で決められるタイプのものらしい。

流れる視界は、もはやどこぞの名も知れない山の中腹まで差し掛かっている事を伝えてくる。このままでは、山を越えた辺りまで落下しそうだ。

（なんかもう………なんだかもうよぉ………）

今更、もう戻れない。

仮に戻ったとしても、どんな面下げて会えばいいというのだ。

知り合いだと思って手を振ったら全く違う人で、すかさず他の人に向かって手を振って、『ああ、初めからあっちの人に挨拶してたんだよ』的な演出をするような………そんな心境だと思う。

人生初の飛行体験で嬉しいとか、ビルの何階相当にあたる場所を飛んでるんだ超怖いだとか、その他諸々の疑問を一切置き去りにして。

「やってられないんだぜええええ——……………！！」

某ソードマスター風な口調のドップラー効果を響かせながら、見ず知らずの方角へと、かつ飛んでいった。

もうこのまま消えたい………ぐすん。

第14話 大和の日々へおまけ

「……………あれ？」

心からこぼれた吐息に近い言葉は、誰に聞かれることも無く周囲に溶けていく。

——九十九が、消えた。

正確には凄まじい速度で空へと打ち上がっていったのだが、あまりの速さから、視界からは完全に消え去った。

神気であいつが上空を移動しているのが分かるが、一体これは何の意味があるというのだろうか。

先ほどまでの色づいた空気など一瞬で消え去り、残された私はただ力カシのように棒立ちになる。

「何だ、あのまま押し倒すのかと思ったぞ」

堂々と、まるで何もやましい事が無いと言わんばかりに神奈子が立っている。

「…………覗き見とは趣味が悪いね」

「覗いて、などしておらん。ただ前を見て歩んできたら、たまたま視界の先に居ただけの事だ」

「うつ」

九十九と私が話していた場所は、丁度一本道の先だった。

これなら前を歩くだけで、先ほどまでの光景が嫌でも見えてしまう。

「どうした諏訪子。いつものお前らしくもない。もっと飄々（ひょうひょう）と受け流さんか」

「…………良いじゃないか。私だって泣いたり怒ったりくらいするさ」

「それには、愛しさも含まれている……………か？」

言われ、僅かに悩む。

「……………どうなんだろうね。いつも人間達の営みを通して愛だの恋だの見てきたけど、自分が体験するなんて、考えた事も無かったから」

空に消えた九十九の後を追うように、視線を上へと彷徨わせる。

「今まで、私はあいつを友人だと思っていたんだけど、どうも違ってたようだね」

この気持ちは、決して友情の類ではないだろう。

私が知っている友情とは、胸の鼓動が早くなる類のものではない。

トクトクと、駆け足で心の臓が脈打つのが分かる。

そこに手を当て、ああ、私はこんなにも感情が揺らいでいるのかと、今まで体験した事の無い——けれどそれが嬉しくて堪らない

と思いながら、神奈子に自分の心境を伝えた。

「少しは懂れたこともあったけれど………うん、悪くないね。この感情は」

「それは、惚気、とやらか？ 私は生憎と色恋沙汰の神ではないので、縁結びや祝福の効果はないぞ。——ただ、お前が産む子は別だ。そちらには最大限の賛歌を奏でてみせよう」

「なんだ。バレちゃった？」

「からかうな、お前と同じ神だぞ。………まあ、九十九は気づいておらんようだったかな」

「それを気づかれちゃったら、楽しみが無くなっちゃうじゃない」

意地の悪い奴だ。

そう言って、神奈子はからからと笑う。

それに釣られるように、私からも笑みがこぼれる。ああ、気分が良い。まるで青空を羽ばたく鳥のよう。

ずっと、これから1人で生きて、人々から忘れ去れては、誰とも知られずに消えてゆくものだと思っていた。

けれど、今の私は違う。

神奈子がいる。勇丸がいる。九十九がいる。何より――
の子がいる。

多分、あいつが帰ってくる頃には間に合うだろう。

ほぼ間違いなく、驚くに決まっているのだ。

ああ楽しみだ。九十九が来てから、視点の変わった世界を眺めている。傍観でもなく、まして客観でもない。

私は今、誰かの為ではなく、自分の為に動き出そうとしている。

「諏訪子、行くぞ。やる事は山のようにある。惚けている場合か」

背を向けながら、村へと続く道を神奈子が行く。

それに追いつがるように、私も歩みを始める。

「そんな神奈子だって、行事がまだまだ残ってるのに、こっちまで来ちゃって。私に言えた義理？」

「何を言う。お前だって知っているだろう。神様は——」

「——我が俤なものさ、って？　たはは、神奈子の口からそんな台詞が聞けるとは思わなかった」

木枯らしが吹く山林を歩く。

隣に居るのは私が服従した相手で、私の仇で、私の友達。

何の因果かこうして一緒に肩を並べているけれど、それが決して嫌ではない。

また、私の周りに灯火が増えた。

背後の社から消え去った暖かさとは別に。

私の心には、また別の温もりが宿っていた。

「そんなに嬉しいものか……。ふむ——私もやってみるかな」

「……………え？」

第14話 大和の日々へおまけ（後書き）

連続投稿終了。しばらくの間、執筆作業から離れます。

理由はあれです。ダークソウル。

人間性を捧げる為、我、不死者の参列に加わらん。みたいな。

第15話 鬼

（トンネルを抜けると、そこは――）

雪国とか、あるはずがない。

ましてやトンネルなど論外。

（ホントもう……ここ何処よ……）

軽くボケ入れる程度には余裕があります。元気です。

——守矢の地を立つてから1日。俺は、どこぞとも知れない山林の中にいた。

あれから気持ちの整理をするのに数時間。ジャンプの能力を把握するのに、さらに数時間。あれって力の入れ具合で飛ぶ距離が変わるらしい。思いっきりやったら、山1〜2つ越えたから。

その辺は『ジャンプ』と言いつつ『飛行』能力の付与だけはあるのだと思った。使うタイミングがもっと遅かったなら、俺は……。

「うう、自分惨めッス……………」

思わず声に出してみたくなるくらいの後悔が押し寄せてくる。

当然引きずるなあ、こりゃ。

フラグへし折っちまったもんなあ。やだなあ。とほほ……………。

ジャンプの能力を使い、恐らく目的地であろう方向へ進む事、はや数時間。

垂直飛びで海の方角は分かっていたので——もう垂直飛びはやらんと切実に思った。

上昇する時は気分が良かったが、落ちる時は、死ぬかと思った。
いや悟った。俺はここで死ぬと。たまたまがきゅん！　ってなった
からね！

とりあえず、そちらの方面へとぴょんぴょん小ジャンプ繰り返し
ながら跳ねて来たのは良いのだが、地上から通る道と微妙な空中か
らの景色は全くの別物な訳で。

大きな山などを目印にして、多分この辺だろうと当たりをつけて
北の村を探し始めて1日。

ジャンプの効果も切れて、普通に徒歩で移動しながら、はや数時
間。

いい加減、勇丸かターパンでも召喚して乗らせてもらおうかなあ
なんて思ってしまう。むう、ちょっと焦ってきた。

結果として、俺は海沿いの森の中をうろつろつしながら目的地を
探している真つ最中な訳であるが、

（お？　あれかな？）

視線の先には、幾本もの白い煙が立ち上る、茶色い細々とした塊
が見える。恐らく沿岸の集落、北の村の筈だ。……………そう思いたい
だけってのもある。

しかし、仮に違つたとしても、集落があるというのはありがたい。もしかしたらご好意に甘えられて、布団で眠れるかもしれないから。

この時代は基本が煎餅布団だから、寝心地があれだけど、無いよりはあつた方が断然良い。

獣道のような、辛うじて通れそうな木々の間を通り抜けながら、俺はその白い煙の方へと進んでいった。

村へと続いている、よく踏み均したであろう道に行く。

段々と視界に収まってくるのは、今まで住んでいた村よりもボロさの目立つ……失礼。風格のある佇まいの民家が並んでいる。

沿岸沿いに建築された漁業を生業としたこの村には、吹き付ける潮風が全てを塩味にしまいそうな印象を受けた。

ううん、やっぱり海といったら魚介類でしょ、って具合に、海の幸をふんだんに使った海鮮料理が思い起こされる。

空気ばかり食べていたせいか、興味の対象が料理に多大に向くようになったと思うが、結構運動もしているので体的にはむしろいい食事をした方が良さそうになってきている。

見てほら！（見れません） 腹筋が割れてるのが分かるようになってきたんだよ！

今までプニプニだった体のあちこちも、今では立派な細マッチョ体系さ！

俺パンチングマシンで100とか余裕で出すし。

は、さて置き。

「勇丸かもーん」

俺の相方を呼び出してみる。

現れた勇丸はちらりと一瞬で周囲を確認し、危険は何も無いと分かったようで、こちらへと向き直る。

潮風に鼻をひくひくさせながら、いつもの定位置と化した俺の横へと並び立つ。

それを片手で頭を撫でてやり、相変わらずの暖かさともふもふさを体感した後、俺達は村の入り口と思われる、等間隔に開けた杭の間を潜った。

「すみません、ちょっといいですか？」

投網の補修をしてるつばい、第一村人発見。他には人影は見えない。

村人は作業している手を止め、俺へと顔を上げた。

足音で近づいて来るのが分かりそうなものだが、余程集中して仕事をしていたのだろう。5mくらいまで寄っても気づいてくれなかったから、唐突に声をかける形になってしまった。

「……………あんだ、誰だ」

ほらねー、白い格好で白い狗を連れた怪しさ満点の人物だから、要らぬ警戒心を……………ん？

「九十九と言いますが……………あれ、ご存知ありませんか？」

「いいや、知らない。何処から来たんだ」

「守矢の方からです」

「ああ、最近神様同士が戦をして飲み込まれたって言う、あの」

ああああと納得したように声を上げる村人A（30代っぽい男）に、嫌な予感を確かめるべく、尋ねてみることにした。

「あの、ここは北の。。。村ですか？」

「ここは×××村だ。そっちは確か……………反対方向だな。何だ、村を間違えたのか？」

何となく会話の流れから予想はついていたので、そこまで驚きはしなかったが、結構心に響く。

「おい、急に蹲って……………どうした、腹痛か？」

優しいツスねえおじさん。

でも違うツス。単に気力が低下しただけツスから。

心なしが勇丸も小さな声できゅんとひと鳴きして、残念そうな表情と、垂れ下がった尻尾を披露する。

ごめんよー、ジャンプでぶっ飛んだ時に『こつちだよな!』ってノリで方角決めたのが悪かったんだ。

だってあの出来事のせいで、あまりのやるせない気持ちに押し潰されそうになって、少しでも体を動かして気分を紛らわしかったんだもの。

「お気遣い無く……。ちょっと自分の馬鹿さ加減に落ち込んでしまっただけですから」

反対ってことは、単純に考えて県2〜3個分くらい逆走したってことか？

ジャンプの効果が凄いのか、俺の頭がやばいのか。

後者だと思いたくない為にさっさと思考を切り替え、前向きに事に当たることにしよう。

「すみません、もし宜しければ、こちらで一晩宿を貸していただけないでしょうか」

家事手伝いとか色々しますから、と提案してみる。

流石に体力と気持ちを回復せねばと思って言ってみたが、

「ああ良いさ。ただ、手伝いはいらねえ。ゆっくり休んどけ。……
…代わりといっちゃあ何だが、兄ちゃん守矢での話をしてくれよ。
夜にゃあ興味のある奴らを集めてくるからよ。ちったあ人づてで話
は届いてくるんだが、今ひとつ、はつきりしなくてな」

「はつきりしない？ 情報が、ですか？」

「そうなんだ。洩矢の国が負けて、守矢の地になって大和の国に組み込まれたつてところまでは、言う奴言う奴一緒なんだがな。あそここの……あゝ名前はなんつったか、八坂様だったか？ その神様が、真つ黒な大妖怪に飲み込まれただの、戦が終わった途端に国中の傷を受けた者達が回復しただの、見たことも聞いたことも嗅いだことも無いような食材が国中に溢れているだの、もう何を信じたらいいんだがさっぱりだよ」

……心当たりがあり過ぎて困る。

でも、あれだ。別に隠す必要は無い訳で、良く知っていると
か体験している俺ならば、事細かに出来事を伝えられるだろう。

ここはいつちよ、洩矢の国改め大和の国、ひいては神奈子さんと
諏訪子さんの為に、一肌脱ぎますかね。

「分かりました。それじゃあお言葉に甘えて、しばらく休ませても
らいます」

「そうしな そうしな。俺の家がこの先の松ノ木辺りにあるから、
そこに入って勝手に休んでくれ。ああ、その犬ところは上げな
いでくれよ」

「分かりました。それでは」

おじさんを背に、言われた家へと歩き出す。

勇丸は綺麗だって言いたかったんだが、その辺りは事情を知って
いるものと知らない者の認識の差だと思って諦める。

こういった出来事は、今に始まったことではないので対応も慣れ
たものだが、やっぱり少し寂しいものだ。

「よっし、じゃあ今晚は集まってきてくれた人に大盤振る舞いしち

やいまいしょうかね。勇丸も、食べたいもの考えておいて」

こくりと頷く相棒と共に、松ノ木が目印の、おじさんの家へと足を踏み入れた。さつて、寝るぞー。

「そこで俺は言ってやったんですよ！『俺の大切なものに手を出すんじゃない！お前らまとめて掛かって来い！』って」

「よっ！兄ちゃんカッコいいぜ！」

合いの手ありがとう おじさん。

村の中央の開けた広場。

小学校の小さな体育館くらいの広さの場所で、俺は集まった人々に、武勇伝を語っていた。半分以上そっぽを向かれているけどね。

思っていた4〜5人くらいという俺の予想は覆され、パツと見で3〜40人は居るっぽい。

日も暮れてきたので焚き火を囲む形で話し込んでいたのだが、どうしたことが、どんどん話が誇張していつてる気がする。

諏訪子さんに拾われたところから始まり、諏訪大戦から、二神が互いに手を取り合っている様子から、俺の能力で人々の治療を行ったまでを話していたのだが……。

諏訪大戦の詳細を知りたいと言われたので説明していたんだが、語っているうちに思い出修正というか……天狗の鼻が伸びてきたというか、嘘ではないけど事実でもないような言い回しで『俺って凄いんだぜ！』な話の展開になってしまっていた。

フラグな感じがビンビン伝わってくるが、酒も入ってストップパールの無くなった思考回路は軽く暴走していて、止まる様子を見せない。

村人達は、俺が振舞った酒や料理に舌鼓を打ちながら『こいつそんなに凄いのか？でも酒も食べ物も出してくれたし酒の席だから楽しんじゃえ』みたいな様子で俺の話のを空想物語の1つとして割り切りながら聞いているようだ。

それはそれで悲しいとは思うが、誇張の入った話なので、酔っ払いの戯言で済むのならそれに越した事はない。

違えてはいけない語るべきところは素面のうちに全て話し終えたので、後は口直し程度の馬鹿話の1つくらいは言ってもいいだろう。

「九十九様、お酒切れました」

「あ、こつちもですー。追加でお願いしますー」

はい喜んでー！　って俺は居酒屋の店員か。

初めに会ったおじさん以外、俺の事は皆、様付けで呼んでくる。

ジャン袋（略称）を出して勇丸を従えている、よく分からない力行使する存在なのだから、畏怖とか尊敬の念を籠められて呼ばれるのかと思ったが、何だか小鳥とか子猫が親に餌の催促をする為に甘い声を出しているだけなんじゃないかと思えてきてならない。

「あなた達それ何杯目ですか！　俺が覚えてただけでも1人で瓶1本分開けましたよね！？」

「あの透き通った綺麗な入れ物のことですかあ？　そんなに飲んだ筈はないですよ。だってほら、瓶の中は透明なままですから」

だからそれは完全に中身が空だからじゃないか。

うーい　なんて村人達が言い出しそうな空気の中で、俺は本日何本目か分からない酒瓶を取り出す。

名前は久保田の『純米大吟醸』万寿。

すっきりとした、クリアな後味が、飲んだ事すら忘れそうな風味を演出して、度数の強い日本酒であるにも関わらず、酒が進む進む。まるで水のように！　ってなもんよ。

が、それはこの混沌と化した現状を見るに大失敗であつたと思ひ知らされる。

もはや自分勝手に酌をして、酒が切れればこちらに強請り、たまに思い出したように俺の話を聞く、この状況を見れば。

まあ酒の席なんてこんなものだが、仮にも俺の話を聞くっていう名目で開かれたのだから、もう少しややほやして欲しいというか何というか……。ああ、おじさんまで酒に没頭し始めた。

いいもん　いいもん。俺には勇丸が居るもん……。って勇丸うううう！？

「わあゝふかふかだあゝ」

「あー、ずるいよ！ 次は私の番だったのに！」

「つ、次は僕が……………」

「凄い凄い！ 伸びるよー！」

明るい声が聞こえてくる。

こことは違う集団の輪に、勇丸は村の子供たちに揉みくちやにされていた。

本来ならば、彼らは日も暮れた今は床に就いていなければならぬのだが、俺という来客の歓迎の意を伴って、夜更かし決行サインが親から出されたのだった。

その結果が、あれである。

尻尾はピンと引っ張られ、体には2人の子供が縋り付き、頬をこれでもかと言わんばかりに左右から引き伸ばされている。

まさに玩具。

それでも為すがままにされているのは、きっと勇丸が『主に迷惑を掛ける訳には』とかそんな理由なのだろう。

もう少しくらい甘えてくれても良いんじゃないかと思うが、そこが勇丸の良い所でもあるんだけれど……………ねえ？

何はともあれ、あのままではあまりにもあいつが不憫だ。

どうにかしましょうかねっと。

「おい君達。甘いもの食べたくないかー？」

「『『『食べたーい！』『』『』』」

うむ、素直（欲望に忠実）な良い子達だぜ。

最悪一喝しなければならなかったが、言葉で分かってくれるのならそちらの方が良い。——言葉じゃない気はするが。

勇丸を放り出すようにこちらに詰め寄り、子供たちは何をくれるのかとせがむ。

本来なら叱るべきである大人はあんな状態なので、仕方なしにこいつらの面倒を見る羽目になった訳だが、子供は嫌いじゃないので、むしろばっちこいな展開である。勇丸は開放されるし俺は遊べるしで一石二鳥ってもんさ。

「大人達はお酒を飲んで楽しんでるから、こっちはこっちで楽しんでやおう。大人達には秘密だぞ」

はい、と元気に返事することに満足しながら、俺は持っていたジャン袋に手をつ込む。

取り出したのは、綺麗な宝石。

赤、青、黄色、オレンジに紫と、焚き火に照らされながら色とりどりに輝くその宝石は、飴玉と呼ばれる、あの砂糖菓子の代表格である。

「ほーら、好きな色を選んで、口の中に入れてみな。飲み込もうとするなよ。舌の上で転がしながら、ゆっくり舐めるんだ」

私 赤、僕 緑と、皆は思い思いの飴玉を選び、それを口へと放り込む。

石でもしゃぶっているかのような感覚だったのだろう。頭にはてなマークを表示させていた子供達だったが、甘味が溶け出し舌の上でその独特の甘みが広がると、途端に目を輝かせながら、口々に感想を叫ぶ。

「なにこれ！ すっごく甘いよー！」

「私のこれはブドウの味がする！」

「僕のは力キだ！」

柿味の飴なんてあつたかな？

まあいいか。何にしろ、喜んでくれているのだ。この笑顔の前ではどんな事でも些細なものよ。

頬袋を一生懸命に膨らましながら、500円玉を球くらいにした大きさの飴を口内で転がす。

少し大きすぎたが、こういった食べ難さも良い思い出に変わってしまうのが子供の特権だ。その特権を有意義に使ってやろうという俺の優しさだと思って、がんばって飴ちゃんを舐め続けなさいな。

焚き火を囲んだ輪から、距離をとる。

近くの家の壁に背を預けながら、隣に座って来た勇丸の背に手を置き、温もりを楽しむ。

洩矢や大和でも何度かあつたが、こういったどんちゃん騒ぎというのは、何度やっても楽しいものだ。

馬鹿やって、楽しんで、ああ、明日もまたがんばろうという気持ちに繋がる。

ただ、子供の手綱くらいは握っていて欲しいとは思うが、四六時中それをもとめるのも酷というものだろう。今くらいは、全て忘れて自分の為に楽しんだって罰は当たらない筈だ。なんたって俺が面倒みてるし。

満天の星空も、焚き火のせいで多少は霞んで見える。

それと相まって、この宴会は幻のような印象を受けた。

あそこで踊るおじさんも、酒瓶を片手に馬鹿笑いする村人達も、飴玉を一生懸命頬張り、顔に至福の表情を浮かべるあの子達も。

皆、今にも消えてしまふんじゃないか、なんて、センチメンタルな気分になってしまう。

ダメだなこれは。飲みが足りないんだ。

久々の遠出だったからか、諏訪子さんとの別れがあれだったからか、喧騒の輪から休憩にと思って離れてしまった事で、ちよつとネガティブになってしまった。

———こういう時には、無理にでも楽しむべし。

別に、これを吐露せずに抱えたままだと後の爆弾に発展する、なんてことは無いだろう。ただのホームシック+αだし。

「よっしゃ、ならば飲むしかあるまいて！」

両膝に勢い良く手の平を叩きつける。

パンツ！ と子気味の良い音と共に立ち上がった俺は、喧騒の中心へと歩き出す。

「一番、大和の国、守矢地方から来た九十九！ 酒瓶一気飲みやります！」

「お！ 兄ちゃん良いぞ！」

「気張っていけ〜！」

やはりこの手の一発芸は受けが良い。酒の席だから、箸が転がっただけでも笑いを取れるくらいなので、当然といえばそうなのだけれど。

急性アル中でぼっくり逝ってしまいそうな荒事も、今の俺ならば何の気兼ねもなく実行出来る。

流石にそれは不味いと判断したのか、勇丸が服の裾を噛み、くい

くいと引つ張るが、一気飲みを止めることはしない。

まるで、落雷が直撃したかのような音を聞くまでは。

「な、なんだあ!？」

我ながら、何という脇役の名台詞。というか雑魚がやられる寸前に言う死亡フラグな台詞。

この台詞だけで一生食っていけるんじゃないかってくらいの発音の良い言葉が出てくる。良い仕事してますね。

とか冗談こいてる場合ではないので、酒瓶片手に、落雷音があったと思われるところまで走る。溺れるものは藁をも掴むというが、俺の場合は酒瓶だったようだ。

勇丸が既に先行して偵察に走っていたので、道中は安全だろう。相変わらずの素早い行動力に感謝しながら、目的地を目指す。

走る俺を横目に、村人達は啞然としながら音のあった方へと首を

向けつつ、固まっている。さっきの子供達も同様だ。皆、何が起ったのか分からない、といった表情を浮かべていた。

下手にパニックになるよりは良いかもしれない、と思いつつ、俺はいざという時の為に、脳内にカードを展開しておくのだった。

ああ、酒が全身に回るぜ……………うえつ。

で。

「……………あゝあ——出会っちまったか」

目を逸らしたい真実だったせいかな。

思わず、キザったらしい二次元キャラの台詞を引用してみた。好きですけどね、この台詞。

目に入ってきたのは、牙を覗かせながら低くなり声を上げる勇丸と、丸々1軒分あるうかという壊れた、かつて家と名のついていたであろう廃材の数々と。

「ああ？ 犬っころだけかと思ったら、ちゃんと人間がいるじゃないか」

数は20前後。2mはあろうかという体格に、独特な、黄色と黒の斑模様の衣類。肌の色は俺らと大差無いのだが、何より目を引くものが——その頭部に突き出した、角である。

鬼。

強き者、悪い者、恐ろしい者という意味を併せ持つ、古来より存在する、日本の三大妖怪のうちの一派。

東方の世界でもそれは一緒に、その強大な力を誇示しつつ、人々が嘘という知恵をつけるまで、頂点に君臨し続けた、妖怪の中の元締め。

今までは洩矢や大和の国でしか活動をしていなかった為に、これから大妖怪に出会う事など皆無だったが、この場所は、彼女達の傘下ではない。

必然。今まで相手にしてきた妖怪などとは違う、弱肉強食の世界で生き残ってきた歴戦の妖怪達と出会う羽目になる。

これが生まれたての妖怪などだったなら今まで通りに対処するだけなのが、どう見たって幾つも争いをしてきましたって集団なのだから困ったものである。

だって顔に傷とかある奴もいるし、眼光というか表情が雑魚っぽ

くない。

ヒャッハー！ 汚物は消毒だー！ な集団だったなら、油断やら慢心で付け入る隙は多分にあるのだが、それは諦めなければならな
いようだ。

（くっそー、第一声からして雑魚だと思っただけだなあ）

金棒こそ持っていないものの、その威圧感というか妖力がそこいらの雑多な妖怪とは一味も二味も違う事を伝えてくる。

そして何より残念なのが、

（原作キャラいねえー！）

なのである。

東方で鬼といえば、伊吹萃香と星熊勇儀の両名であるが、どこを見ても、それらしい人物が見当たらない。

一応女の鬼も何人かいるのだが、美人の部類ではあるものの、全く知らない顔である。――後から顔変わるって訳じゃないよなあ？

「おい」

呆けていると、リーダー格っぽい男の鬼が声をかけてきた。

額に一本、俺の腕くらいあるんじゃないかと思える角が生えている。白く、鋭く、逞しく。何処か風格漂うそれは、まさに鬼の象徴と言えるだけの代物である。——それに比べると勇儀さん遊びすぎだろ。

「……………何だ」

「他の人間は何処に居る」

うわー嫌な予感しかない質問だなあ。

「……………それを聞いてどうする」

「見つけて食うんだよ」

………もつとこうさあ。『それを知る必要はない』やら『人間如きに』な台詞を予想していたんだが、あまりにストレートな物言いに、思わず目の前がクラクラしてきた。

でもきつと、今の台詞はその手の考えの延長線上から発せられたものだろう。

言っても言わなくても、どちらにしろこの一帯を風潰しに探しながら、確認するのだ。

俺が質問にどう応えようと、それは暇つぶしの一環でしかないのだろう。

イラっとするので、何か嫌味の1つでも言ってやろう。

「お前達鬼つてのは、仲間を売る事に何の感情も持ち合わせていないようだな。そんな台詞が出てくるなんて、なんて可愛そうな種族なんだ」

鼻では無理でも、口元にそれらしい嘲笑を浮かべて語りかける。

これで感情の1つでも乱してくれば良いが、

「はっはっはっ！ そりゃそうだな！ そんなこと出来るわきゃあねえよなあ！」

逆に、一笑の下に片付けられた。

笑う『はっ』の部分だけで、大太鼓でドンと叩いたときのような振動が空気を揺らし、全身を震え上がらせる。

参ったな。挑発にも乗り難い。おまけに強いとなっちゃあ、難易度が一気に跳ね上がるじゃないか。

「でもな、出来なくても良いんだわ。どっちにしたって——」

たん、と、踏み込む音が1つ——いや2つ。

それぞれ僅かな時間差で、1つは前方の鬼が“いた”場所で、もう1つが、

「お前、これでおっ死んぢまうからな」

俺の目の前。

遅しい握り拳が、俺の頭を吹っ飛ばそうと迫る。

10mはあろうかという距離を、一呼吸をする間もなく詰めて来た。

即死だ。俺“だけ”ならば。

今までならば、ここで走馬灯の1つでも見ているのだろうが、生憎と神奈子さんとの戦闘経験からか、それを見ることはなかった。

迫る拳が、上空へと弾け飛ぶ。

下から殴られたかのように宙に浮いた拳は対象を失い、同時に限界まで伸びきった腕の長さの関係もあって、威力も失った。

何が起こったのか分からないといった表情の一角鬼に、にやりと不適な笑みを浮かべて、言ってやった。

「死んでないぞ——この“嘘つき”が」

下から鬼の拳を跳ね上げた白き従者の勇丸は、俺と敵との距離が近すぎることを考慮して、距離を離すべく行動を起こす。

呆けている鬼の背中に一瞬で回り、体を前転でもするかのように回転させる。

同時、相手の背中を咥え——まるで一本背負いでもするかのように、放り投げた。

投げる方向は地面ではなく、鬼達のいる陣営側。

鈍い音を立てて落ちる肉塊。

頭から落下した鬼はピクリとも動かず、周りの鬼達も啞然とした表情で俺達———というか勇丸を見ていた。

ただの狗畜生だと思って油断していたのだろう。幾ら大型犬だとはいえ、鬼と比べれば指先1つで倒せる存在なのだと、高を括った結果がこれである。

いい気味だとは思うが、問題はこれから。

あの程度のダメージで倒れるようなら、日本三大妖怪の一角を担ってなどいない。

「……………せたな」

ほら来た。

投げ飛ばされた鬼から、声が聞こえる。

まるで地獄の底から響いてくるかのような音声に、軽くビビる。

だが、ダメだ。

ここで気持ちが悪くしてしまえば、俺は冷静な判断が出来なくなる。

嘘でも良い。虚仮でも構わない。

あの時の、諏訪大戦での過ちを繰り返さない為に、俺は仮初めの強い自分を想像し、創造する。

いつか、その自分が本物になるように。

「何言ってるのか聞こえないぞ。鬼つてのも案外弱っちいもんだな。ただの狗相手にぶん投げられるなんてなあ」

俺の語尾に“w”か（笑い）でも付きそうな勢いで馬鹿にしてやる。

何より、俺はあいつを嘘つき呼ばわりしたのだ。

嘘を何より嫌う鬼にその台詞を言うのは、自殺願望以外の何者でもないだろう。

だが、やる。

その奢った慢心に、自分達が頂点だと言わんばかりの態度に、一発入れてやる。

普段ならば、酒でも食べ物でも召喚して穩便に済ませようとする俺だが、こちら酒の力が働いて、自制心が効かぬ、媚びぬ、省みぬってもんよ！（謎

ゆっくりと、まるで地獄の淵から一本一本指を這わせて獲物に喰らいつかんとする悪魔のように、一本鬼は体を起こす。

ギンッとこちらを射殺さんと視線の槍が刺さった。

——だがなんだ。それがどうした。怒ってるのはお前だけだとも思ってたのかゴルア。

少し下がってる勇丸。ちょっと凄いの見せてやるから。

「——俺に、嘘をつかせたなああああ！！」

「んなこと知るかくそつたれえええええええ！！」

弾丸の速度を伴ったダンプカーのように、一本鬼は突進して来る。始めからこの勢いだったならば、勇丸も対処できずに俺は瀕死になっただろう。

だがお前は俺に時間を与えてしまった。

それがお前の敗因。それが俺の勝因。

破裂音が木霊する。

木々をなぎ倒し、家一件丸ごと破壊したその豪腕は、俺の目前で止まっている。

いや、正確には、止められていた。

鬼の拳。その何人も触れられぬであろう死神の一閃を、そっと割れ物でも扱つかのように、添えられている、白い手。

鬼達を見る。眩い人を。

鬼達を見る。純白の羽を生やした存在を。

鬼達を見る。それら翼人達が、何十人も周りに出現していること

を。

鬼達は知らない。それは、天使と呼ばれる西洋の神の使いであることを。

……… 鬼達は知らない。壊したその家は、一本松の近くにあったその家は——俺の一宿一飯の恩人の家であることを。

「俺の大切なものに手を出すんじゃない！ お前らまとめて掛かって来い！」

第15話 鬼（後書き）

ダークソウルやるから当分更新しないと聞いたな！ あれは嘘だ！

……訂正しまして、更新速度が大幅に落ちる形になります。現在の執筆速度だと、月1くらいでしょうか。

ゆっくり、けれど一歩一歩確実に更新を続けて行こうと思います。

第16話 H u l k F l a s h (前書き)

今回はM T Gの説明が色濃く出ています。省略や簡略化を行い切れなかった為に、読み難い箇所が多々出てくるかと思われますので、何卒ご了承ください、と思います。

第16話 H u l k F l a s h

トレーディングカードゲームでは、互いに対戦するという目的から、各プレイヤーは自分が使用する山札——デッキと呼ばれる、それを構築する。

当然、それは大体の場合は勝利することを目的に構築されており、限られたカードプールの中から星の数ほどの組み合わせを考え出して、組み立てている。

殆どのトレーディングカードゲームにおける勝利条件は、3つ。

1つ。相手に設定されたライフポイントをゼロにする。

1つ。相手が、自身のデッキからカードを引けなくなった場合。

1つ。その他、各種カードに書かれている特殊勝利条件を達成する（例・クリーチャーカードを合計10枚召喚する。墓地と呼ばれる捨て札を置く場所に、カードが30枚以上ある、など）。

この3つだ。

そのそれら目的達成の為に、世界中のプレイヤーは日々組み合わせを熟考し、思案し、デッキを構成しており、それら数多のデッキをカテゴリ分けする名前が存在する。

MTGにおけるカテゴリ名は、大雑把に分けて、同じく3つ。

『ビートダウン』

語源は、殴り倒す、の意味を持つ、基本クリーチャー中心で構成されたデッキタイプ。広義にはクリーチャーによる攻撃を中心とし、複雑なギミックを搭載していないデッキタイプの総称。もっと広く言くと積極的に相手を攻めるデッキ。

『コントロール』

名前そのままの意味で、戦場をコントロールし、一步一步確実に勝利への歩数を刻むデッキタイプ。狭義には、相手に何もさせない＆動かせない『ロック』と、呪文を打ち消す、という概念のあるMTGならではの『パーミッション』が存在する。

ちなみに、日本人プレイヤーはこのパーミッションが多い傾向があり、世界でも日本のパーミッション好きには一目置かれている（良い意味でも悪い意味でも）。この手のデッキは相手の行動を大き

く阻害するので、友人同士で戦う場合は、その関係に亀裂が入る事もあるとかないとか。

『コンボ』

多大なアドバンテージ——優位性を確保出来るか、コンボが成立した時点で勝敗の決してしまうデッキタイプ。

(以下 M T G w i k i 丸々引用)

コンボが”失敗しても”コンボパーツ自体が単体である程度戦えるような、安定感のあるデッキは強力である。しかし、コンボの成功率が高すぎて”失敗しない”デッキは、それ以上に脅威である。

稀に、高確率かつ高速で、失敗しても立て直しが利く、爆発力と安定感を兼ね備えたコンボデッキが誕生する。このようなデッキは公式大会を荒らす原因となるため、キーカードの禁止カード指定などで規制される。

瞬殺コンボデッキの場合、相手のデッキタイプにかかわらず戦えるが、”相手を無視している”ことでもあるため、対戦ゲームとして問題があるとされる。

——前々から考えていた。

カード1枚1枚を使ってきたが、デッキの名前を思い浮かべて使ったのならどうなるのか、と。

デッキに含まれたカードを全て使うのか、はたまたオートで1つ1つカードを実行召喚してくれるのか。

1度も試した事は無く、ぶつつけ本番になってしまったが、問題ないだろうという確信はあった。

構築されたデッキは、目指す勝利パターンがおぼろげながら決まっている。大会で名を残すような、トップクラスの強さを誇るものであれば、それはむしろ顕著だ。

名は体を表すという言葉通り、構築されたデッキには、辿り着けるかどうかは別として、勝利へと続く道を敷く手段が備わっているならば。それを言うということは、その道を敷くことと同義。

『デッキとは道である』

これがこの世界に来てからの持論。

そもそも『道具』という言葉には、『道』の字が組み込まれてい

る。それにあやかり自論その1にしてしまった訳だが、昔の人へ感謝を表明してておこつ。

過程を……敷設作業を省き、結果だけを残し、道は完成する。

それが——俺がデッキ名を唱える意味。

ビートダウンならば、相手を圧倒的な物量か無比の突進突破力で押しつぶすクリーチャー軍を展開し終えた状態で。

コントロールならば、戦場を支配し、その場の神と化したかのように、相手へ多大な制約を掛けた状況で。

コンボならば、膨大なアドバンテージを稼ぎ、相手の喉下に手を掛け、幾枚ものカードがまるで1つの呪文であるかのような——
あと一息で仕留められる一歩手前で。

自身の制限に触れなければ、それらは実行される。

今、大量に展開された天使達を見るに、俺の考えは正しかったのだと、満足9割、安心1割の心で、月夜に照らされた、閃光と豪腕と土煙が入り混じる戦場を見ながらそう思った。

「くそっ！ 何でだ！ どうして！」

鬼の一人が、たまらず叫ぶ。

数の差から見ても、鬼1人对天使1〜2人という振り分けになっているのだが、躯体の差から、天使達はまるで柳のようにその攻撃を回避、あるいは受け流している。

とはいえ、相手は鬼。

戦闘経験と自己のスペックをフルに活かして5〜6回に1度は攻撃を当てるのだが……。

豪と唸りを上げる攻撃が、とうとう避けきれなくなった天使の1人にヒットする。

通常ならば、それで充分だ。

引き裂けぬものなど無いと主張するかのようなそれは、けれど、まるで絶対的な何かに阻まれたように威力を緩めて、僅かに天使の行動を阻害し、体をよろけさせる程度に留まった。

不可解だ。

そう、表情が物語っている。

仕返しにと言わんばかりに天使達が放つ、妖気だが神気だが分かれぬエネルギー弾を避け、あるいは防ぎながら、鬼達は戦いを繰り広げていく。

そんな光景を見ながら、俺は結構効果のあるものなのか——と。その天使達に備わっている能力の一端を思い出す。

その天使達は、2 / 2の飛行と『プロテクション（黒）』と呼ばれる、指定された条件に対して一定条件下で効果を無効にする能力が備わっていた。

相手は日本妖怪の顔。つまりは人間にとっての悪そのもの。

それが正義か否かはさて置き——ならば、それは色に部類するなら黒以外にあるだろうか。

妖怪Ⅱ黒のイメージは我ながら安直だと思ったが、効果観面のようで、鬼達は殆どダメージの入らない天使達に、悪戦苦闘している。

良かった。もしかしたら赤とか緑にも部類されるんじゃないかと思っていたけど、少なくともコイツらは全員、黒が含まれているようだ。プロテクション黒って妖怪相手じゃ反則の部類じゃね？なんて思ったり。

…… M T G のカードには、相手を倒す手段にダメージか直接破壊かの差が明記されていたが、こちらではどうなのだろう。

とりあえず物理系は殆ど無効っぽいかな、と、若干ではあるが鬼の攻撃でよろめいている天使を見ながら判断する。

これが相手の力量によるものなのか、それとも天使達の地力なのか悩むところではあるので、過信せずに、切り札ではなく、神奈子さんにお粗末の効果が現れ難かった事を踏まえて、手段の1つとして思っておこう。

そして、絶え間なく戦闘が行われている最中で、ふと思った。

——これなんてエロゲ？ と。

何考えてんだって思つかもしれないが、彼女達の格好が格好なのだ。

純白の翼に薄いブラウンの髪。うん、ここまではいい。

身に着けているのはベストのような金色のプレート——素肌にタンクトップのような——と、よく光の通るスカート——ようはスケスケ。

——つまりは、結構裸に近い格好なのである。

しかも全開ではなくチラリズムとか、男心をくすぐり過ぎ。

もっと別の形でハーレム目指したかったよチクショウ！

「埒が明かねえ…………お前ら！」

一本鬼の掛け声と共に、周りの鬼達が一瞬で戦闘を取りやめ、俺へと殺到する。敵ながら良いチームワークに焦燥と感心を同時に思う。

—— かって来い、なんて言ってフラグ立てたのが不味かったか。こっちくんな。

半分以上は、背中を見せた事で天使達の気孔弾っぱいのに被弾して勢いを止めたのだが、残りは全て、こちらへと向かってきている。

俺の護衛についていた1人の天使が、精一杯の弾幕を張るも、これといって怯んだ様子も無く。

あの物量では、地力も相まって勇丸も対処しきれないだろう。

……諏訪大戦の時には、それが原因で敗北を刻んでしまった。

だから、考えた。

未だに明確な対処手段は思いついていないが、1つも思いつかなかった訳ではない。

そのうちの1つが、大量のクリーチャーによるサポート体制。

単純にして明快の、だからこそ崩れ難い戦法。

呼び出した天使は鬼より数の多い、30以上。

通常ならば、維持する以前に、呼び出せないくらいの量であるクリーチャー数。

だが、召喚されている。

ルールに沿って——ではない。ルールが変わっているのだ。

召喚した存在に維持費が掛からなくなった訳ではない。

それにはまず、彼女達が『トークン』と呼ばれる存在であるところから語らねばならない。

『トークン』

何らかのカード効果によって生み出される擬似カードのこと。これからカードは場にしか存在できず、手札や山札に戻ったり、墓地に置かれた場合は消滅する。そして、そのマナコストは召喚に使用したマナコストに関わらずゼロとなっている。ただし、何かのコピーカードである場合は、それらカードのマナコストは、コピー元と同一のコストを持つ。

この大量に出現したクリーチャーは、元は1体のクリーチャーをコピーした結果のもの。コピー元のコストは5。

今までの俺ならば、万全の状態で、戦闘と呼べるだけの時間現存させ続けられるのが3体。一瞬だけならば、精々10を超えるかどうか、といったところ。

だが、展開している。召喚している。維持している。それも、余裕をもって。

一体何故なのかと問われれば、こう答える。——上限開放したからなのだ。

転生前に言われた、『経験値を積むことで、原則の制限や上限の

開放が可能』。

これが、その成果。

開放された制限は『トークンの維持コストは全て極小換算』というものだろう。

本来ならばコスト5を30体以上維持している計算だが、感覚は死の門の悪魔を維持している時と同程度の疲労具合。

あの時は、かなり瀕死な状態で数分は持った。

今の疲労具合はそれと同等くらいかとはいえ、宴でジャン袋を多用したことを差し引いても、数十分は今の状態を維持できる。

よくよく考えてみれば、おかしかったのだ。

主に戦闘での経験値によって、勝敗とは関係なく、俺のレベルは上がっていくと聞いていた。

雑魚ばかりではその成長率が遅い事は当然だとして、諏訪大戦で八坂神奈子というラスボスどころか裏ボスレベルの相手と戦って、判明した上限開放が使用ストックマナが1ランクアップだけだというのは疑問が残った。

大和の国になって1年。

負けた経験を活かして、自身を守るようにカードの組み合わせを試していた時に、このレベルアップボーナスに気がついた。

その時はテレビゲームのように、レベルが上がった時にはそれらしい音や表記でも出てくれれば良かったのだが、と愚痴を零したものだ。

現在判明しているのは、マナストックの増加とトークン維持費の減少。そして、後1つ。

他にも何かあるかもしれないが、今分かってるのは3点だけだ。

どうせなら、出力マナの上限を開放してほしかった。

4マナを使えるようになっていたのなら大分戦略も広がるのだが、無いものねだりは空しいだけなので、さらっと流す。

鬼達を見据える。

どいつもこいつもやる気満々な顔をして、後数秒もしない内にこちらへと到達する。

だが、その様子だとお前らは気づいて………見えていないんだろ
うな。

そうじゃなかったら、もっとその表情を歪めている筈だ。

眩い天使達に霞んで見えないのだろうが、もうその異常に気づく
筈だ。

——ほら、その顔を歪ませるといい。

「…………ぐっ、何だこの臭いは!？」

突撃しながら、鬼の1人が周りの鬼に向けて、そう話す。

微かに漂うのは、腐った卵を数倍臭くしたような臭い。

臭いの元は——俺の後方。

そこには、俺と同じくらいの人型が居た。

爛れた皮膚に、醜く晴れ上がった顔面。

片側は落ち武者のようにボサボサの髪の毛が隠し、もう片方の辛うじて覗く眼球には瞼が存在せずに、けれど気にした様子もなく、グリグリと前方を観察していて、体の至るところには縫い目が見て取れ、そのボロボロの体を縫い合わせているのが覗える。

左半身からは脇の辺りから第3の腕が後付けされて、反対の右側——肩甲骨と肩の中間くらいに——人間の首から上が備え付けられていた。

まさに醜悪、まさに異形。

それは、ゾンビと呼ばれる、かつて人であった者。

あまりの臭いに、勇丸は先ほどから鼻で息をすることを止めていくくらいだ。……………この臭いは毒レベルだな。

攻撃クリーチャーはゾンビクリーチャー、黒で1マナ、場に出ているクリーチャー1体を食う事で+1/+1の永久修正を受ける、『屍肉喰らい（しにくぐらい）』1体と。5マナの天使クリーチャー『れいたいのせんだつ霊体の先達』30名以上。

この両名の召喚を以って、MTGにおいてもトップクラスの強さを誇るコンボデッキ。

——『ハルク フラッシュ』の完成である。

『ハルク フラッシュ (Hulk Flash)』

由来はそれぞれのカード名『閃光 (Flash)』、『変幻の大男 (Protean Hulk)』から。たった2枚のカードのみで成立するコンボデッキの名前である。

アメリカンコミックのキャラクター、緑色の巨人ハルクの決め台詞のひとつで、「ハルク スマッシュ (Hulk Smash)」という英語圏で使われる俗的な言い回しを流用した名前。ちなみに同名の『ハルクスマッシュ』というデッキも存在する。そちらの性質は全くの別物。

『閃光』

青で、2マナのインスタント

あなたの手札にあるクリーチャーカード1枚を出してもよい。そうした場合、あなたがそのコストを最大(2)まで減らして支払わ

ない限り、それを墓地と呼ばれる捨て札場に送る。

『変幻の大男』

緑で、7マナのクリーチャー 6 / 6

これが召喚された後に墓地に置かれた場合、あなたのライブラリーから点数で見たコストの合計が6以下になるようにクリーチャーカードを望む枚数探し、それらを場に出す。

変幻の大男を閃光で経由させ召喚し、即座に墓地に叩き込む。そして能力を誘発させ、様々なクリーチャーを呼び出し、相手に勝つという流れのデッキである。

コンボ完成に必要な手札カードが僅か2枚、通さなくてはならない呪文に至っては2マナのインスタント1枚と、妨害するにも時間が足りない事が多く、MTGの歴史を通して見ても、前代未聞のコンボパーツの少なさを誇る。

従来のコンボデッキと比べてもその決めやすさ、そして速度が段違いであり、最速1ターン、平均で2〜3ターンで勝利を勝ち取るその速度は、まさに閃光。私見で一般的な試合が5〜8ターンで終わる事を考慮すれば、その異常さが分かってもらえると思う。

登場するや否や、公式大会でその猛威を振りまいた。

その影響度があまりにも大きすぎたため、閃光が大会において禁止カード（使ってはならない）か制限カード（1枚だけしかデッキ

に投入できない）に指定され、消滅、あるいは勢いを落とすことになった。

上記の説明では少しややこしいので、大雑把に流れを説明するのなら、以下のようなになる。

1 『閃光』

2 『変幻の大男』を出すが墓地に送られる

3 能力で山札の中から条件に合う好きな数のクリーチャーカードを選びそれによって倒す。

という、この3段階のみ。

呼び出すクリーチャーによって展開は変わるが、今回呼び出した天使は、『プロテクション（黒）』と飛行を持つことに加えて、ある特殊能力を備えている。

それが、召喚された時に墓地のクリーチャーカードを1枚、場に出すというもの。

『霊体の先達』

白で、5マナのクリーチャー。 2 / 2

『プロテクション（黒）』 飛行

召喚された出た時、墓地にあるクリーチャーカードを1枚を場に
戻す。

これの他にデメリットが1つ付随されているのが、この戦闘において
は関係ないので省く。

この能力によって、例えば10マナだろうが100マナだろうが、
墓地にさえ落ちているのならコスト無視でクリーチャーを戦場に召
喚することが出来る。最も、今の俺では制限の関係で、100マナ
なんて存在を出してしまったのなら、疲労困憊どころか気絶するこ
とだろう。

だが、これだけではこの多大なクリーチャーの数は召喚させられ
ない。

よって、新たにカードを使う必要がある。

少し複雑なので掻い摘んで説明すると、召喚されているクリーチ
ャーカードを1ターンに1度コピーする能力を持つ、『鏡割りのキ
ジキ（かがみわりのききじき）』という、5マナである赤のクリ

ーチャーカードを使用した。

- 1 『変幻の大男』で『屍肉喰らい』と『霊体の先達』を持つてくる
- 2 『霊体の先達』の効果で墓地に落ちた『変幻の大男』を場に出す
- 3 『屍肉喰らい』の能力で『変幻の大男』を再度墓地に
- 4 『鏡割りのキキジキ』を呼び出し、能力で『霊体の先達』をコピー

- 5 その間に『屍肉喰らい』で『鏡割りのキキジキ』を喰らい、墓地へ

- 6 墓地にある『鏡割りのキキジキ』を『霊体の先達』で場に出す
- 以下4から6までループ。

これにより、自身の体力が許すまで霊体の先達のコピートークンを召喚することが出来る。

もう少し無理をすれば、まだ召喚出来そうではあるが、今は屍肉喰らいにがんばってもらおうとしましょう！

「蹴散らせ、屍肉喰らいい！」

悪臭と共に、屍肉喰らいが突貫する。

ゾンビとは思えぬ軽快さに驚くものの、この場では頼もしい事なのだと自身に言い聞かせる。………機動性のあるゾンビ、まじこええ。

だが、屍肉喰らいは本来1/1。

鬼達に腕力で劣っている、2/2である天使達より劣るのだ。

それが鬼と真っ向から力チ合うというのだから、無謀以外の何者でもない。

けれど、今のこのゾンビは違う。

能力循環の為に、鏡割りのキキジキを30体以上喰らっているのだ。

1体喰らう毎に、+1/+1の修正を受ける特殊能力を持つ屍肉喰らい。

単純に考えるのなら、今のパワーとタフネスは、30以上となっている。

30/30など、死の門の悪魔など目では無い………もはや考えられない数値だ。

恐らく山の1つでも吹き飛ばしてしまえそうな力になっているその存在。

見てみたい。

鬼の1人へと、両手を叩き下ろさんと振り上げる屍肉喰らいを見ながら、そう思う。

体格も身長も鬼と同程度。

牙を剥き出しにし、唸り声を上げながら右ストレートを叩き込まんとする一本鬼。

それは一瞬。

大気を揺らし周囲に木霊する打撃音。

片や天に拳を突き出す形で。片や大地に拳を振り下ろさんとする形で。

互いに拳がぶつかり合い、けれどどちらも崩れる事はなく、拮抗状態を作り出した。

——互角。この状況が示すのは、そういうこと。

おかしい、と焦燥に駆られながら判断する。

何故30 / 30以上と互角なのか。

体力か能力か不明だが、相手も同等の力を持っているのか。

いや違う。考慮すべきはそこではない。疑うべきは、相手ではなく自分。

——そもそも、屍肉喰らいは本当に30 / 30以上なのだろうか。

ゲーム上でなら単なる足し引きの計算の結果だが、ここは独自の制限の掛かった異世界。

ならば、能力の向上にも一定の制限があると見るのが妥当だろう。
相手ではなく自分に原因があると考えた方が、まだ対処が楽というものだ。

一体幾つまでの修正を受けているのか不明だが、何とか互角になっている現状を受け入れ、次の手段へと現状を見据えながら対策を練る。

しかし、使用出来るマナは後1。

カード枚数に至っては……勇丸やジャン袋を含めての召喚から数えて、丁度7枚使ってしまった……。

必然、新たに手を打つ展開は望めず、方法は1つしかなくなった。

屍肉喰らいとガチンコしている一本鬼の横を通り抜けて、他の鬼達が殺到してくる。

10体以下ではあるが、脅威であることに変わりはない。

——俺の元まで来れば、の話であるが。

「護衛は2体だけだ！ 誰でもいい！ あの白い人間をぶん殴れえ
！」

鬼が吠える。

もう盾はないと言わんばかりに。

……………呆れてしまう。

戦闘には慣れているようだが、格下だと思っていた相手が牙を忍ばせているという展開は、出会った事は無いようだ。

その証拠に、警戒している視線は、勇丸と天使の両方にだけ向いている。

それは正しい。認めよう。俺自身は何の力も無い、無力な一般人と同程度だ。障害物になるかどうかも怪しい存在であるだろう。

だが、お前達は蜜に釣られて群がってきた蟻だ。

俺という餌を見せられて、我慢出来ず、真っ先に狙って来る。

行動が読める敵ほど対策の練りやすい相手はいない。

神奈子さんほど圧倒的な何かがある訳でもない。諏訪子さんほど絡め手な能力があるわけでもない。

そんな相手に、今更どうやって遅れを取れというのが。

「誰が言っただよ……」

——俺のコンボは、止まっていない。

30以上を召喚した時点で、それ以上のクリーチャー維持は長期戦に向かないと判断したので、それ以上出さなかったただけだ。

「打ち止めだつてええええええ!!」

向かってくる鬼達の頭上。

そこには、さらに20体の天使達が点在していた。

俺の声に合わせて、光の雨が降り注ぐ。

20名による、光弾の絨毯爆撃。

ピチュン ドカン とギャグの様な音が視界を埋めた。

全く警戒していなかった無防備な背中や頭上に、これでもかと言わんばかりに攻撃が当たっていく。

光が滝のように流れ落ちる光景に、吹き飛ばされる鬼や土埃などは忘れ、僅かに見入る。

そのまま数十秒が経っただろうか。

目前に動く影はなく、残り半分も残りの天使達に鎮圧されたようだ。

——ただ1人を残して。

屍肉喰らいと一本鬼。絶えず打撃音が木霊するその両名には、防御という概念が存在しないかのように、互いに拳を繰り出している。

……まだ、敵はいる。

残っていた天使達の大半を消して、体力の余裕が生まれるよう工面した。

それでも、もはや自力で立っていられるだけの体力はなくて、勇丸に支えてもらってやっと立てている状況だ。一刻の猶予も許されない。

残り数十となった天使達を、決闘の場を囲むよう移動させる。

タイムン張ってる、なんて状況は気にしない。

それを見守る理由もないし、そこまで相手に思い入れがある訳でもないから。

よって、屍肉喰らいには渾身の一撃を放ってもらい、鬼の動きを一瞬止めてもらう。

（クリティカルな攻撃よろしく！）

「ガッ!？」

いい『ガッ』だ。ぬるぼって言っとくんだった。

モンゴリアンチョップが鬼の鎖骨に綺麗に決まり、悶絶するように呻き声を漏らす。

おお！ キラーカーンのモンゴル殺法！ と、もはや戦力差から生まれる余裕によって、軽くテンション上がるものの、まだそつち方面の気持ちになるには早いと自分を諫めた。

屍肉喰らいを消し、多々良を踏む鬼へと、何の通告もなく、天使の光弾を浴びせ掛ける。

10、20、30。

弾ける光の数が50を超えたかと判断した時、俺は攻撃を止めさせた。

見た目じゃオーバーキルっぽいが、相手は鬼。それもそのリーダー格のような奴が相手だ。

それに、そこいらじゅうに転がっている他の鬼も、天使との交戦でダメージは受けているが、手足ちょんぱだとか、内臓どろんだとか、そんな感じの致命傷だと思われる傷を受けている奴はいなかった。

天使が非力なのか鬼が強敵なのか、天使の光弾着弾の威力とか見ていると後者だと思っただが、とりあえずスプラッタな光景は確認出来ない。

微妙に肉の焦げた臭いが漂っているので、多少は火傷くらいはしているのだろうと――その程度で収まっているはずが無いのだが、そう思ってしまった。南無。

第17話　ぐだぐだな戦後

土煙が張れたそこに立っていたのは、もはや満身創痍の鬼だった。

衣類は所々千切れ、両手は垂れ下がり、足元はふらつき、けれど決して膝を折る事はないとも言つ風に。

（目だけギラつかせやがって……カッコいいじゃねえか）

これだけのことを仕出かせいか体内のアルコールが抜けてきて、幾分、思考の波が落ちついてきたお陰で、相手を多少は冷静に観察する事が出来た。

改めて周りの状況を見てみれば……、まあ、あの出来事にしてこの惨状あり、といったところか。

（――あ、おじさんとか子共達……村人のみんなも来てたのか）

啞然とした表情でこちらを見て『何なんだこの光景は』って顔を
していらっしゃる。

それもそうか。おじさんの家どころか、その周囲の建造物も跡形
もなく。

地形は変わり、焦げ臭い香りが漂い、鬼達が倒れ、天使達が浮き
――と、言葉にしても状況が掴めなさそうな現状だ。

ああ、どう話をしたもんなあ。

疲れてるんだよなあ、休みたいなあ。今なら3秒で眠れる自信が
ある。

このままだと本当にぶっ倒れてしまいそうなので、負担を減らす
よう、召喚していた方々に目を向けて。

（天使さん、お疲れ様でしたー）

ああ、帰り際の笑顔が素敵です。

にこやかに手を振る天使達を全て還しながら、勇丸と俺と鬼とい
う構図になった。

満身創痍の敵に、止めの有無を決定出来る俺。

……この状況なら語りの1つでも入れれば仲良くなれるんじゃない？　なんて思ってみたり。

これはあれだ。

敵が味方になるフラグに似ている——というか、そうに違いはない！

喧嘩が好きで、宴会が好きで。勝負事にはしつかりとした信念の下に、勝ち負けを潔く受け入れる種族だった筈だ。相手が嘘でもついていない限りは。

宣言なしのガチンコ勝負だったが、俺側は健全の、相手は疲労困憊どころか壊滅状態。勝敗は明らかだろう。

——村人達もそうだが、俺の命を奪おうとしたのだ。多少なりとも理不尽な要求は呑んでもらわねば。

勇丸を先頭にし、鬼へと近づく。

無用心だとは思ったが、相手はこちらに意識を向けることもなく、立っているだけで精一杯のようだった。

「おい」

鬼の目前。腕を伸ばせば届く距離で声をかける。

この距離ならば、例え勇丸であつても対処するのは不可能だろう。

ただし、今回の立場は逆。こちらが強者。あちらは弱者。

けれど、油断せず、慢心せず。

いつでも逃げれるように、重心は後ろに傾けながら。

本当は余裕な気持ちを出したいのだが、仮にも大妖怪の一角を担っている相手なだけあつて、勇丸を挟んで見ているだけでも、回れ右をして布団に籠っていたくなる。

『調子こいた』『距離詰めすぎた』と立ち止まってから思うが、ここまで来たのなら逃げられない。

後は、やるだけ。

自分で自分を追い込まねば動かない&動けない性格が恨めしい。

「おい、聞こえてるんだろ。目くらい見ろよ」

「……………うるせえ……………聞こえてるよ……………」

ゆっくりを目線をこちらに合わせる一本鬼に、それだけで体が縮み上がる。

それを拳を握り込むことで、体中に震え広がるのを抑えた。

今大事なのは、言葉と態度。

ここで舐められたら、俺は人生再スタートだ。死亡的な意味で。

「お前は負けた。分かるな？」

「……………ああ、味方は全滅。おいらはズタボロ……………完敗だよ」

「なら、もうこの村を襲うな。別に人を採って食うの事態は何も言わない。ただ、ここだけは襲うんじゃない」

「……………はあ？」

うむうむ、良い反応だ。

“おいら”なんて漫画の世界でしか聞いたことないが、東方世界だつてのと古代日本だとそれが普通なのかと思い、個性だと割り切つて流す事にする。

「おいら達を負かしたんだろ。だったらこの首取ってなんぼの関係じゃねえか」

「普通は、な。あー、どう言ったもんか……………」

勿論、ただの善意でこんな提案している訳ではない。

この鬼達を通じて、萃香や勇儀——他の鬼とエンカウントした時に、少しでも勝負にならないよう策を講じているだけ。

基本、俺は自分と関わりのない相手の心配までする事は無い。

過去にも言った気がするが、相手が頼ってきたとかならいいざ知らず、見ず知らずの誰かの為にがんばれる心は持ち合わせていないのだ。

それに、コイツらは食う為にこの里へ来たのだと言った。

腹が減れば誰でも何かを食べるし、誰もが持っているその欲求を否定など出来よう筈も無い。

ただ、仮に俺自身が——大切な何かがその欲求によって襲われたのだとしたら、話は別だ。弱肉強食の摂理に乗っ取り、抵抗という名の虐殺を行う用意はある。

よって、我が侘な俺の気持ちと生理現象を理解出来るが故の同情

を脳内裁判にて考慮し、ここだけ襲わないで下さいと言ってみた。

この出来事によって、前に見逃してもらった、とかそういう感じで話を広めてくれれば、少なくとも他の鬼達と出会った場合、即、死亡コースはないだろう。

今の俺ではあの鬼四天王に名を連ねている両名に勝てる気がせず、仮にあったとしても、周辺への被害の大きさとか未だ試した事の無いデッキだったり制限だったり、自身の死を考慮に入れないければ勝ちを得るのには、とてもとても。

死の門の悪魔は最後の手段その1で、ハルクフラッシュも強い事には変わらないのだが、雑魚相手なら兎も角、トップランカークラス相手には如何せん決め手に欠けるのが今回の戦闘での印象だ。

それに、ここで『萃香や勇儀さん達と仲良くしたいから』なんて説明してしまうと『何でお前がその2人を知っている』とかその辺の説明をしなければならぬ。

それは不味い。

知名度が高ければそれで通せそうなのだが、それ系の情報を仕入れていなかったので却下。

『実は転生前のゲームで……』なんて言える筈もなく、かといって鬼相手にまた嘘を付くのは頂けない。

よって、ここは強引に流す事にする。

「まあいいじゃないか。お前は敗者、俺は勝者。だったら大人しく言う事聞けってんだ」

「……………分かった。従おう」

すげえ！ 俺すげえ！ こんな厳つい相手を屈服させちゃったぜ！
（注・凄いのは天使やゾンビ、勇丸です）

勝敗を強調したせいか、口調まで従順になったのが気に掛かるが、これも弱肉強食の一環だと思って受け入れる。

つと、とりあえず、幾つか確認しないといけないことがあるので聞いてみることにしよう。

この辺を勘違いしていると、後々でしつぺ返しを受けてしまいそうだから。

「質問だ。鬼達の中ではお前らはどれくらいの強さなんだ？」

「……………大体真ん中くらいだ」

ふむふむ、これで鬼の強さの程度は分かった。これくらいで中なら、まあ納得の範囲内だろう。対処出来そう的な意味で。

能力も無さそうで、単純に豪腕の者が集まっているだけの相手。

まだ上がいるのかという不安と、これで対策を講じられるという安心感が湧き出てくる。

「次。お前ら、嘘は嫌いか？」

「ああ、大嫌いだ」

即答。

しかも“大”まで付くか。さっきはすまん事したかなあ。

勘違いしてはならないのが、鬼は本当に嘘が嫌いかどうか、という情報。

そしてそれは真実のようで、鬼という種族には、楔や自戒の類である、信念——もしくは生き様を貫く者達なのだと判断出来る。

幸いにして日本古事記というか東方プロジェクト通りの設定だった為、嘘を付くという地雷を回避するのは容易な部類だったが、これが未知だった場合には何かの拍子で踏みかねない。

ここを怠ってしまったのなら、俺は諏訪大戦と同じ類の苦渋を味わう事になる。

相手を知るには相手の恐怖——嫌だと思ふ事を知りなさい、と
サーヴァントとかで戦う話の某赤い悪魔は言っていた。

その為には、少なくとも原作で知っている設定を鵜呑みにせず、
せめて1度は自身で確かめてから行動を起こす方が良い。

その辺りさえ履き違えなければ、俺は今後もやっていけるだろう。

「最後だ。…………お前、酒好きか？」

「あ、ああ…………好き、だが……………」

いきなり方向性の違う質問に面食らったのか、若干詰まりながらも答えた。

そりゃそうだ。俺だって同じ状況ならば返答に困る。

で、鬼は酒好きって設定も合っていそうなので、媚売って仲良くなる為に、貢物でもしてみようかと思う今日この頃。……………という
か今。

縁も出来た。勝負も勝った。後は今後の付き合い方だが、選択肢は『無関心』『嫌悪』『好意』の3つが思い当たり、だったら『好意』一択だろうと思って、手に持っていたあれを目の前に掲げる。

それは、酒瓶。

戦闘の初めから終わりまでずっと持っていたそれは、傍から見ればさぞシユールな光景だっただろう。

ただ、それを見せられた一本鬼は、意味が分からないとばかりに困惑の色を浮かべる。

そういえば瓶なんて代物は、今の時代じゃ存在しなかったか。

村人達も初めてこれを見た時には何かの宝石か、なんて驚いていたし、今の時代は竹や動物の胃で出来た水筒、水瓶に瓢箪などが主流だった。

このような、無色の入れ物など全く未知の物質だろう。

「お前、名前は？」

「……………^{いっかく}一角」

「一角か。似合ってるな、カッコいいし。俺は九十九って言っただ、丁度淒く美味しい酒を持ってるんだが……………飲め」

「は、はぁ……………くれるんなら貰うけどよ……………」

そう言って、蓋を開けた酒瓶を渡して、ジェスチャーでラッパ飲

みをして見せ、はよ飲めと催促する。

俺が持っているのは『純米大吟醸』万寿。

最良という訳でもないが、それでもこの時代に現存するどの日本酒よりも美味いであろうという思惑はある。俺が気に入ってる部類の1つだ。

訝しむ様子を見せながらも、恐る恐る——じゃない！？ こいつ、一気に酒瓶を傾けやがった！

まるで胃へと直通しているかのように口に当てられた瓶の中身が減ってゆき、あっという間に空になる。河童と天狗は別としても、酒豪の名がこれ程似合う種族もそうは居ないだろう。

2リットル近くあった液体が完全に消え、鬼………一角は、まるで魂が抜け落ちたかのような、恍惚とした表情を浮かべた。

渡した酒に毒とか嫌がらせ用のただの水とかその手の考慮が全く無かったのは、俺を信用してくれたのか酒が好きだっただけなのか悩むところではある。

どう声をかけたものか。

酒の方はお気に召したようだが………これは樽で出すべきだっただろうか。

「……………うめえ」

「そ、そうか。気に入ってくれたようで何よりだ」

「もう、無いのか？」

「あるけど、疲れたかから今は厳しい。やったら気絶しそう」

「……………まだ出せるんだな？」

あ、あれ？ 今のところは『じゃあしょうがねえな』みたいに引き下がる場面じゃなかったか。

視線が結構致命的なレベルで睨まれていることが分かったので、ここは大人しく酒を出す事にする。やっぱ距離詰め過ぎたなあ（汗）
ここで選択肢を間違えたのなら、さっきも言ったとおり、人生リトライだ。何としても回避せねば。

「あ、ああ……………仕方ない。お前、寝ている俺を殺そうとかはしないよな？」

「当たり前だ。勝負に負けて、こんな美味い酒まで出してくれる奴の寝首を掻くような真似、この角に賭けてやらねえ。勿論、仲間にも言っただけで聞かせる」

殺気とはまた違った覇気に当てられて、ビビった俺は新しく酒を出す事にする。

鬼が手を出さないと言うのなら、それは本当なんだろう。

……ただ、威嚇というか最後の駄目押しで、一応こちらの力を見せておこうと思った。

そういう理由——力の誇示的な意味もあるのだが、内心はもっと別の事を考えていたり。

ここまでする意味は薄そうだが、やらないで何かあった時に、後悔したくない。

それに、何度も言うが、こちらは勝者なのだ。

少し位は役得があっても良い筈なのだ。自己満足的な意味合いで。

「嘘を言うようには見えないが、一応、もし破った場合には、酷い事になるってのを覚えておいてくれ」

「おいらが嘘を付くって言いたいのか」

けれど、それら自己満足は相手を見てから行えばよかったと、蛇に睨まれた蛙状態になりながら思った。

というかもつと事態は不味い方向へと行っている——軽く逆鱗を撫でているので、本音全開のぶっちゃけトークで会話を進める事にする。

じゃないと、瞬きをする間に俺の命が刈り取られてしまいそうで。

ここは1つ、テンション上げて押し切ってみるとしよう。

「違うんだ。さっきのは建前で……ようはお前に自慢したいんだよ。俺はまだもう少し余裕がありますって。偉ぶりたいんだよ天狗になりたいんだよ敵に恐れられる俺最高とか思いたいんだよ！ 言わせんなよ恥ずかしい！」

「あ、ああ、す、すまなかった？」

黙っていようと思っていたけれど、勢いに任せて言ったのが功を奏したようで、一角はこちらの勢いに負けて何を許したのか分からない謝罪を行ってきた。

とりあえずは流せたようだが、いやはや、参ったものだ。

アルコールは殆ど抜けた筈だが、まだ何処かに残っていたのかも
しれない。

普段なら口に出す事の無い『カッコイイ俺目指してます』トーク
もダバダバと出てきている。これくらいで済んだのは、はてさて幸
か不幸か。酒の勢い、恐るべし。

………けれど、俺が底の浅い優越感に浸りたくとも、使用可能な
カード枚数は“7”。

勇丸、ジャンドールから数えて、丁度7枚使い切ってしまったの
で、本来ならば、カードで何かするのは不可能であるのだが。

———諏訪大戦で判明したレベルアップ、最後の1つが使用枚数
の増加。

従来までは7枚のみだったが、今回からは8を乗り越して、9枚
に増えていた。

1段階ずつ制限が外れていくものだとはかり思っていたので、増
え方の規則性が掴めないが、一足飛びでレベルアップしてくのは決
して悪い事ではないので、とりあえずは諸手を上げて喜んだものだ。

マナのストックは後1。枚数にいたっては2。

マナ1の枚数2とはいえ、一応余裕を持たせて勝利を収められた

ことに安堵しながら、本当はこの戦闘中に使う予定だった呪文を思い描く。

それは、赤の火力呪文。

属性的に青に部類されそうなのだが、火力は赤が主流であり、破壊と混乱はこの色の特徴だ。MTG的には、赤を代表する呪文の1つである。

見た目が派手で、低コスト。それでいてこのランクでは最高クラスの威力なのだから、過去に使った【ショック】や【焦熱の槍】が不憫でしようがない。

使う呪文は『稲妻』

1マナにして無条件で3点のダメージを選んだ対象に与える、MTG界において、最高の火力呪文の一角として名高い、全ての火力カードの原点。

同じ使用マナで、過去使った火力呪文の【焦熱の槍】が1点、【ショック】が2点。それらと比較すると、とりあえずその強さを何となく分かっていただけだと思う。ちなみに1マナ4点ダメージを与えるカードは、デメリット付きでない限り存在せず、同性能の1マナ3点のダメージを与えるカードも、様々な制約付きでない限り存在しない。

名前からして危険な香りがするので使いどころに悩んでいたのだが、こんな場面だ。しっかり効果を確かめてみるとしよう。

さて、問題は何処に落とすか………なのだが。

山や平原とかだと燃えそうなのでアウト。平原なんて見えないけれど。

近場の木は論外で、後残っている場所と言えば………海。

これは上手くいけば、お魚もゲット出来て一石二鳥だろう。

考えもまとまったところで、改めて一角へと向き直る。

余裕が出てきたせいか、ただ怖かっただけの顔も、今ではことなく愛嬌のある表情を浮かべている気さえしてくる。気持ちの余裕って大事ね。

「分かった。そこまで言うのなら、お前を信じよう」

嘘が嫌いという言葉聞いた時から本当は信じていたのだが、
お前を認めたから俺は気を許した』的な台詞を言ってみる。 □

そう言って、周りを取り囲む村人達へと体を回転させた。

「誰か！ 俺が持っていた宝石の散りばめられた袋を………っとおじさん」

「あ、ああ………よく覚えてないんだが、持って来ちまった………」

溺れる者が掴む候補にジャン袋を追加すべきだろうか。酒瓶を持つてきた俺が言えた義理ではないが。

戸惑うおじさんに近づき、持っていたジャン袋を受け取る。

皆の顔は先ほどと変わる様子はなく、まるで事態が飲み込めていないといった表情だ。

説明しなきゃいけないかなあ。いけないよなあ。でも疲れてるし……… 一角に言ってもらうか。

「一角、後でここの人達に今までの出来事を説明してくれ。俺は疲れた」

そう言って、返事も待たずにジャン袋に手を突っ込む。

本当は樽で出したかったのだが、袋の取り出し口の大きさがサッカーやらバスケットボールくらいしかないのもう少し小さめの——ビアタンクとでも呼ぶのだろうか。

鋼鉄かステンレスか。何の素材で出来ているのかは分からないが、金属製の、居酒屋の隅に置いてあったり野球会場で売り子さんが背負っているあの容器に酒が入っているのを思い描きながら、取り出した。

普通はビールやらコーラやらの炭酸飲料を入れておく容器だった筈だが、まあこういう使い方もありだろう。

この線で合金とか貴金属とかの、金属チートとかも考えてみるかねえ。

金属製の容器もはやり始めて見るようで、鬼どころか村人達まで何を出したのかと覗くように、けれど彼らは近寄れずに遠巻きに眺めている。

それを、10本。

大体1つが20リットルくらいだから、結構な量を出したと思う。

出し入れだけで腕がパンパンになりそうで、さらに召喚の疲労から、戦闘の累計も合わさって、今にもぶっ倒れてしまいそうだ。

もはや立っていられずに、どかりと胡坐を掻いて地面に座っている状態に陥っているのが今の俺。

このまま宴会に突入出来そうな格好だが、それをしたのなら。俺はすぐさま気絶するだろう。

「ここをな？　こうやって緩めると蓋が取れるから、それで中身を取り出して飲んでくれ」

そう言って、開け方を実演。

推奨している方法がタンクからの直飲みだが、先ほどやっていた一升瓶のラッパ飲みを思い返してみれば、それでも問題はないだろうと内心苦笑する。

酒が絡んでいるせいか、一角の目つきは真剣そのもので、俺の一拳一動を逃さないとばかりに目を皿のようにして観察していた。

（鬼にビアタンの使い方を教える人間ってのも、何ともいえない状況だよなあ。写真にでも撮りたいねえ）

写真かあ。撮れるものならこの光景を残しておきたいと思いつつ、一角が実際に蓋を開けるのを見届ける。今度は絵でも描いてみるか。

パカッつと子気味の良い音を立てて開いた蓋に、驚きと小さな感動で鬼の表情がコロコロと変わる様は、とても貴重な出来事であったと思う。

そして、ここからが問題なのだが…………。

このビアタンク、言うまでもなく俺の時代で普通に使われていた代物の1つである。過去にジャン袋で出した食材——と一緒に出てくる食器類。

当然これらの品々を残しておくタイムパラドックスやら何やらが起こりそうなので、これらの処理は、それを取り出したジャン袋に再度突っ込んで念じれば消える、という方法を発見し、そうやって解決していた。

出した後の処理までしてくれるなんて、ジャン袋万能過ぎ。

とはいえ何でも回収してくれるものではなく、あくまで袋から出したものだけを処理するようで、食べ終えた食い散らかしの中に他の料理が混ざっていたりすると、少し悲惨な結果になるのだが。

「……………おい！ おじさん！ 後で漁に出て行くと良いよー。魚が一杯水面に浮いていると思うからー！」

遠巻きその1と化していたおじさんへ『投網の修理をしていたのだから、恐らく職は漁師なんだろっ』とかいい加減な決め付けで声

をかけ、ようやく夜も明けてきた海へと視線を向ける。

ああ、良い夜明けだ。“日本の夜明けぜよ”とか内心で某偉人風にキメながら、対象を沖合いに定めて……

（稲妻発動！！）

撃った。

途端、視界を朝日より赤白い光が満たす。

耳を覆いたくなるような雷鳴が響き、1本どころか幾本もの閃光となった稲妻が、“この辺”と思った箇所に降り注ぐ。

幾筋も閃光が走り雷鳴がつんざく空に目を細めながら、至近距離で使わなくて正解だったと安堵する。

効果は数秒もしないうちに終えたが、瞬時に立ち込めた大量の水蒸気が、その威力を物語っていた。

これで3点ダメージなのだから、クリーチャーと呪文の数値は別計算なのだろうかと朦朧とする思考の中で、俺の意識は闇へと溶けていった。

第18話 崇められて 強請られて

目が覚めた時に、見慣れない光景であることの多いのが、物語りの主人公というものだろう。

そこから新しいストーリーが始まり、胸躍らせる展開が広がってゆく。

アニメや漫画、ノベルでは、お約束の手法。

俺自身も、2度。転生直後と諏訪大戦終了後に味わった。

だからこれも……………

「おお、九十九様がお目覚めになられたぞ！」

「皆の者！ 祈れ！ 祈るのじゃあ！」

「頭が高いぞ！ もっと低くするんだ！」

……まあ……なんだ。

想定範囲内といえば、範囲内なのだろう。

差し込む光の加減から判断して、今は大体お昼くらいだろうか。

傍らに佇む勇丸は無言。

というか現状を分かっているけど、俺に対して害の無い行為だと判断した為に、護衛に徹しているだけっぽい。

気絶しても勇丸を維持し続けていられることに大きな躍進を感じながら、辺りを見回す。

誰の家だか分からないが、この村にしては結構大きな家。

そこに俺は寝かされていて、玄関先で様子を窺っていたであろう2、3人の村人が、呼び掛けに反応して続々と集まってきており、順に外で傳かすいてゆく。

では、一体何故室内に入ってきて来ないのかというと…………、

「おお、起きたか九十九」

俺の周り。

寝ていた布団の周囲に10人前後の鬼達が…………睨みながら視線を向けてきた。

うは、死にそう（汗

そう思っているのだが、勇丸はそんな彼らに顔すら向けずに、家の唯一の出入り口へと警戒心を傾けているだけだった。殺す気は無いって事なんだろうか。

そんな中、声の主である鬼の一角が陽気に声を掛けて来る。

声色に何となく喜びが含まれている気がするのだが、どうにも悪い予感しかない……………少なくとも、良い予感は全くしない。

「ああ、えっと……おはようございます」

「お、おう。おはよう」

丁寧な挨拶に驚きながら、一角は挨拶を返してくれた。

何はともあれ挨拶は大事だ。

人間関係のコミュニケーションの第一歩だね。相手は人外の代表だが。

「一角……現状説明よろしく」

「俺が説明したらこうなった」

それは分かってんねん。

だからそこに至る過程の説明をしてくれっちゅーとんねん。

「お、恐れながら、私で宜しければご説明致しますが……」

そう進言してくれたのは、飲み会の席で紹介された、ここの村長だった。

白髪の低身長猫背。杖は持っていないが、いかにも“村長”って印象の背格好をしていた。

この魔窟と化した室内にいる、ただ一人の純粋な人間。

その目には、若干の恐怖と畏怖が溶け込んでいるのが窺える。

周りに居る鬼達を警戒して……かと思ったが、彼のまとう空気です、鬼との戦いで使用した天使やゾンビといったカード効果を、俺の後ろに煤けて見ているような感じだった。

今までの俺を見る目は大道芸人のような扱いだったのが、一転してこの変わり様。

無碍にされてきたけれど一気に成長して立場逆転。な展開は好む所なのだが、そういったものは見下していた相手がいてこそ成立するもので、そこそこフレンドリーになっていた関係から今の状況では、寂しさだけが先行する形となって、心に若干の冷たさを残す。

（これじゃあ大和に居た時と大差なくなっちゃうなあ）

過去の対応から、この手の印象は中々拭えないものだと思われているので、何かを諦めるように、村長の対応の変化には黙認する。

それに、俺自身も痛いほどよく分かるのだ。

自身の殺生権を、気分や指先1つで決めてしまえる相手に対して“仲良くしろ”というのが無理な話である。

このような展開には今後、慣れていくしかないのだろう。

そう、ぼんやりと思った。

（何はともあれ、現状を把握しないと）

悲観的になったせいか、状況を冷めた気持ちで観察してみる。

すると、周囲を見回しただけで、昨晚の出来事が誰に言われるまでもなく漠然と理解出来てしまった。

食い散らかされた小皿や動物や魚の骨に皮。

何より、空になっているであろう、ひっくり返され、所々に傷や凹みのあるビアタンクを見れば、自ずと答えは導き出される。

それでも、やはり誰かの口から状況は聞いておいた方が良いでしょう。

と考え直して、改めて村長に訊ねる事にした。

「じゃあ、すみません。説明をお願いします」

大分人口の減った家屋に、俺と勇丸、一角に村長の4人が、部屋の中央に備え付けられている囲炉裏を囲って座っている。

鬼達がひしめき合っている先ほどの状況では、村長の心臓が止まりそう＆俺の心臓も止まりそうだったので、出て行ってもらったのだ。

『すみませんが、皆さん退出してもらえますか』と言うのにも胆力が必要だったが、意外にもすんなりと意見を聞き入れてくれて、驚いたものだ。

洪々家から出て行く鬼達を尻目に笑う一角が『ありゃあ、お前の

酒目当てさ』と言ってくれたので、寝起きのギンと刺さる視線の意味も理解出来た。

大体の経緯が分かり、俺へと殺気に似た意思をぶつけて来た鬼達へと話に移る。

なんでも、俺が倒れた後に目覚めた他の鬼達に——今までに飲んだ事の無いほど美味しい酒を味わった——と、一角が用意したビア Tank の半分以上を空にした後で言ったらしい。

で、1人でそれだけ飲んだものだから、当然他の鬼達に配分される分量は少なくなる。

まして鬼とはかなりの大酒飲みなのだから、各2〜3リットル程度じゃ舌は楽しませて腹を満たすまでには到達しなかったのだとか。

美味しい酒を味わって、“待て”を言い渡された犬のように、鬼達は酒を生み出してくれる俺が目覚めるまで、首を長くし、視線で壁に穴が開きそうなくらいに待っていたそうだ。

何人かは叩き起こしても酒を出させようと行動に移ろうとしたのだが、それを一角や勇丸が目線だけで鎮圧していた——と。玄関で動くに動けず様子を見守る羽目になっていた村長から聞いた時は、今自分の命があることに安堵し、2人に感謝したものだ。

その後、村長から今までの出来事を聞いた。

鬼達がココへ襲いに来た事。

それを俺が式神を使い撃退した事。

見たことも無い酒や食材を出し、天候を操り（稲妻の効果）、羽の生えた高潔な者から醜悪な異形の者まで使役、もしくは生み出している事から、ただの人などではなく、かなり偉い神様なのではないか、と予想した事。

顎で使うような真似をしたり、色々と無礼な態度を取ってしまい申し訳ありませんでした許して下さい。と最後に付け加え、村長は再び額を地面に擦りつける様に頭を下げる。

こういった状況は、俺があれこれ言うのも変に話が拗れるだけだと分かっていたので、ここは若干の弁解を入れつつ、一応相手の思う象徴になったつもりで、事を済ますとしよう。

「面を上げてください。俺は何も気にしていませんし、あなた方に対して何かしようとも思いません。むしろ、変に気を使われるより嬉しかったですよ？　ですので、難しいとは思いますが、今後とも前と変わらない態度で接していただければ嬉しいです」

「は、ですが……………しかし……………」

「無理にとは言いません。極力で構いませんので、ちょっと凄い人、程度を目指してもらえば、それで」

「はあ……………そう仰られるのでしたら……………何とか……………」

「はい、お願いします」

何か言いたげな村長を尻目に、とりあえず納得させたっぽいので一安心。

神であることは否定しなかったが、もう好きにしてって感じで、その勝手な解釈による後付設定は忘れる事にする。

今後同じような事があつた場合、一々誤解を解くのはかなりの手間が掛かりそうだ。諦めて、いつそ神と名乗ってしまおうかとも思ひ悩む。

「なあ、九十九」

「な、何だよ」

一角が、覗き込むようにこちらを見る。

面と向かって対峙すると、その威圧感がピリピリと肌に感じて、神気とはまた違った居心地の悪さを与えてきた。

狭い室内に、2 Mを超えようかという大男の鬼が居て、その角は天井に刺さってしまいそうなほど立派なものだから……逆立ちする亀や背筋を伸ばして移動する猿を見たような、そんな気持ちを掻き立てられる。

「酒、飲みたいんだ。出してくれ」

その珍獣が、手に持っているものを差し出してきた。

一体何が、と目を向けてみれば、それはかつて“ジャンドールの鞍袋”と名の付いた、煌びやかな宝石袋であった。

『ああ、この袋も消えずに残っていたのか』なんて思ったのも束の間——それが今では、ボロ絹のような醜態に……。

装飾品は所々欠損し、真つ二つに引き裂かれたその姿は、どこをどうすればこのような状態になるのか、俺を悩ませる。

「何やったんだ」

「あ、ああ。みんなが酒飲みたいって——」

「分かった。もう分かった。何も言っな」

ボロ雑巾になったジャン袋を消しながら、搾り出すように答えた。
頭が痛くなる。

思わずため息がこぼれ、ああもう、という気持ちで胸が一杯になった。

今の言葉だけで、この惨状が出来上がるまでの工程が用意に想像出来る。

という事は、だ。

過去、ジャン袋を他人に使わせた事は無かったが、どうやら俺以外の相手には能力を使用出来ないようだ。

きつと『これを使って酒を出していたんだぜ！』とかそういったノリで色々弄繰り回した拳句、このような無残な姿を晒す事になったのだろう。

「……………一応、その袋、俺のなんだよ。……………何か言う事は無いのか？」

「ここまでやらかしたら、言葉なんて酒気の抜けた酒のようなものだ。覚悟は出来てる。ドンと来い！」

そんな言葉は知らないが、ニュアンスは何となく伝わってくる。

だが、それが何の慰めになるというのだろう。

何故胸を張る。何故自慢げな態度なのよ。少しはバツの悪そうな顔をしなさい。

しかしカードでも使わない限り、俺がどんな攻撃をしてもコイツはケロっとしてるであろう耐久力を持っている。

……ムカつくぜ。

ということで、バッターチェンジ！

背番号19、今田家の獵犬、勇丸。

「勇丸、良いか？ あの角が骨だと思え。きつと齧り甲斐あるぞ。バリバリ良い音がする筈だ」

「ぬお！ 誰かにやらせるなんて卑怯だぞ！」

すくと立ち上がった勇丸よりも早く、一角は非難の視線をこちらに向けながら、角をサッと両手で隠した。

何が卑怯だ。そんな顔したいのはこっちだつうの。

というか、お前の角、めっちゃ頑丈じゃないか。ゾンビに殴られてもビクとしなかっただろうに。齧られるという行為が生理的に嫌なんだろうか……。

「もういいや……。で、経緯は分かった。一角達は俺が出す酒目当てで残った、と。そういうこと？」

「ああ、出せるんだろ？ 酒。ぶっ倒れる寸前でそこそこな量を出せたんだ。休んだ今ならもつといけるよな？」

「（ビアタンク20本がそこそこって……）……いけるけど、何でそんなにお前らへ奉仕しなきゃいけないのよ」

「飲みたいから」

「……俺はサービスする理由を聞いたんだっつうの。お前の理由なんか聞いてないってえの。」

「さっきといい今といい、本当、少しは悩んで言葉を出しなさいよ、もう。」

「じゃあ何かくれよ。奢りっぱなしじゃ面白くない」

「んー、じゃあ打出の小づつ……」

「——待て、それはいけない」

今サラツと日本童話の伝説級アイテムの名前が挙がった気がする。

それを貰ってしまったら、恐らく小さな人の物語が日本から消えてしまっただろう。というか、実話だったのか？ あの話。

ってかそれを使って酒を出せないもんなんだろうか……。出せないんだろうな。俺に頼るくらいだし。

どうもこれ以上物を催促すると、やばいことになりそうだと判断。酒を出せ、という要求を飲む事にし、仕方なく他の案を考える。

コイツの目を見て分かったのだ。

俺がこの事態を回避するには、言葉では防げず、殺す殺さないのところにまで行かなければならないのだと。

逃げたら何処までも追ってきそうだし。

さて、ならどうしたものかと有効そうな要求を考えてみる。

アイテム系は色んな意味で危ないからダメ。なら約束を増やして

みるか、と都合の良い案を探す。

俺に一生服従？ ……面倒見きれない＆見たくないのて却下。

萃香や勇儀を紹介してもらうつ？ 自分から墓穴を掘る必要もない。

ならば、鬼達と出会った時にいざこざが起こった際のストッパー係りが無難なところだろうか。

ただ、他の鬼ならいざ知らず、四天王を相手に、それより下の者が対処し切れるとは思えない。

……仕方ない。別に今すぐ決めなければならない、という訳でもないのだ。お願い聞いてもらう券は、今後の為に取っておくしよう。

「じゃあ、いつか俺の頼みを聞いてくれよ。あんまり無茶な事なら断って良いから」

「何水臭い事言っただ。頼みたいならいつでも頼め。何度だって答えてやる」

……いつの間にそんな間柄となったのか分からないが、ちょっと発言が男らしいと思ったので、それでも良いかなと考えてしまう。

——これって、つまりは友達かな？ という考えに辿り着いた。

大和でも男の知り合いは居たが、誰もが偉い人やら神といったフイルターを通してしか接してくれず、唯一友達のように付き合ってくれた例外は子供達位だったけれど——大人の相手だって欲しい。友情にも様々な形があるのは分かっていてもりだが、今の俺は無邪気にはしゃぐだけの関係では満足出来なくなってきた。

自身の価値観を共有出来る相手が欲しいのだ。

……相手は、鬼。

人を襲い、妖怪を束ね、強き者として君臨する日本妖怪の頭。

人間側から見れば、恐怖以外の何者でもないだろう。

幾ばくかの良好な関係がある人や村の話は聞き及んでいるものの、どれも御伽噺の域を出ない程度。

この鬼—— 一角だって、村への襲撃は初めてではない筈だ。

それはつまり、過去何度も村を襲い、人々を食ってきた事に繋がる。

「……………一角」

「おう」

「お前、今まで人間を何人くらい食った？」

「…………… 女子供含めて、100人以上は食ってる。何だ、やっぱり首が欲しくなったか？」

俺が何を聞きたいのか理解したのか、少々考え込む素振りを見せ、返答に態々“女子供”まで付け加えてきた。

意図を掴んでいてそれを言ったのだ。

自分の発言1つで、また先ほどの戦闘が起こりえる事など分かっているだろうに。

けれど、何ら後ろめたい出来事など無いと言わんばかりに、真っ直ぐに答えてくれた。

人を襲い、人を攫い、人を喰らい、人に恐れられ。

因果応報の覚悟を伴い、自分が決めたの“理”に身を委ね貫き通す。

貫く姿勢への憧れと、平穩を謳歌していたであろう人々が無残に食い散らかされている場面が脳裏を掠め――。

「…………いや、いいんだ。ちょっと聞いてみたかったただけだから」

俺は人間寄りの勢力では無くなってきたのかもしれない。

見ず知らずの他人とはいえ、仮にも同じ種族を捕食する相手に対して好意を感じているのだから。

この辺はアニメや漫画の“偏ってる俺カッコイイ”の影響なのだろうか。

明確な理由は言葉に出来ないが、『我ながら変わっているな………』と自分を他人事のように、そう思った。

…………とりあえず、これは保留だ。

何も今結論を出す必要も感じないし、二つの狭間で苦悩する主人公を演じる気も無い。

答えを出さなければならぬ時になったら、自然と心が判断してくれるだろう。

何より、先ほどから続々と集まってくる村人達が地面で土下座を続けているというのが、心情的に頂けない。

こっち側の話に集中し過ぎたか、と20を超える人々を見ながら、この状況を解散させるべく声を掛けた。

「後は私と鬼で話をつけますから、皆さんは各々の仕事へ戻って下さい。……………一角、壊した家、直しておけよ。じゃなきゃ酒はやらん」

「分かった。すぐ取り掛かる」

そのまま、有無を言わず入り口に向かい、周囲に居た鬼達へと声を掛けながら遠ざかっていく。

海を割ったモーゼの如く、村人達に距離を取られながら、おじさんの家へと向かっていく。

それに刺激されたように、周りに集まっていた人達も散り散りになる。

……………村人だけを解散させるつもりが、指示の出し方を間違えて、全員居なくなってしまった。

今までぎゅうぎゅうだった室内が急に閑散として、1人と1匹がぽつんと残される。

な、なにこの放置プレイ。

唐突に手持ち無沙汰になった俺を慰めるかのように、勇丸が鼻を腰へ軽く擦り付ける。

うう、すまんなあダメな主で。

頭をワシャワシャ搔いてやると、相棒は気持ち良さそうに目を細め『いつまでも撫でてくれ』——と。言葉にも態度にも出さないが、何となく俺がそう思ってるんだろっなと感じたので、撫で続けることにした。

第19話 浜鍋

やや肌寒い風が、俺が休んでいる屋内を通り過ぎる。

日も傾き、そろそろ夕暮れに差し掛かる時間帯。

誰が訪れる事も無く。自身も動こうとしない為、外から聞こえてくる木を打ち付ける音や、時折響く人々や鬼、鳥などの獣の声だけが俺の周りを支配していた。

今回の出来事——戦闘を振り返る。

戦果は快勝。

苦戦する場面もなく、体力面での時間制限は問題だが、中ランクの鬼達相手にこの出来栄えならば、ギリギリ及第点の自己評価を付けても良いだろう。

しかし、改善点が多々出てきたのは、喜ぶべきか悲しむべきか。

ハルクフラッシュ。

数十体の天使と、1体のゾンビによる軍団。

俺の体力が増えたのなら、いずれ天使達は3桁の大台にまで増やす事が出来るだろう。

けれど、元の数値が2/2である天使達の攻撃は、恐らく3/3
→5/5である鬼達の進行を止めるのにも一苦労。

切り札であった30/30以上の修正を受けていた筈のゾンビは、
どのような制約が掛かったのか、その馬鹿げた数値が発揮されているとは思えない状況を一角との戦闘で示唆していた。

つまり、仮に一騎当千や国士無双級のエース……………この世界を
基準に考えるのなら、絡め手が主体なスキマや亡霊姫といった方々
は除外するとしても、鬼の四天王やスカーレット姉妹、フラワーマ
スターに神の残り火を使う鳥さんなどが出張ってきた場合への対抗
が難しい。

……………神奈子さんが味方で良かった。最悪泣き付いて助けてもら
うのも……………あ……………壮絶にカッコ悪い展開なので、最終手段の
1つに入れておく事にしなければ。

選択肢は無いよりあった方が良かったらう。絶対回避したい事態で
はあるが。

で、対抗策を考える事にする。

雨だれ石を穿つ作戦はやや効力に難有り。よって、小出しに連続
でダメージを与える線ではなく、1発に威力を集中させる……………先
の死の門の悪魔などの、大体5/5以上を指す場合が多い『ファッ

ティ』と呼ばれる大型クリーチャーが望ましい。

よって、1枚で多大な効果を発揮するカードを使うのが無難、ということなのかもしれない。

と、前方に誰かの気配を感じる。

どれ、と顔をそちらに向けてみれば——玄関に男が1人。

「おじさん……………」

「……………おつ」

体の所々が濡れ、水浴び……………な訳はないから、恐らく漁から帰ってきたのだろう。

手には何も持っていないようだが、乗っていた船にでも置いてきたのだろうか。

ただおじさんは、家を壊されている。現在鬼達が急遽建造しているとはいえ、思い入れがあるものであった筈だ。

俺の気持ち1つで鬼達を許し、この村への略奪を止めるように言い聞かせたが、村人達の……………家を壊されたおじさん達の不満が消えた訳ではない。

『力のない者の宿命だ』とか言ってその手の考えを切り捨てても良いのだが、生憎それを行うには、親切にされ過ぎた。情の1つくらいは移ってしまう。

「……………体は、もういいのか？」

「ええ、お陰様で。全快とまではいきませんが、普通に生活する分には何の支障ありませんよ」

「そうか……………」

そう言って、おじさんは言葉を切った。

いや、何か言おうとして、それが口に出せないでいる様だ。

そのまま、俺達の間を風が通り過ぎる。

視線を泳がせ、何度か口を湿らせて。

そして、意を決したように、ぽつりぽつりと話し出した。

「……………今更なのは分かってる。言葉遣いも同じだ。謝って済むとは思っていないが、言わせて欲しい。——済まなかった。俺に出来る事なら何でもする」

済まなかった、の部分で、玄関先の地面に頭を付けて、土下座を行ってきた。

参った。

雰囲気からして予想はしていたけれど、おじさんからすると土下座するレベルの問題だったらしい。

気にしていないと村長に言っただけだった故か、まだおじさんには伝わっていないようだ。

この村で一番良くしてくれた相手ただけに、この変わり様は、中々に応えるものがある。

「……………謝罪を受けます。ただ、私はあなた方と接していて、一度たりとも気分を害した事はありません。ですので、出来る限り今まで通りに接してくれる事。これが、私がおじさん——この村の方々に望む事です」

「九十九……………兄ちゃんは……………それでいいのか？」

「良いも何も、それを望んでいるんですよ。鬼退治とか雷を落とすとか色々やりましたが、これでも小心者です。平伏されるよりは、手を手を取り合って笑顔でいたいんです」

「……………そうか……………分かった。言つとおりにしよう」

何とか条件は飲んでくれた様で、渋々……………というよりは『これで本当に良いのか?』といった様子で引き下がってくれた。

しばらくはギクシャクした関係になるだろうが、このおじさんとは、また元通りの接し方に戻って欲しいという願いがあった。

真っ白い犬を連れた真っ白い男と、見るからに怪しい相手を自分の家に招き入れ、宴会の席では、俺と村人との架け橋を買って出してくれた親切な人。

一度優しさを知った分、そんな人から今後ずっと他人行儀にされた日には、俺の心にはまた1つ、消えない傷が残りそうだ。

なので、少しでもこの空気を払拭するべく、別の話題に切り替える。

「あゝ、おじさんは、漁の帰りですか? 鬼とか居て大変だったでしょ」

「———そうだな、俺なんかあんまり怖いもんだから、お前の言つたとおり、すぐ漁に出ちまったよ」

こちらの意図を察してくれたようで、少し詰まりながらも返答をしてくれた。

「確かに。あいつらおつきいですからね。威圧感とかハンパないですよ」

「お陰で村長がみんなの代表という名の人身御供になって、お前の世話をする事になったんだぞ。あの鬼達が宴会やらかす中で……とても生きた心地はしなかっただろうな」

「うっ、そうですか……。後でお礼言っておきます」

それは何ともバツの悪い役目を押し付けてしまった。

意図せずの結果とはいえ、俺の為に老骨に無理打ちながら、がんばってくれたのだ。

後でお礼の1つでもしておこう。

「——お礼と言えば、こっちもまだ言っていなかったな……。ありがとう、九十九。お前のお陰で、村の人間は全員無事だ。助かったよ」

そう言って、おじさんは潮風と土埃で汚れた顔を、笑顔で飾りながら向けてきた。

思えば、村長からは許しを請う言葉しか受けとっていなかった。

神が生きる時代から、日本人とは謝罪を第一にするものかと思いに耽ると同時、感謝を言ってくれたおじさんに心が温かくなる。

過程はともあれ、誰かに感謝されるのは気分が良い。

今後はこのような場面に出会ったら、謝罪と同時に感謝を述べるように広めていこうと思う。

……状況を鑑みるに、少なくとも今起こった状況下でそれをするのは、すつごく言い難いだろうけれど。

「そう言って貰えて何よりです。がんばった甲斐がありました。今、おじさんの家とかその他壊れた諸々を鬼達に直させてますんで、何日か分かりませんが、しばらく待っていて下さい」

「鬼の手作りか……縁起が良いやら悪いやら——くくっ」

「ですかねえ……ぷっ」

“災害を擬人化したような相手が作る家に住む”というコンセプト

が互いにツボに入ったようで、それぞれ忍び笑いから、声を荒げての笑いに変わる。

先程までの空気は嘘のように消え去り、今はただ馬鹿話に花を咲かせる男が2人——と1匹。

「そういえば、ちゃんとした紹介がまだでしたね。俺の事は言ったので……こいつは俺の友達——や、その他諸々を兼用している、勇丸って言っんです。とっても頼りになる相棒ですよ」

傍らで顔を伏せていた勇丸に視線を向け、こいつがそうですよ、と示してみる。

そんな忠犬はその意図を組み、おじさんの方へ目を細めながら、軽く会釈をして、また顔を伏せた。

ちよつとドライな挨拶だが、元々あまり感情などを表現することの少ない奴だ。これくらは愛嬌の内に入るだろう。

「ただの犬じゃねえとは思っていたが、賢いワンコなんだな。おつと、俺の名前は太郎。宜しくな、勇丸」

告げてから、勇丸の伏せられた頭を、ごつい手でわしゃわしゃと撫でる。

相棒はちよつと迷惑そうに鼻息を一つ吐くと、後はただされるがままに状況に身を任せた。

………つてか、これだけ一緒に居て、未だにおじさんの名前を尋ねていなかった事へ、自分自身に対して軽く驚いた。

転生前はそんな事無かった筈だが、こっちに來てからは気づかない内に、名前に対してはあまり執着しないんだろうか。

それとも東方世界で作品に出ていない方々への世界的な修正なんだろうか。まあ、細かい事は気にしないでおう。

しかし、太郎か。

………ありきたりだよなあ、まさにモブその1の名前って感じじゃないか（かなり失礼です）。

「そういえば、おじさんってさっきまで漁に行ってたんですね。どうでしたか？」

名前を知った直後だが、名前で呼ぶのも照れ臭いので、おじさんで通す事に決めた。

そんでもって、あの後おじさんは何をやっていたのが気になつて尋ねてみたる。『収穫量はどんなのよ、と』。

稲妻をぶつ放した張本人としては感心が大いにある訳で。

これが成功していたら、上手くすれば簡単に大量の食材をゲット出来る方法が確立する。

ただ、生態系への影響が怖いってのもあるので、あまり多様出来るものではないのだけれど。

「おお、お前の言ったとおり、大小色々な魚が浮いててな。投網をすくう様に使ったのは初めてだったな。期待していいぞ。今夜は浜鍋だ！」

ニカツと海の男らしい笑顔を作り、心底嬉しそうに話してくれた。

喜んでもらえて何よりだと思う一方、作ってもらえる料理に若干の不安が過ぎる。

浜鍋。

確か海産の幸をこれでもかとお鍋に投入した具沢山の“味噌”汁を思い浮かべるのだが……。

「浜鍋、ですか。どんな料理なんです？」

「おう、取ってきた魚を適当な大きさに切って、それを大鍋でざっと煮込んで食べるんだ」

「塩味ですか？」

「？ そりゃそうだろ。お前のところだと、他の調味料でも入れて食うのか？」

予感的中。

『何言ってるんのお前』的に返答された内容に、思わず眉間に皺が寄る。

海産の塩味スープ。悪くは無いのだが、やっぱり数年前まで世界中の調味料が手に入る国で過ごしていた身分としては、それだけの味付けでは腹は膨れても心は満たされそうに無い。

思えば歓迎会と名ばかりの宴会では、酒は振舞ってもおつまみ——食べ物系は殆ど出していない。

というのも、宴会開始時に用意されていた料理が多すぎて、俺が準備しなくても充分な量が確保出来ていたからだ。

新しく大量に品を出して、他の食べ物を腐らせる気はなかったの
で、何かお礼にと思って出したのが、浜辺では入手困難そうなキユ

ウリの浅漬けとかそういったものだっただけ。

（そういえば味噌とか醤油とかは振舞ってなかったもんなあ）

そうと決まれば即行動。

体力は………全快ではないが、大体は回復しただろうか。夜にでもなれば元通りになるだろうし。

これなら一角の要望に答えられるだろうかと目安を立てたところで、固まった体を解しながら立ち上がる。

「おじさん、料理なんですけど、俺に作らせてもらえませんか？」

「おいおい、主賓に宴会の準備をさせる訳にやあいかねえだろう」

それはそうなのだが、それを許してしまうとちょっと残念な未来が待っているの、出来れば回避したい。

「料理作るのが趣味なんです。最近あまりやっていなかったん

で、久々にたくさん腕をふるう機会なものですから、是非にと思いまして」

「料理……ねえ……。そうまで言うなら良いけどよ。村全員が参加するんだ。昨日よりも少し増えるぞ？」

「あれ、昨日集まったのが全員じゃないんですか？」

「山に狩に行っていた連中がいたからな。本来ならまだしばらく山に籠って猟をするんだが、こんな事態になっただろ？ お前がぶつ倒れてからしばらくして、村長がそいつらを呼び戻す為に狼煙を上げてるんだ。夕暮れ前には戻ると思うぞ。8人、だったか。今回行った奴らは」

「分かりました。——今回は今までに無いくらい大量に作らないといけないですからね。鬼的な意味で」

「……そうか、あいつらが居るのを忘れてた。やっぱり宴会は一緒にやる流れになるのか？ 申し訳ないんだが、こっちの様子次第じゃあ俺達は不参加って形になるかもしれん」

「その場合は仕方ないですね。あんな魔窟の中で宴会をしたい、なんて思う方が稀ですし」

「すまんなあ兄ちゃん」

すまなそうにするおじさんだったが、その気持ちは充分に分かるので、苦笑で返事をする。

ここの人達には次回により豪勢な食事やらを用意して勘弁してもらおうと思う。

「じゃあ、こここの辺りで一番大きな台所あったら貸して頂けませんか？ 出来れば食材も」

「右隣の家が結構広かった筈だから、話をつけておくぞ。後、食材は半分くらいは残しておいてくれれば良いさ。どうせ村の全員で一生懸命食べても、食べ切れずに腐らせちゃうしな」

保存用にも限界あるしな。

そう締めくくって、おじさんは隣の家へと向かって行った。

鬼の宴会を取り仕切る羽目になるとは思ってもみなかったが、あれだけの大酒飲みなのだ。きつと食べる量だって凄い筈。

恐らく今までに無いくらいジャン袋を多様する事態になるだろうと予想しながら、俺と勇丸もおじさんの後へと続いて出て行った。

第19話 浜鍋（後書き）

いつも通りだ。

世間様が休んでいる時に、仕事をする。

それは、それだけの需要がある為であり、それだけの見返りがあるから。

給料が良い。仕事が溜まっている。人手が足りないから。まあ、色々理由はあるだろう。

でなければ、誰が好き好んで、休日働くというのだ。

だというのに……。

12/19 15:00

「あ、roissinさん。今。。さんから連絡あつて、今週、金曜は『出』ですけど、土日、休みになるそうですよ」

「うえ！ 本当ですか。……なんでまた今年は」

「仕事もらってたあの会社、事業縮小だとかで……」

「あゝ……。聖なる夜間近だっというのに、世知辛い話ですね……。あゝあ、来年からのボーナス、減額かなあ」

「この業界で、小額とはいえボーナス出してるウチが稀ですよ。そう考えれば」

「ははは……。下を見たらキリありませんよ。上も、ですけど……。んー、時間空いちゃったなあ……。xxさんは、この休み、どうしますか？」

「ああ、彼女との予定を早めに始める感じで行こうかなって。コストコってお店、知ってますか？」

「ええ、会員ですから」

「お！ 私、そこ行こうと思ってるんですよ」

「あ、じゃあ、冷蔵庫はなるべく空にしておいて、なるべく早めに行っておいたほうが良いですよ。移動手段、車ですよ。外も中もめっちゃ混みますから。クリスマスだと、尚更。後、フードコートのホットドックはオススメですよ」

「参考にさせていただきますb。じゃあroissinさん、私はこれで」

「あ、はい。お疲れ様です」

「お先です」

良いなあ……

という感じで時間が空きましたので、更新に力を入れてみました。

今年の更新は、これで最後となります。書き始めた当初は、半年位で気力切れで絶筆のご報告などをするのかな、と漠然と考えていましたが、これも偏に、皆様のご声援があったが為です。『コメントは優しさだ』なんて、どこぞの誰からか聴いた言葉が、身に染みます。

来年も、詰めすぎず緩めすぎず、日進月歩の速度ではありますが、

更新を途切れさせない様に、がんばります。

今後とも、宜しくお願い致します。

皆様、良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9250u/>

東方ギャザリング

2011年12月26日07時51分発行